

二次元

10年間ありがとう! オレたちの戦いはこれからだ!!

cover illustration by
みやま零

2D DREAM MAGAZINE

2D DREAM MAGAZINE

新連載小説 明るく元気な魔法少女!

きらら★キララ

魔法少女ってたいへん!

さかき傘 & 浅沼克明

立ち読み版

大好評連載&読み切り小説

守護聖女 ゲーム化決定!

プリズムセイバー

空蟬×くまっち&船虫

蒼井村正×或十せわか

狩野景×緑木邑

木森山水道×牡丹

上田ながの×おちんさま

三津谷鷹介×井藤ななみ

特別付録



ぶっかけ ブツツカバー

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

成年向け雑誌

ニジマガ創刊10周年&60号!!

大感謝プレゼント祭開催!

大人気えっちマンガ&カラーマンガ

連載最終回!

超昂閃忍ハルカ

MISS BLACK

ばふえ/おおたたけし/琴慈
添い寝/老眼/NO.ゴメス
冷泉/嘉納あいら

特別
付録

ピンナップポスター

みやま零/シノ/いるまかり

vol.60

2011

10

DIGITAL
EDITION
デジタル版

ウイザード・プリンセス
魔装戦姫サラ
 ↳ 闇に抱かれ悦ぶ肢体

小説：O86タロー

イラスト：神保玉蘭

「消えなさい魔物たち！ 魔装戦姫はあなたたちを見逃しません！ 変身・ウイザードモード！」

赤く渦巻く空の中、壊れたビルに光輪が降り立つ。その中心には一人の少女らしき輪郭が浮いている。少女の周りは光が乱舞し、しなやかな肢体に向かつて勢いよく収束していく。

そして光が集まると、清らかなピンクのコスチュームとなって乙女を特別な存在へと変化させていた。金の長髪に着い瞳。十代後半くらいなの、しかし育つところは育った悩ましい起伏を持つミニスカートの乙女。彼女こそ、今、眼下で人々を食い荒らしている異形の魔物たちと戦う魔装戦姫、サラだった。

今も上空に開く魔界の門。そこから現れる魔物を討つのが、人ながら魔力を持ったサラの使命だった。「覚悟なさい！ プリズミック・レイン！」

彼女の強力な魔力の前には、魔物も次々と倒されていく。振られたワンドから光が瞬き、無数の光条が矢のごとく射抜く。瞬時に敵は一掃されていた。

だが、本人は力ある衣装を解くことなく、渦巻く赤色の空の大穴をじっと睨みつけている。

「日増しに魔物が増えている。このままじゃ、いつか防ぎきれなくなる」

それを思うと、やはり大元を叩くしか解決策はない。あの穴の向こうにいますという魔王を倒すしか。「もう迷ってられない。わたしは、行きますっ！」

決心したサラは、大穴の奥へと宙を切り裂いた。だが、これは魔王の罠だった。元凶を叩くため本

丸に乗り込むなど誰でも考える策でしかなかった。魔界の門と思われたのは実は魔王の巨大な口で、サラはみすみす敵の体内に飛びこんでしまったのだ。「くっ、な、なぜ？ 魔力が、吸われるっ？」

サラは今、薄気味悪い粘膜状の肉洞の中で多くの触手に自由を奪われている。普段なら魔力で千切れるのだが、なぜかここでは魔力がジワジワと失われていく。突入した方がいいが、もう力が入らなかつた

「ふふふ、活きのよい魔力体だ。気に入ったぞ」「くっ、魔王！ 正々堂々と闘いなさいっ！」

重々しい声音が肉洞に響く。両腕両足を蔓に似た触手に拘束されて、サラは意気を返すしかない。

そんな美少女を嘲笑うように、触手はウネウネと肌という肌を這い回ってくる。すると、表面に染み出る透明な粘液が腕や足にしみ込んできて。

「んんっ？ あ、あはあ……な、なに？ これは？」「そう虚勢を張ることもない。我がお前に魔力を与えてやろうというのだ」

我が身に起こる変化に戸惑うサラ。その起伏豊かな肢体はパンザイをしてM字開脚をさせられている。小玉メロンのような乳房は身動きに合わせて柔らかに揺れる。肉付いたヒップも雄の獣性を刺激する

そして、白い美肌にヌルヌルと粘液が広げられると「んああっ？ いやっ、あはあっ。は、肌が、痺れるようにっ？」

思わず甲高い声が漏れてしまった。まるでジンワリと熱い何かが染み入ってくるようで、肌の表面が妙に敏感になってくるのが分かる。

「気持ちよからう？ その粘液には私の魔力が混じっている。それを受け入れれば力が漲ってくるぞ？」

「そんな？ こんな、気持ち悪いのに、んああっ？」——ぬちゅりっ、にゅりにゅりりりっ。

むき出しの上腕が、太腿が、胸の谷間が、粘濡れた蔓にゆつくり撫でられぞわぞわとした愉悅を覚え

させられる。自覚すると、確かに魔力が肌から染み渡ってくるのがわかった。

魔装戦姫のスーツも濡れて不快なヌメリとなってくる。だというのに、人肌のような生温かさに微量の魔力が塗られていて、若い処女肌が不思議な悦びを感じてしまう。

そんな自分が恥ずかしくて、ついくびれた腰をくねらせるサラ。が、短いスカートの奥、純白のショーツに蔓が忍び込むと、堪らず腰が跳ねてしまった。「ひゃあああんっ!! あっあっ、だめソコおっ！」

（は、恥ずかしこっ撫でられて、気持ちよくなる）そこは、ショーツにも負けぬ美白の柔らかい肉の土手。中央にピンクの亀裂を持つ無毛でツルツルの乙女の秘所だ。そこに触手が優しく粘液を塗り込むと、物凄い淫熱が腰を鋭く焼いていた。

だがそれは、クツクツと沸き立つような不思議な愉悅。下腹の奥に熱が溜まって心地よい魔力が広がってくるのだ。処女の恥裂がヒクリと疼いて淫らな蜜を零してしまふ。

「気持ちよからう？ 我に身を任せれば、もつと魔力を注いでやろう」

「だ、誰がつ、あ!! あああんっ！」

必死に拒絶を表すサラだが、敏感なクリトリスを触られては甘い鼻声は隠せない。ショーツがずらされ恥ずかしいが、ピンクの粘膜を触手に這われて雌の感覚が殺しきれない。

（あああ、ま、魔力が、なにかが、欲しく……）

覗く乳肌にも粘液が塗られて胸の奥もドクドク脈打ち、しみ入る魔力はどうしようもなく心地よい。少しづつ満たされていく感覚。なのに何か物足りない感覚。それらが心を支配していき、ついに乙女は

「はあ……はあ……ま、魔力……くだ、さい……」

魔力さえあればこんな危機も——そんな甘い希望もあつて、魔王相手に懇願してしまふ。



特務戦士マイ く触手に狂うパーズンボディ

小 説：O86タロー

イラスト：霞名は「ロー

「はああつ！ くらえ異星人ども！」

赤い光線が瓦礫と埃の高層ビルを縫って降り注ぐ。それらは灼熱の力でもって地を這う巨大昆虫どもを次々と撃ち抜いていく。

それを追うように着地したのは、長い髪をマントとした気の強そうな漂々しい一人の美女だった。

だが、ただの美女ではない。小さな粒子が密集してきて白い肌を包み込んでいく。よく実ったバストとヒップ。躍動感溢れる肢体。それらは刹那だけむ

き出したが、粒子が形をなしていくとそれは近未来的なスーツとなって美女を武装変身させていた。

それは戦闘用の特殊スーツ。幾何学的なラインを持つ頭部以外のすべてを覆う肉體強化スーツだった。

彼女、マイは地球を守る防衛軍の特務戦闘員だった。地球に飛来した謎の機械生命体に対抗するべく日夜戦っている。今もまた、新種の機械生命体が現れたと聞いて一人現場に急行してきた。

相手は主に地球生命を模した兵器を使用して侵略してくる。昆虫であったり爬虫類であったり。巨大化すれば奇怪なそれらを、スーツの助けを得て飛び、かわし、強力なブラスタガンで排除していくマイ。

その手並みは鮮やかだったが、しかし今回は判断を誤ったと言える。逃げ惑う市民に心逸らされ未知の新種相手に単身で挑んでしまったのだ。

「くっ、しまった？ 何こいつ？ こんなタイプ、今までなかった」

その新種は機械でありながら生物的。いや、それは他も同様だが、普通は存在しない生命体型なのだ。

「はああつ！ くらえ異星人ども！」

いわゆる触手というやつか。二十本以上ものへびに似た触手たちが、妙な粘液まで滴らせてウネウネとマイを搦め捕ってくる。数に圧倒され、腕や足を拘束されてしまう。いくら強力な戦士でも、戦術的援護やサポートがなければ危険なのが現実なのだ。

「この放せつ！ つえ？ いやつ、何こいつつ!!」

（そんな？ む、胸つ、アソコつ、擦りついてつ!!）

耐久、耐弾性に優れた戦闘スーツだが運動性維持のため柔軟でもある。くつきりと浮かび上がった豊かな乳房を、レオタードのような魅力の股間を、へびのような機械触手は撫でるように這い回った。

すると、感覚も強化された皮膚に、ジワジワと甘やかな痺れが広がり怒気に艶が混じってしまう。

「んあつ……ああ……や、やめなさいつ、そんな……お、女の、弱いトコつ……」

異星人どころか男にさえ触らせぬ乙女肌が、不可思議にも高揚していく。機械の蔓はなぜか生暖かく、メロンのような巨乳を巻くとヌルリと粘液で濡らし、ゆつくりと官能的に搾り上げてくる。

（く、そんなつ？ 胸、搾られて、き、気持ちよく？）

若い脂肪がタプりと揺らぎ、先の恥突がプクリと膨らむ。人にあらざる異質な刺激が乙女を喘がせ艶やかな長髪も躍らせる。

ピリリと胸元が破れて触手が内側に入り込むと、人外相手でも羞恥心が高められる。整った美顔が赤く染められ、汗を浮かせて昂りを魅せる。

そして、乙女の急所、柔らかな肉土手を湿ったカリ首で小突かれると、女体の肉欲が煽られてしまつて堪らずマイは鳴いてしまった。

「ひゃんつ?! あ、あだだめえ……ソ、ソコは、アタシの、大事なトコなの……!!」

スーツを破られ雄のように侵入される——そんな妄想が背筋を走り、自然とヒダが潤ってくる。力強

い触手の、しかし丁寧な拘束愛撫が女の本能を確実に目覚めさせていく。敵に捕まりいつ殺されるやもしれないという恐怖さえもが、心音を高めて淫らな欲求にすり替えていく。

そして——マイの期待を悟つたように、金属製の触手ベニスは先から細いマニピュレータを出すど、胸と股間の戦闘スーツを息に破いてみせたのだ。

「ああつ！ いやつ！ 胸つ、おんこつ、み、見えて——!!」

生地を失った胸元からは、若く柔らかな巨乳が二つ、プルルツ！ と元気よくまろび出てきた。濃いピンクの先端はすつかり尖ってしまっているし、美白の肌はしつとりと汗ばみ雌の匂いを香らせている。

何より、顕あはになった若い処女膣はタププリの愛蜜で潤っていて、薄い淫毛をテラテラと輝かせていた。

（い、いやあ。こんな街中で、捕まって大股開いておっぱいとおまんこ、見せびらかすなんてえつ）

一旦は戦場と化した街だが、今はマイが捕まったせいか静けさを取り戻している。きつと住民も不思議に思い、そこかしこから外を覗いているはずだ。

ほら、今も数人の男が、フラフラとこちらに歩み寄つて——と、そこまで考えてマイは愕然とした。

なぜならその男たちは、目の焦点が合わずに下卑た笑みを浮かべているからだ。いや、何より彼らは、この非常時に全裸で男根もむき出しだったのだ。

「い、一体どうして？ そ、それに、ああ、みんな……ぼ、勃起させて……!!」

明らかに異常だった。強いて言うなら夢遊病か。しかし彼らは確実にマイをお目当てとしており、拘束されているのにも関係なく彼女を取り囲んでくる。

そしてマイは、そんな男たちに大股開きで触手にクレヴァアスを甘擦れながら淫らな予感に苛まれる。

（あ、アタシ、この人たちに犯されるの？ ……だつてみんな、目がおかしくて、きつと操られて……）

（あ、アタシ、この人たちに犯されるの？ ……だつてみんな、目がおかしくて、きつと操られて……）



つよきすの3学期のさかき傘が挑む新境地！
キュートな魔法少女の活躍&
エッチを描く短期集中連載！！

KIRARA★KIRARA

きらら★キララ

魔法少女ってたいへん！

第1話 変身するの？ 魔法少女ってたいへん！

著者近刊好評発売中！



あとみつく文庫
『思春期なアダム6
幼生期の襲撃！』

小説
NOVEL

かさ さかき傘

挿絵
ILLUSTRATION

あさぬまかつあき
浅沼克明

「十萌きらら! 魔法少女に変身するアメ!」
むし暑さの肌からみつくまっ暗闇の校舎に、お
気楽な声がこえました。

十萌きららは、きれた息を落ち着かせながら、
「ま、魔法少女?」

「エマと契約して魔法少女になってよアメ」

「えー、嫌な予感がするからヤダ」

「む……最近の魔法少女勧誘は信用ガタ落ちアメ。
こっちは大丈夫アメ、プリキュア系のやつアメから」

「プリキュア? 私、プリキュアになれるの? わ
あ、それならいいかも」

「おっ、食いついたアメ? ならさっそく美少女戦
士に変身だアメ! 月に代わっておしおきアメ」

「……なんで月がおしおき?」

「ぐぬ。ジェネレーションギャップが」

とにかく! と前置きして、エマと名乗った不思議な生物はくるんと身を翻す。

煙をあげてその体がステッキに変化した。

「迷ってる時間はないアメよ」

「あ……っ」

魔具を受けとり、少女も気づく。廊下の先に追っ
てきた人影がある。「彼ら」が追いついてきたと。

逃げ場がない——。やるしかなかった。

追ってくるのは操られたクラスメイトたち。治し
てあげたいし、捕まった親友も助けなくては。

「さあきらら」

「うん!」

「魔法少女マジカル☆キララに変身だアメ!」

☆ ☆

そもそもどうしてこんなことに?

夏休み真っ只中ではあるが、一週間前の登校日ま
で、この学校はいつも通りだったのに。平和な日常

が広がっていたのに。

八月十日の登校日には、みんな普通だったのに。

「起きろタダシっ!」

その日もいつもの大声で始まった。

夏真っ盛りで空も晴れ晴れとした今日だが、まだ
朝の七時半。窓から吹き込む風は涼しい。

長い長い金髪をそよがせ、十萌きららは、毎朝こ
うして起こしにきてやらないといけない幼なじみに、
腰に手をあてて怒鳴った。

「やっど起きた。今日登校日でしょ、目覚ましかけ
とけって言ったじゃない」

やんちゃな猫のように丸く、端っただけツリあが
った双眸。通った鼻筋と、ふっくら柔らかそうなほ
つぺの白さから押しつけないコントラストで色づ
いた、美味しそうなる色合いの口唇が目を引く。

父がヨーロッパアンハーフのクォーターで、四分の
三も日本人の血なのに、なぜか髪の色や肌質が隔世
遺伝した、金色の髪にミルク色肌の女の子。

見慣れた幼なじみの姿に、叩き起こされたタダシ
少年は目をぼちくりさせ、

「おお……悪いきらら」

大あくびしながら身体を起こした。

「まったく。私がいないとダメなんだから」
やれやれと肩をすくめる少女。大声を出したら汗
をかいた。部屋の隅っこでゲーム機と席をならべて
いる、扇風機のスイッチを入れる。

「あ~~~~~」

「……おい。こっち向けてくれよ」

「ワレワレハ、ウチュージンダ」
持ち主の声を無視して遊ぶ。少年は寝汗で痒い首
をぼりぼりかきながら、肩をすくめた。

扇風機は少女のひざまで覆うブロンドの髪を散ら
している。リボンで左右にまとめた以外、とくに手

を加えることもなくストレートに流した髪は、さら
さらと自然なままに波打っていた。

やっどしていることは子どもなくせに、まるで女神や
天使の類が、光をまといわせ風と戯れているようだ。

同時にスカートまでふわりと舞い上がる。

「っ」

心も体もまだまだ子どもと分かっていても。最近
妙に膨らみを帯びてきている幼なじみの腰つき。朝
一番には刺激が強く、タダシはさっさと顔を背けた。

十萌きららと国鳥タダシ。二人の通う私立星宮第
二学園は、家から歩いて二十分のところにある。

チャイムが鳴るのは八時十五分。つまり五十分
に家を出れば間に合う計算で——いつも八時を過ぎ
てしまう二人は、走っていくのが常だった。

「にやーもーっ! 結局走らなきゃダメじゃない、
タダシが起きるの遅いからっ」

「きららだつて八時前の占い見たがつただろっ」
それぞれ赤と黒のバッグを背負って、真夏の町を
駆けていく。

「あつ、そうそう今日ね、獅子座の運勢一番だつて」
「へー」

「ふふふう、一番よ一番」
嬉しそうに言う。

見た感じは十人いれば十人が「ガイジンさん」と
思うだろう彼女だが、れつきとした日本生まれ日本
育ちのスタンダードな日本人であり、ひいては同じ
年頃の女子が好むような話が大好きである。

「ちなみにヤギ座は九位。ふふーん、残念でした」
十二月生まれの少年に得意げにする少女。タダシ
はタダシでスタンダードな男の子であり、星座占い
など気にしないのだが……。

「ま、でも可哀そうだからこれをあげる。はいっ」
「あん? なんだこれ」

「花柄のハンカチ。ヤギ座のラッキーアイテム」
「いらねーよ」

「お礼はいいたら♪ はいっ、言っとくけど貸すだけよ。お気に入りなんだから汚さないでよね」

無理やりポケットに突っ込み、いいことしたとばかり得意そうにするきらら。突っ返すのも面倒なので、少年は苦笑しつつそのままにした。

そうこうするうちに学校が見えてきた。充分間に合う時間のようなので、二人して走るスピードを緩める。左右で結んだ髪をピョコピョコ尻尾のように揺らしながら、きららは晴れ渡った八月の青空に目を細めた。校門を抜けるとちようどトレッドマークの竹刀を持った体育の木村先生がやってくるところだ。閉める時間だったらしい。ぎりぎり間に合った。

「あつ、きららちゃんおはよう」

「よーっすお二人さん。いつもギリだな」

町のはずれに家があるため、登校中はあまり人に会わないのだが、中に入れば人は多い。

そして顔を見ると声をかけてくる子も多かった。

「おっはよー♪ おいすー」

一人ひとりに少女は笑顔で挨拶を返す。

中身は普通の女の子でも、外見がとにかく目立つきららは、学校ではちよつとした有名人だった。底抜けに明るいうえ、背の順で前から二番目とこじんまりしている点もウケて、クラスではマスケットキヤラ的な扱いになっている。

「でさタダシ、読書感想文なんにした？」

もつとも他の誰かもとへ行くことはない。登校と一緒にするのはいつも、幼なじみのタダシだ。

「フツーに『坊ちゃん』。そつちは？」

「悩んでるんだ。推薦図書でもいいけど、なーんか面白いのになーって」

「へ？」

「？ なに？」

「悩んでるって……。提出今日だぞ。ほら、感想文と算数ドリルの図形編はって先生言ったじゃん」
「あ……」

☆

☆

「困りましたねえ」

担任の筑井かよ子は、ほとんど怒らない優しい先生なもの、締めるべきところはきつちり締める。

本日登校日は、夏休みだからと生徒がダレすぎないよう「登校すること」が第一の目的である。朝礼で学長が軽くスピーチして、宿題を出したら、十時前には下校の時刻となった。

が、スピーチを除けば最も大事な宿題。それを忘れた生徒には、当然罰則が入る。

「うー」

「うーじゃないですよ十萌さん。宿題を忘れるなんて、困ったさんですねえ」

シャレっ気のない黒ぶちメガネを、ずれるのかしきりに直しながら、教卓の先生がニコやかに言う。

半月ぶりの登校日。半月ぶりに会うややこさんがりした友達を懐かしんで、十時の下校時刻ごろには賑わっていた教室だが、時計の針が十一時を指すころには、先生を含めて三人しか残っていないかった。

「みんな遊んでるのになー」

「夏休みの間、みなさんが宿題をしているとき十萌さんは遊んでらっしゃったんでしょう？ ならそのぶんいましっかりお勉強しましょうね」

「感想文を忘れただけで他のはやってますよう」
泣き言を漏らしながら窓の外に目を向ける。

グラウンドでは、早すぎる下校時刻に、エネルギーをもてあました生徒たちが、ギラつく太陽の下で遊んでいるところだった。

サッカーコートで楽しそうに駆け回っている、男

子の集団には、タダシの姿も。うらめしそうに目で追う少女。

「私も遊びたい」

「だつたら早く書きましようね。先生は終わるまでずーっと見てますよ」

物腰は穏やかながら先生はあくまで先生である。ずり落ちるメガネを直し直し、止まっている手を動かすよう催促してくる。

宿題忘れは居残りを命じられたのだった。といっても読書感想文。「やれ」と言われ「はい」と書けるものではなく、集中力のないきららは海より広い四百字原稿を相手に、難しい顔でうなるばかりだ。

「はあ……宮代君終わった？」

居残りの生徒は彼女の他にもう一人。夏なのに子どもらしくない色白で、子どもらしくない出っ張った腹をした男子もいた。

宮代俊哉。こちらは、学年に一人はいる宿題忘れの常習犯である。理由はいつも「ネットゲ……やって」。今日の居残りも予定調和だ。感想文どころか読書さえ終えていないようで、先ほどから電子書籍だろうか携帯端末をぼんやり見ている。

呼びかけても返答はなく、ちらつとこつちを見てふるふる首を横にふるだけだった。

クラスの女子がみんなして「キモい」「汗クサイ」と近寄るのさえ嫌がる彼だが、きららは基本的に無害な相手には友好的なので、声をかけるのは平気だった。返事はそつけないものばかりだが。

「はいはい、集中集中」

落ち着きのないきららに、筑井先生は肩をすくめて、隣の席に腰をおろした。

これではさすがに集中せざるを得ない。少女は肩をひそめながらも、改めて原稿用紙に向き直った。なんとかあらずじと「〜と思いました」で埋めてしまおうとペンを取るが……。

「……あの、先生」

「なあに？」

「あんまり見られると集中できないです」

「うふふ、だってちやーんと見てないと、十萌さんたらちつともやらないんだもの」

隣につけた先生の視線が厳しい。

肩を落とすきらら。確かに集中力のなかった自分が悪いが、これではもつと集中できない。

「先生はね、大切な生徒のことは、ずう〜と見ているものなんですよ」

「はあい……」

色々困ってしまったのだが、なんとか原稿用紙を埋め尽くした。

「っし！ 終わり！」

「はい、結構です。がんばりましたね十萌さん」

やっと終わった。まだ遊んでるみんなに間に合わずだと、急いでカバンに筆記具をしまうきらら。

「先生さよならっ、宮代君もまた二学期にねっ」

ぶんぶん手を振って出て行った。俊哉は反応しなかったが、かよ子は「はいさようなら」と手を振り返す。そのあと……。

ずれたメガネの奥で、女教師の目つきがいやに湿っぽく潤んだのに、少女は気づかなかった。

「おーいきららー」

「あつ、ライちゃん」

ちようど呼びにきてくれたのか、教室を出てすぐ、友達はやってきた。

ライちゃん。小浜ライカ。髪が短くて覗く太ももは半ズボンの形に日焼けのツートンカラーで。ぱつと見男の子と間違えそうだが。遊ぶため替えた体操服はブルマ。れつきとした女の子である。

きららとはとくに仲のいい親友の一人だ。

「やっと宿題終わったよ。みんななにしてる？」

「ドツチコート取れなかったよ。結局みんなバラけちゃった。外行こうぜ」

「えー、コート無理かあ」

せつかくがんばつて終わらせたのに。少女はちえつと口を尖らせる。

最近のきららたち初等部は、女子はドツチ、男子はサッカーが流行っている。久々に友達たくさんで集まれるので、広い場所と思う存分遊べると思ったのだが……。もう解散してしまつたらしい。

仕方ないのでつるみやすいライカと二人、他に遊べるものを探して外へ。グラウンドでは窓から見えた通り、学年が入り乱れて遊んでいるところだ。

サッカーコートにタダシの姿が。混ざりたいが、やっているのは男子ばかりなので難しそう。他のバスケコートやドツチコート、鉄棒などの遊具にも

空いた場所は見つからなかった。

「あつ、ミイさん」

見つけたのは昇降口に立つもう一人の親友の姿。まん丸メガネに丁寧なままとめた三つ編み特徴的な、落ち着いた女の子だ。背丈を含めてきららたちよりひと回り大きく、一、二学年上に見える。

「ミイさんこと、平坂ミサト。」

「きららちゃん、ライちゃん。あ……えつと」

親友二人がやってきて、ミサトは一瞬嬉しそうに。そのあと困つたような顔になった。

どうしたんだろう？ 首をかしげる二人だが、理由はすぐに分かる。

「平坂、悪い待たせた」

ちようどそこで昇降口から、ぞろぞろと五人ほどの集団が出てきたのだ。

ほとんど女の子。一人だけ男子で、声をかけてきたのはその彼だった。きららとちがって地毛ではないのに髪をブロンドに染めた長身の男の子。整った面立ちをしているが、それ以上にこの歳で眉を抜い

て化粧もしてと、シャレっ気が際立っている。

他四人の女の子と別れて駆けてくる彼に、ミサトの困つた顔の理由が分かり、きららとライカはそろつて苦笑した。

彼、佐山アキラは、シャレた容姿に比類して学年でも一番人気のある男子である。実際きららたちの目から見てもカッコいいし、スポーツ万能だし。

そんな彼と最近いい噂のあるのがミサトである。テレビ屋な彼女は「友達だよ」と否定しているが、普通の女の子なら一番人気に迫られて悪い気がするわけがない。デート現場も何度か目撃されていた。

今日は彼と帰る約束があるのだろうか。そこに自分たちがやってきてしまい、帰ろうと誘われたらどうしよう——ということか。

気にしないで、とばかり、きららもライカも一歩引いた。親友の恋路を邪魔するほど無粋ではない。

意図が伝わつたのだろう、ミサトは申し訳なきさうに苦笑する。が……。

「あれ、十萌も帰るところ？」

やってきたアキラは、そんな仲良し三人の配りあいなどまるで気づかず。

「一緒に帰らない？ 俺と平坂、いまから遊びに行くだけだ」

むしろミサトよりきららのほうへ詰め寄つた。

頭を抱えるきららとライカ。

親友の好きな男子を悪く言いたくないが、彼、カッコいいのは確かでも、彼氏にするには問題が多いタイプだった。女好きというか。可愛い子には手当たり次第に声をかけるのだ。

それでも正統派美少女のミサトを止めるためならと、いまも一緒にきた四人を置き去りにしたが、目立つ髪の色も手伝つて学園で一番可愛いレベルのきららがいると、こうして節操なくなびいてくる。

「行かないよ。ミイさんと約束したんでしょ、二人

……」

で行きなよ」

「いいじゃん。お前らも仲いいし、みんなで」

きららはもちろんミサトの都合さえお構いなしに、肩に手を置いてきた。

(どーしよ)

ため息をつくきらら。一緒に遊ぶのが嫌な相手というわけではないが、この状況では親友に悪い。

と、

——ボグツツ！

近くの壁にサッカーボールが叩きつけられた。きららをはじめ、アキラもミサトもぎょっとなる。

「すいませーん、シュートしちゃいました」
弾むボールを取りにきたのは、タダシだ。

「ん？ ああきらら、宿題終わったんだ。ちょっと待っててくれすぐ一緒に帰るから」

白々しく言いながら、ボールは無視してアキラと幼なじみの間に割り込む。

いいところに……。少女は顔を輝かせた。この幼なじみは昔から、いつも自分が大なり小なり困っていると、どこからともなく駆けつけてくれる。

一方、乱入されたアキラは、眉間に皺を寄せ、
「ちっ、邪魔すんなチビ」

女子に対する態度から一転。毒づいた。

「ただのミスキックだよ。あたってないだろ」

「ギリギリだったんだよ。外しすぎたらへたくソ。だからチビにサッカーさせると危ねーんだ」

「下手で悪かったな。誰かよりは上手いけど」
そのまま男子二人、一触即発となる。

アキラはもともと男子と女子で態度を変えるが、タダシに関しては極端に悪態がひどかった。

二人は同じサッカー部に所属し、学年で一、二を争うエース級同士ののだが、FWに選ばれたのがタダシだった。というのがきつかけらしい。長身なアキラのほうがあまり高くないタダシより有利なはず

なのにも負けず。プライドの傷ついたアキラはたびたびタダシを揶揄するようになり、現在に至る。

「さ、佐山君。あの」

にらみ合う男子二人に、責任を感じたのだろうミサトが間に入ろうとする。だが押し弱い彼女では声が震えてしまい届かなかった。

きららとしてはタダシに味方したいが、すればミサトの立場が悪くなるかも。黙っているしかなく、

「おい、なにしてんだお前ら」

幸いにも横からの声で事態は収まった。

入ってきたのは竹刀片手の、体育の木村先生。ケンカは続けられず、少年らは「なんでもないです」と返すしかなかった。

嵐が去り、ほっと息をつくきらら。舌打ちしたアキラが去っていき、ミサトがそのあとを追う。

「ミイさん」

呼び止めて、彼氏とケンカになりかけたことを詫びようとするきらら。ミサトは「こっちこそゴメンなさい」とばかりふるふる首を横にふり、

「あとで電話しますね」

申し訳なさそうな、けれど温かい微笑を返した。これまでの険悪さをすべて忘れる穏やかな表情。きららやライカ、タダシにも笑顔が戻る。

「来週のことはそのときに」
「うんっ」

☆

☆

そんな登校日から一週間後——八月十七日。きららの長い一日は、朝一番に届いた小包から始まった。

「おばさんから？」

包みを受けとる。あて先は確かに自分の名前で、小首をかしげつつ部屋に戻るきらら。

おばからの、予告なしの贈り物。不思議には思ったが、今日プレゼントをもらう予定はある。気にせずベッドに置いた。まだ作業の途中なのだ。開けるのは夜になってからでいい。

細長くそろえた色紙を、わっかのチェーン結びにする作業の。

携帯電話を手に取った。

メールボックスには、深夜0時ちょうどにくつもメールが入っていた。ライカやタダシをはじめ、仲良しのみんなから……。

『HAPPY BIRTHDAY!』

「食いすぎた〜〜〜〜〜……っ」

誕生会が終わったのは夜の八時過ぎ。

ライカみたく元気に自転車で帰る子が半分。夏とはいえもう暗いので、親に迎えにきてもらう子が半分。いずれも帰し終えて、

夜の九時過ぎには、ご馳走がすべてなくなった。

「もー、タダシ食べすぎ」

「いーだろ残ってたんだから。ふい〜」
パンパンになった腹を押さえて、ごろんとベッドに転がる少年。フライドチキンにポテトにたこ焼き、トンカツ、グラタン。ケーキにサンデー。誕生日だからとお母さんが奮発してくれた、パーティーのご馳走全部がタダシのお腹に消えたところだ。

会は八時で終わったものの、お隣さんであるタダシならすぐ帰るので、一人だけ残っていた。

むしろ、他が女の子しかいなかったパーティーの間、一人男子の少年は居心地悪そうに隅にいるばかりで幼なじみと二人になれたいまこそくつろいでいるよ

うだ。きららも相手を崩す。

ちなみに少女は、誕生会でゲスト退場後のお楽しみ。プレゼント箱を開ける時間である。

「あはっ、なにこれライちゃんのプレゼント、変な

クマ。わっ、ミイさんのこれすごい。ティーセットだつて。大人っぽ〜い♪」

「包み紙も丁寧に折られたみ、中身を確認しては一人ひとりにありがとこのメールを出していく。ついさっきまでここで祝っていたメンバーだが、お礼の言葉は顔を合わせないほうが選べるものだ。」

「えっここちがカナちゃんで……。あはは、瞳さんは相変わらずウケを狙ってきますなあ」

「瞳のなんだつた？」

「レトルトカレーお勧めセットだつて。誕生日に渡すものじゃないよね〜」

ギャグにしてはシユールすぎるプレゼントも、テーションが高いので思った以上に笑ってしまう。お礼メールには「ナマステ」と打っておいた。

と……そこで、

「ティーセット早めに飾つてこ……あつ」

「? どうした？」

ずっと楽しそうだった声音が突然くもる。

少年が顔をあげると、少女は眉をひそめて、

「これ」

ミサトからもらったティーカップを見せた。

カップはひびが入り、取っ手のところが取れてしまっていた。箱ごと落としらしい。

これでは使えない。あとで接着剤でくっつけてインターネットにでもしようと、箱に戻すきらは

誰だつてミスはある。落とししたことを責める気はないが……

「……ねえタダシ」

「ん？」

「最近のミイさん、なんだか……」

「タダシはおかしくない? 言いかけてやめた。」

「タダシは気づいていない。なら教えるべきではないか。微々たる変化なのだ。ただ登校日のあとからだろ

うか、誘つても一緒に遊べる頻度が減り、一緒にいてもよくボーっとしている。心配になつて聞いてもなんでもないと首を横にふるばかりだし……」

「今日も、会は八時に終わったのだが、彼女は六時に抜けてしまつていた。途中までは楽しそうにしていたのに、突然携帯が鳴つて、暗い顔になつたかと思つと、一足先に出て行つてしまつた。」

「細かいことではあるのだが、よく一緒にいる親友だからこそ違和感は募る。」

「きらら?」

「つ、ううん、なんでもない」

「気にしすぎだとプリン首を横にふつた。」

「あと開けていない小包は……探す。残るは朝におばから届いたものだけのようだ。」

手を伸ばしかけて、

「そうだ、タダシのつてどれだつた?」

「彼にはまだお礼を言っていないのに気づいた。開けていないし、包みさえない。」

少年はごろんと体を返して、

「あいよ」

「ひらんとなか投げた。」

「ハンカチだ。花柄の。」

「? これ……前に私が貸したのだよね」

「ああ。言われた通り汚さなかつたし、ちゃんとアイロンもかけたぞ。ハッピーバースデー」

「……」

黙つて少年の上に乗るきらら。

「去年のアンタの誕生日にはケーキ焼いてあげたうえ新しいスパイクシューズまであげた私には、あんまり笑える冗談じゃないよ」

「ま、待って待って。分かつてゐるマウントはやめろ。」

「いまやられたらリバースしそう」

少年はあわててプリン首を横にふり、ポケットからちゃんとした包みを取り出す。

「変なのだつたら本気で怒るから……わっ」

「マウントを解除せず、いぶかしげに受けとる少女だが。ある意味悔しいことに感嘆の声が出た。」

「リボンだ。淡いピンク色の、可愛いリボン。」

「可愛いというのもあるが……それ以上に、プレゼントに髪留めがきたことに、きららは喜ぶのも忘れ、目を丸くしてしまつた。」

「夏休みの終わりにでも、新しい髪留めを買いに行こうとしていたのに。」

「そろそろリボン渡えるころだろう? だから」

「安物だけだな。渡したあとで照れくさくなつてしまったのだらう。ぷいっと横を向く少年。」

「な、なんで? なんで分かつたの?」

「別に。なんとなくお前が、いまのリボン変えようとしてそうだつたから」

「あ……」

「前に欲しがつてゐる話が出た……なら、まだ選んだ理由として分かる。いつも一緒にいるのだから話を聞いていてもおかしくない。けれど、話してもないのに、なんとなくで心を読まれた。」

「胸がどきどきしてきて、少女は凍りついてしまう。ミルク色の頬が、かっつともぎたてのりんごのように赤くなつた。幸いタダシは横を向いていて、恥ずかしい表情に気づかれなかつたが。」

「……つけていい?」

「あ、ああ。好きにしるよ。……おわつ」

ぐいっと少年の手を引く張つた。乗つかる場所をお腹から、上体だけ起こしたひざの上に移る。

「身長が同じくらいなので胸元に彼の顔が来るくらいか。ちよつとぐらついて安定しないが、目を合わせないで済むのは助かる。」

「……タダシがつけて」

「へ?」

「お互いに顔は真っ赤だらうから、目線は避けあう。」

けれど幼なじみにしても近い距離感で。少女は二つにまとめた髪をほどこいた。

輝くシルクのような金色の髪がふわりとなびく。タダシは少し硬い動きで言われるままプレゼントを手に取り、そんな彼女の後頭部に手を回した。自然と抱きしめあうような形になる。

(……タダシ、ドキドキしてる♡)
くっついた胸から彼の鼓動が伝わってきて、嬉しかった。自分も同じくらい高鳴っているのが、聞かれてしまうのは恥ずかしいけれど。

いつも少女がどのあたりで結んでいるか、少年は誰よりも知っていた。びったりその位置に指を伝わせ、まずは手櫛で何度かすいた。

「……♡」
心地よさそうに鼻を鳴らす少女。さつき食べたケーキまじりの甘酸っぱい吐息が少年の額を撫でる。

「なんだよ」
「えへ。タダシに髪触ってもらうの、好きだから」
「……あつそ」

顔は見えないという暗黙の了解があるためか、少女の口調は少し甘えがあった、幼いものがあつた。

……まるで昔、彼がいなければなにもできなかった、泣き虫のころに戻ったかのように。

何度かすいたら髪を束ねる。
「いたっ、痛い、ひっぱりすぎ」

「悪い、このくらい？」

「うん……いたたっ。だからひっぱるなっつーに」
「しよーがねーだろ髪結ぶの初めてなんだから」
ほのかに漂った空気は、すぐにいつもの二人のそれに流されてしまったが――。

少女のツイーンテールは、上手く結び直せた。どう？ とばかり上体を引くきらら。

「ん……似合ってる」

少年は上ずりがちな声で素直に感想をつけ……。

「えへへ……。……わっ！」

そこで甘い時間は終了となった。ただでさえ安定しなかったひざのうえで動いたせいで、バランスが崩れ、ベッドから落ちそうになる。なんとか足をついたものの、くっついていられる時間は終わった。

「……か、帰るわ」

急に恥ずかしくなったのだろう、少年は大慌てでベッドから飛び降りた。ドタドタと出て行く後ろ姿に、きららも見送ることさえできない。

「……」

誕生会が全部お開きとなり、散らかった部屋でひとり立ち尽くす少女。

つけてもらったリボンが妙に恥ずかしいもの思えた。といって外すのもいやで、次になにをすればいいのか。頭が真っ白になってしまう。

ただ胸の中は、幼なじみと一緒に育ってきてこれまでずっと感じていた、甘酸っぱいもので満たされていて……。

☆

☆

「青春だアメねえっ♪」

けれどやっつけてきた声に、余韻は全部飛ばされた。
「へ……？」

「いやーイイものを見せてもらったアメ。朝からずっと閉じ込められて頭に来てたけど、全部許すアメ」
妙に甲高くて鼻にかかった、子どもっぽいナマイキそうな声。
「え？ え？」

まず気づいた異変は箱が開いていることだ。
おばさんから届いた小包。まだ手をつけていないはずなのに、開いてしまっていた。

開いているというか、封が突き破られていて、中身はふわふわ宙に浮いている。

「初めまして十萌きらら。まずは誕生日おめでとサマ。やっときららも一人前。エマも嬉しいアメ」
しゃべるはずのないものがしゃべった。きららは悲鳴をあげるのも忘れて絶句する。

ピンクの毛並みに長く伸びた尻尾。尻尾より長く伸びた耳。横向きに張ったたてがみで包み紙つきの鉛玉にも見える生き物が口を開けていた。
しゃべっていた。宙に浮いていた。

「きららも魔法の覚醒が始まるころ。マカイジュに對抗できるころアメ。エマがサポートするから、これからよろしくアメ！」

えらそうに言いながら胸(？) 胴体でおそらく胸にあたる部分)をそらす怪生物。
きららはしばらく声も出なかったが、なんとか口をばくばくさせて、

「あ、あなた……誰？ なんなの？」
「なには失礼アメねー。エマはエマアメ。魔法の系譜、十萌家の正統たる使い魔で……むっ!？」

何者かどこか言っている意味さえ分からない。ぼかんとするばかりでいると、エマと名乗った生物は急に顔色を変えた。落書きに近い顔の中で、眉にあたるパーツがブタの尻尾みたくくると丸まる。

敵しい表情を作ったかと思うと、
「瘴気を感じる……種だアメ！」
「きゃっ」

突如反転したかと思うと、窓が勝手に開いた。驚いている暇もなく夜空へと飛んでいってしまう。
ぼつんと部屋に残されるきらら。

「ま、待つて！」

正直夢か幻としか思えないが、開け放たれた窓という現実が残ったのは確か。好奇心にかられてきららのはあの奇妙な鉛玉を追いかけていた。

外に出るとわずかに飛んでいく姿が見える。毎朝

タダシと鍛えた俊足でなんとか後を追った。
一生懸命走っても、やはり空を飛んでいるあちらのほうが速い。しかし幸い、鮎玉が向かう先へは通いなれた道ばかりで、

「……学校？」
「……着いたのはきららたちの学校。星宮第二学園だった。」

鮎玉はなおも不思議な力で窓を開けて、中へ入っていってしまう。きららはさすがに躊躇したが、自分ももらったプレゼントなのだ。覚悟を決めて同じく窓から飛び込んだ。が……。

「あれ」

あの奇妙な姿を探すと、それよりも見慣れたものが視界に入る。ついそちらに意識を取られた。人影が二つ見えたのだ。しかも……。

「宮代君……ミイさん？」

どちらも知った顔。まして片方は、つい数時間前まで一緒にいた、ミサトだった。

パーティを早抜けしてなにを？ いぶかしんでいると、どちらも様子がおかしいのに気づく。

とくに宮代俊哉が変だ。いつも無口無表情で、人と関わりたくないのに、いまは目を輝かせてミサトにびったり寄り添い。耳元で何事かぼそぼそとささやいていた。

ミサトもおかしい。気弱でおどおどしていることの多い彼女だが、いつもよりさらに弱々しく、泣きそうに眉をひそめて、俊哉に腰を抱かれています。なによりも、

「ヒヒヒ、スッキリしただろ？ え？」

まるで熱に浮かされたようウツトリした顔と覚束ない足取りで、俊哉にエスコートされていく。

角を曲がって見えなくなりました。

きららは自然と足音を殺し、そつと後を追った。声をかけなかったのは、様子が明らかにおかしいミ

サトに警戒心が働いたのもあるが、それ以上に、二人の出でた場所だ。
(おトイレ……だよね?)

近づいて見れば、二人が現れたのは確かにトイレ。赤マークが目印の女子トイレだ。少なくとも俊哉が出てくるのは絶対におかしい。

中を覗いてみると……流れたタンクが水を溜めている音がした。微妙に二オイも漂ってくる。どちらのものかは知らないが排泄のあとに残る二オイが。「? なにこれ」

もうひとつ気づいたのは、女子トイレなので置いてある個室用のゴミ箱。その中に、見覚えのない容器がたくさん捨ててあることだ。

丸いプラスチック製で、一箇所だけ長く伸びた、ホース口つきの容器。

それがイチジク流腸なんて呼ばれるものであることを、幼いきららは知らなかった。すべての状況からミサトがなにか事件に巻き込まれているのは想像に難くない。

(助けなきや……ミイさんを)

戸惑いや恐怖より、親友を心配する気持ちが勝り、すぐ引き返して二人を尾行することにした。

そつと角から様子をうかがう。ミサトがふらついているので、まだ二人の背中が見える。

走って追いかけて、「離れて宮代くん! ミイさんにひどいことしたでしょ!」と問い詰めてやるつもりだったが、出鼻をくじかれてできなかった。ミサトは相変わらず俊哉と恋人同士のようになり寄り添って歩いている。俊哉の手は腰、というよりヒップに置かれており、中指だけ折れ曲がって、中央の谷間をねちねちと押し揉んでいるのが分かる。

だが初心なきららにも分かる「エッチなこと」をされているのに、ミサトの表情が追いかけてよとする少女の足を止めた。

嬉しそうなのだ。目元をぼーっと潤ませて、ひどく気だるい酔いに包まれている感じ。いつも落ち着いたクラスののお姉さんのような美貌が、見ていてきららですらドキリとくるくらい淫靡に緩んでいる。なんと声をかけるべきか迷っているうちに、二人は近くの教室に入ってしまった。

家庭科室だ。明かりがついている。

(……二人だけじゃない?)

足音を殺して近づくと、中からは複数人の気配がした。嫌な予感が増大するのを感じながら、扉についている小窓から、中を覗きこむ……。

☆

☆

「ひ……っ!?!」

つい声が出てしまった。ドアがあるから中には届かないし、届いても中の人間は気づかなかつたらうが、それでも少女はあわてて口を押さえる。

気づかれたら危険だ。見た瞬間に分かった。

蛍光灯の黄ばんだ照明のもと。予想した以上にとても美しい世界が広がっている。

「いや……あつ! 宮代くん……、だめっ」

「なにイヤだ。もうすつかり流腸でケツが疼くんぞ、さつきからヒクヒクしてるとやないか」

「そうだぜ平坂。フフ、お前みたいにデカイおっぱいしてるとさ、尖った乳首も分かりやすいから、感じてるのがすぐ分かるんだ」

連れ込まれたミサトはテーブル台の隅っこに乗せられていた。水道のところだ。銀色のシンクをまたいで、しゃがまされている。

誕生会に来たときのまま。少しシャレた、上品な白のワンピースが、首元までたくし上げられていた。下着は上も下もつけていない。カエル座りなので、

カカトの食い込んだ尻から、ひぎに潰されぶにっ
と垂んだ乳房まで、すべて見えている。

体育で着替えるときたまに女子の間で比べっこす
るのだが、ミサトの胸は学年で一番である。その見
事な膨らみを、アキラはひどく乱雑に揉み転がして
いた。ひぎが邪魔な場所にあるので、横からすくい
あげる感じ。つきたてのお餅のようなムチツとした
弾力を押しやりつまんだり。

だが彼だけならまだ理解できる。二人は恋人……
の前段階な関係なのだから。夜中の学校に忍び込ん
だり、そこで『エッチなこと』をしたり。イケナイ
とは思うけど、理解はできる。

信じられないのはこの場にもう一人いること。
(ど、どうして宮代君まで。……ちよっ、う、うん
ちの穴に触ってる?)

そしてそのもう一人が手を伸ばす先だ。
「へへ、分かるかミサト、ミサトのエロアナル、ど
んどん柔らかくなってくぞお」

あの目立たないクラスメイトの宮代俊哉が、カッ
ブルの密儀に加わっていた。少女はともかく、アキ
ラのほうはどう見てもそれを容認している。

そして宮代の指はミサトの、カカトが食い込み左
右によった尻たぶの谷間。お尻の穴に這っていた。
キュウと皺を刻んで窄まる小口に中指を突っ込ん
では、中から汁気をかきだしている。

「ほらもつと汁だせよ。僕はトロトロなケツが好き
なんだからな」

「あつ、ああ……ごめんなさい……ンうっ、うっ」
ネチリネチリと美肛を掘られて、ミサトはもう顔
が真っ赤だった。

「はん……っ」
横から顔を寄せた俊哉が、少女の唇を吸いとる。
(ひどい……宮代君……!)

女の子に勝手にキスするだなんて。きららにすれ

ば、『エッチなこと』より許せない行為だった。ま
してや彼氏のアキラではないのに。

ディーブキス。というものは知らないで、なぜ
ミサトの頬がもこもこ動いているのかは分からない
が。とにかく怒りにかられるきらら。

だが飛び込まなかったのは、
「おいキスするのは俺だけって約束だぞ」
「ひひ、いいじゃん。なあミサト、僕とちゅーする
の好きだもんなあ」

「あつ、ああ……そんなこと……ンふんっ♡」
アキラはおろか、ミサトまでが、この状況に抵抗
する意思を見せないから。

「さてはトイレでもしてやがったな」
「ふふふ、だつてこいつ流腸されると可愛い顔でヒ
イヒイ言うんだもん。でも同意の上だよ？ 僕のツ
バ美味しそうに飲んだんだから」

「ちっ、おい浮気モノ、キスは俺以外とするなつて
命令しただろ」
「ど、ごめんなさい佐山くん……宮代君、いつも強
引だから」

眉をひそめている彼氏に咎められても、ミサトは
うつとりした様子でもう一人の口を吸うのをやめな
い。ねつとりとピンクの唇が潰れる様があまりに妖
美で、見ているきららですらゾクツと胸が冷えた。

「あんっ、んっ、はあああお尻が、お尻があつ」
「つたくホント浮気モノだな。俺がおっぱい揉んで
やつてるのにアナルでばつと悦ぶなよ」

「んう……うっ、ごめんなさい佐山くん。でも、で
も……あああつ、お尻がすごいのお」

謝罪の声にも深い淫柔の陶酔が混じる。
これでは止めていいのかすら分からず、きららは
とにかく、小窓を食い入るように覗くばかりで、
窓には死角が多いことを忘れていた。

——ガラッ。

「きゃっつ!」
突然ドアが開く。

中にはもう一人いたのだ。支えのドアを失ったき
ららは、つんのめつてその場で尻餅をつく。
「覗きはよくないわよ、十萌さん」

「あ……せ、先生」
最後の一人は、担任の筑井かよ子先生だった。
親友がひどいことをされていると訴えようとする
少女。しかしすぐに、いまこの女教師は中にいたこ
と。そして見上げたその口元には冷ややかな笑みが
浮かんでいるのを見て、言葉が出なくなつた。

直感する。先生も「あっち」だと。
かよ子以外の三人は突然の訪問者に目を丸くして
いたが、やがて少年二人はニヤリと卑猥な笑みを取
り戻した。とくに俊哉が爛々と目を輝かせる。

「十萌さん……フヒッ。ちようどいい。ミサトは飽
きたから、次は君を連れてこようと思つてたんだよ」
「や……っ、こ、こっち来ないで」

「怖くないよ。すぐに自分から求めるようになる」
いつもの卑屈っぽい、無感動な彼からは想像もつ
かないギラついた顔だつた。きららは恐怖がおさえ
きれず、震えながら後ずさる。けれど動揺が身体
の芯に來ていて逃げられない——。

——どぐツツ!
「ンげふっ!」
手は勝手に狙いを外した。

なにかボールのようなものが肥満体の腹に直撃す
る。伸ばした腕は空をつかんだ。

「逃げるアメ! きらら!」
あつけに取られるきららの前で、ぶつかつたポー
ルはぼんつと形を変える。デカイ頭から胴体の生え
た、先ほどのよく分からないピンク色の兎に。

「戦うには準備があるアメ! ひとまず逃げて態勢





「青龍」「朱雀」攻略
討伐成功
伴い四道城
四道封者桔梗^{ききょう}太夫

東の間の
平和が訪れ

これにより
ナリカを媒介に顕現した
ノロイを撃破

ナリカ奪還に成功



そそれで
戦力の再編成を
するにあたって...

——ままあ
ひとまず仕切り
なおせた訳で...

...



我が主どの

...何なりと

スッ



...あ

...つまりその...

...

うーん
主として認めて
もらえたのは
嬉しいんだけどさ

そう畏まれると
その：照れると言うか
やりにくいと言っか：

…すまない
この時代の作法は
まだ教えられておらぬ故

ああ— そうだ

まずはスバルの技前を
拝見しておこうかな

心得た

X
あ
る…



では
とくにご覧あれ



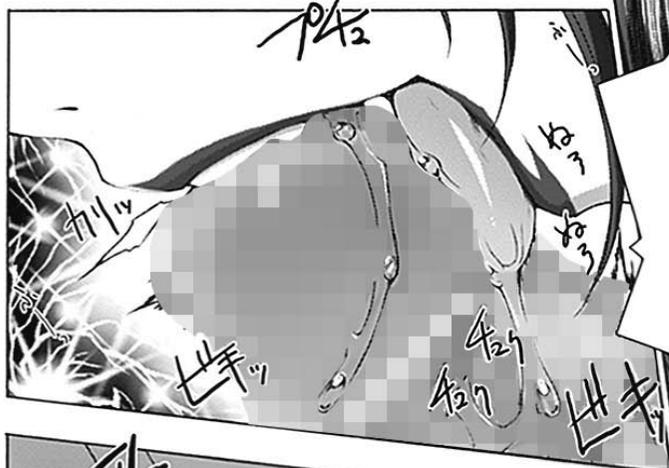
う



うわ

キッ
キッ





うああ
それ…ツキツ…!

く…あ







?...「閃忍」に...
それも敗れ汚され
あげく片腕になった
私に何を...

はあ
ごごめん
あんまりすくくて
つい口だ...



これではまるで
生娘扱いではないか…

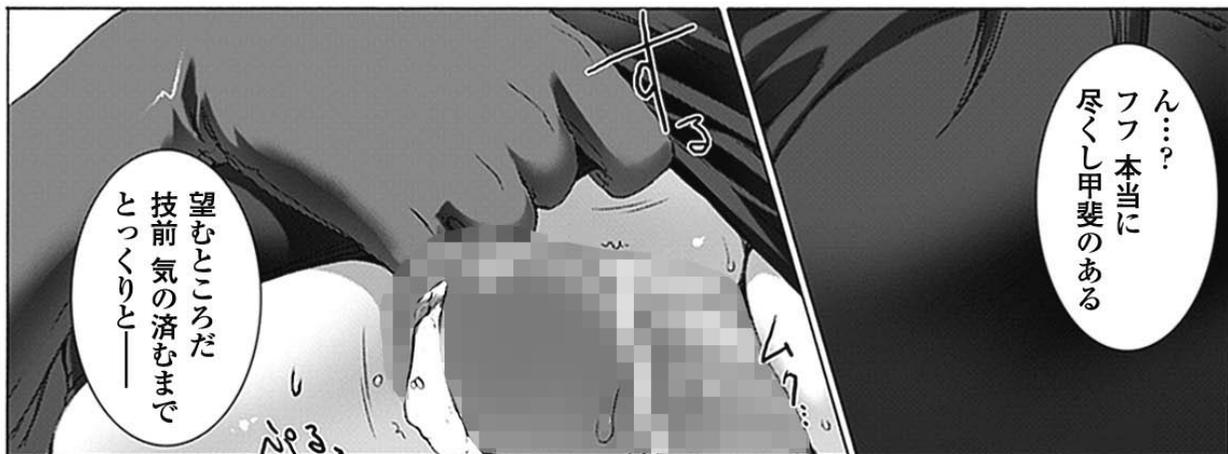
フフ

ハルカが許す
だけの事はある

ん？

いや
尽くし甲斐のある
お方だよ

そそりやどうも



ん…？
フフ 本当に
尽くし甲斐のある

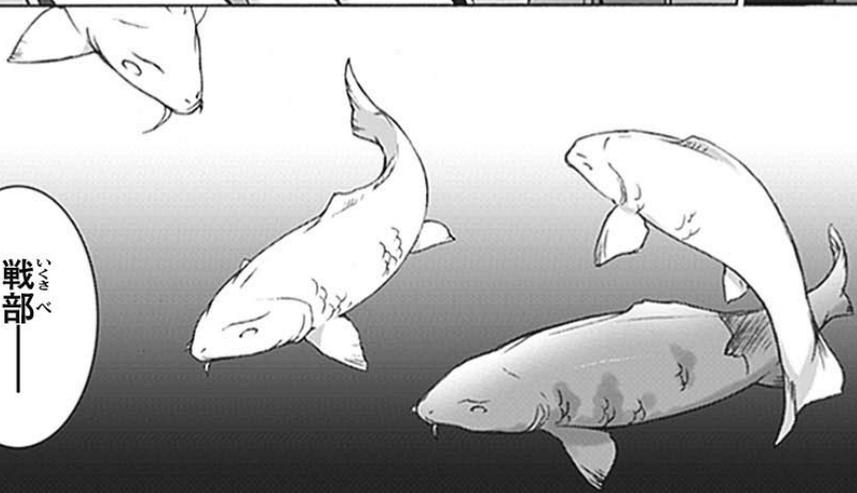
望むところだ
技前気の済むまで
とつくりと—



私も——!!

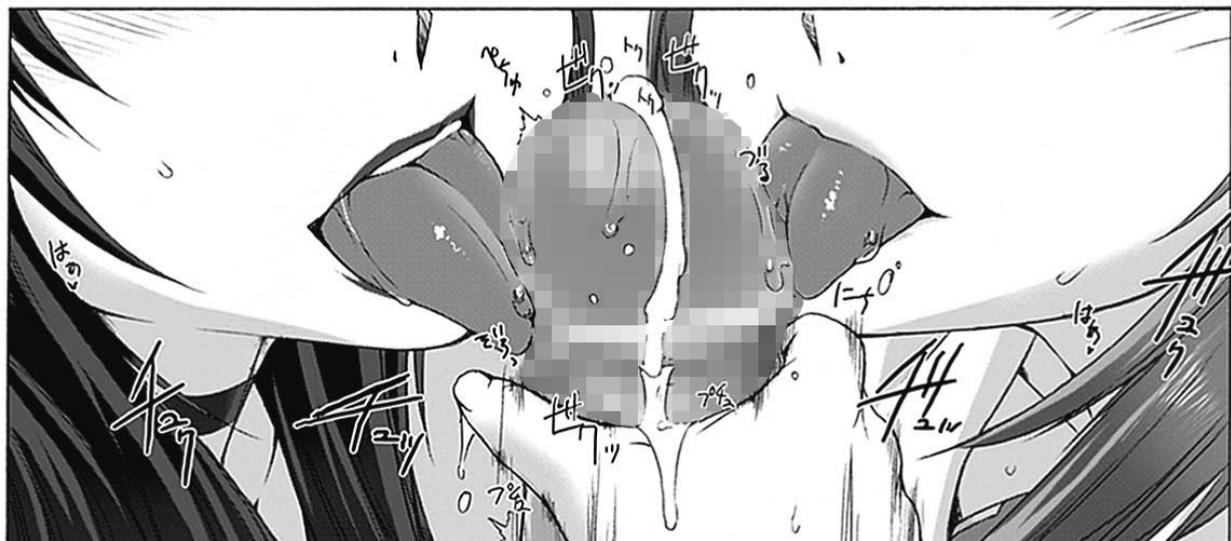


戦部





……あれ?



換身の騎士

アズナ

淫靡な麗女と入れ替わった肉體

第三話 舞踏会の艷

かりのけい
小説 NOVEL 狩野景

みどりぎむら
挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑

羞恥に震えるアルベルトを
待ち受ける、恥辱の舞踏会!!



登場人物紹介



アルベルト・メリン

ネオン王国白鷺騎士団に所属する騎士だったが、魔女の策謀により身体を入れ替わられてしまう。



ナスタロヴィカ

他人の肉体に乗っかってゆくことで生きてきた魔女。強力的な魔法と変則的な剣技を操るが、享乐的で飽きっぽい性格。

ユージーン・ファウスト・ディオ

ネオン王国白鷺騎士団団長。天才的な剣技とカリスマの魅力で、多くの騎士たちに慕われている。

前号までのあらすじ

アルベルトは苦戦の末に人々に害をなす魔女・ナスタロヴィカを捕らえるが、不意を突かれて身体を入れ替えられてしまう。そして、魔女討伐の任のためやって来たトバイアスに捕らえられ、村人に見守る前で辱められてしまうのだった。そんな屈辱と絶望にうちひしがれるアルベルトの前に、かつての上司で敬愛しているユージーンが現れる……。

目映ゆい黄金から闇のような漆黒に変わった長い髪を、魔女がしていたのと同じように頭の後ろで一纏めにして馬の尾のように垂らす。憂鬱に溜め息を漏らすその顔立ちには、頤が細い輪郭の小さな美貌。淫靡な気息さをむんむんと溢れさせる妖艶な美女の姿で、寝台から立ち上がる。簡素ではあるがよく整頓された小部屋。胸で揺れ弾む乳房にバランスを乱され、まだ慣れぬ細足でよろめくと、頑丈そうなドアがノックを伴って開かれた。

「どうだ？ 少しは気分も落ち着いたかな」
涼やかな夜気を纏って入ってくる。鮮烈な存在感。ユージーン・ファウスト・ディオ。

アルベルトが属する白鷺騎士団を率いる、ネオン王国の若き将軍であった。

「は、はいっ、ありがとうございます。私などにごのような部屋を貸し与え下さり……」
ここはそのユージーンが治める領地にある、ごちんまりとした別宅の一室であった。

慌てて跪き伏礼の姿勢を取ろうとするが、笑顔で制され所在なく立ち尽くす。

「ふむ、なかなか似合っているじゃないか。つと、我が騎士団の百人長に、こんな誉め言葉は侮辱になるな。しかし、その姿に合う男物の服がここにはなくてね。しばらく我慢してくれないか」

白い鎧を脱ぎ、白いブラウスとズボンに細剣だけを腰に吊るす軽装となった騎士団長は、美麗な童顔を申し訳なきように緩めていった。背中まで三つ編みに纏めた雪色の髪が揺れる。

「そ、そのような……。あの破廉恥な鎧から着替えてさしていただけだけで、かたじけない思いです」

アルベルトが身につけているのはこの館のメイドたちが着ているのと同じ、襟元を赤いリボンタイで飾ったフリルで飾られた純白ブラウスに膝下までの丈の濃紺のスカート。

下着も女物のショーツを穿かされ、せめてズボンの代わりということなのか黒のタイツが爪先からほっそりとした脹ら脛、張りのある太股、そして女性的な丸みを帯びた下半身までもをびっちり引き締めるように包み込んでいた。

「しかし理解したつもりだが、こうして目にしてると君がああアルベルトだというのが悪い冗談のようだな」

見詰めてくる騎士団長の視線から逃れるように、女の身体を縮こまらせ恥ずかしげに頬を赤らめる。

「私自身、悪夢を見ているようです。このようなこと……信じていただけるとは……。ディオ閣下には、感謝の言葉もございません」

陵辱の中から彼に助け出され、ここまで来る道中、自分の身に起こったことすべてを打ち明けた。当然最初は訝しみながら聞いていた騎士団長だったが言葉交わすうちに、淫靡な魔女の姿をした者がその魔女を討伐に赴いた百人長であると認めてくれたのだ。

「その真面目さはやはりアルベルト・メリン以外の何者でもないな。先ほど聞かせてもらった個人的な事柄も事実だと確認できたし、信じざるを得ないだろう。その上での君の今後の処置なのだが……」

大体の予想はついていった。胸が締め付けられる。「現状で君を王都に連れ帰り事態を説明しても混乱を招くだけだろう。信じてもらえず、魔女として扱われる危険性の方が高い」

この騎士団長の物わかりの良さが特別なのだ。大概の者は、魔女に身体を入れ換えられたなどと訴えても姑息な言い逃れとしか思ってくれないだろう。同僚であるトバイアス百人長から魔女として扱われた残酷な仕打ちの数々が脳裏に甦る。

王都に戻り、王侯貴族や民衆に魔女として扱われれば、あの程度では済まされないだろう。

湯上がりの肌が心地よく火照っている。散々いたぶられた身体の汚れも綺麗さっぱり洗い流された。ネオン王国騎士、アルベルト・メリンは夜の静けさの中ゆつたりとしたベッドに身を横たえ、ぼんやりと視線を漂わせていた。

王国に仕える騎士となるべく、幼い頃から鍛え続けた屈強な肉体はもうない。頭を垂ればいやでも視界に入り込んでくる、二つのはち切れそうな膨らみ。筋肉とは似ても似つかぬ、撓わに熟れ実った乳房が、自分の胸でムッチリと蠢惑の肉感を醸し出し、ブラウスを窮屈に膨らませる。

愛用の長剣など持てぬほど、たおやかに細い腕。体つきもしなやかな丸みを帯びた細いラインに形作られ、鍛えられて引き締まっただけの質は男であったときと根本的に違っている。

そう女……。引き絞ったように腰が括れ、完熟した桃果のように柔らかな尻肉が惱ましく張り出した身体が、いまの若き騎士の姿であった。

地方の町村に厄災をもたらし、禁忌の魔導を探求していた魔女、ナスタロヴィカの討伐に訪れ、捕縛するにまで至ったのだが、己の甘さが仇となつて彼女と身体を交換されてしまった。

「だからひとまずは過去の罪を悔いて改心し、王国に仕える決心をした魔女ナスタロヴィカとして振舞ってらおうかと思うのだが」

「……………はっ？」

思いがけない提案に呆然とした。

自分が魔女を名乗る？

地方の民を苦しめ、自分の部隊を全滅させ、肉体まで奪った忌まわしい魔女などに。

「納得がいけないのは分かる。確かに下賤な魔女と名乗るのは誇りが許さないだろう。しかし馬鹿正直に事実を打ち明けても、罪を逃れ更には王国騎士団百人長の身分まで得ようとしている凶々しい魔女として扱われ、極刑に処されるぞ」

身の証を立てる自信はあるかと問われると、絶対ではない。魔女として酷い仕打ちを受ける前だったらそれでも自分がアルベルトだと主張したが、いまはそれが無謀なことだと理解できる。

「王国は敵であろうとも、心を改め配下に下る者には寛大だ。だからひとまずは屈辱に耐えてでも改心した魔女として振る舞い、真実を訴える機会をうかがうんだ。アルベルト、いや、ナスタロヴィカ!!」

戦場での敵将ならいざ知らず、邪悪な犯罪者を取り立ててくれるのか分からない。それでも騎士団長の説得を聞いていると、魔女と身体を交換されたと訴え続けるよりも希望があるように思えてきた。

「分かり……ました……。私……ま、魔女……ナスタ……ロヴィカ……は、これまでに行った数々の蛮行を悔い詫びて……、以後ネオン王国に仕え、尽力することを誓います……」

毅然と振る舞おうと思うのだが、声の震えが抑えられない。悔しげに歪む顔を見られたくなくて俯いたまま片膝をつき、頭を垂れる。

「魔女ナスタロヴィカよ、汝の改心と忠誠の証、確かに受け取った。その思い、王都にて国王陛下に伝

えよう。そして汝の身柄はネオン王国白鷺騎士団団長ユージン・ファウス・ディオ直属の準騎士として預かることとする」

騎士団長が抜き放った細剣の刃が両肩を軽く叩く。白鷺騎士団へと迎えられた日に誓れ高い想いで受けた騎士任命の儀式を、アルベルトは魔女ナスタロヴィカとして、胸いっばいに満ちる悔しい思いに震えながら再び受けていた。

その夜は肉体的にも精神的にも疲れ果て、床にっくなり夢も見ずに眠りに落ちた。

翌朝目が覚めたのは日が高く東の空に昇った後。それも他者の声に起こされてであった。

「おはようございます、ナスタロヴィカ様」

「ん……、君は……？」

起き抜けのぼんやりとした目に、昨晚アルベルトが着せられたものと同じメイド服を纏った少女が、そばかすを散らしたあどけない顔で笑みを浮かべている姿が映った。鮮やかな赤毛を頭の後ろでお団子に纏めた、胸の膨らみも控えめなスリムな体型の娘

「イレネと申します。この度ユージン様よりあなた様に女性としての仕草や作法など、必要なことをすべてお教えるように申しつかっております」

「女性として、必要、な……。そ、それでは、私のことを……？」

「すべて伺わせていただきました、アルベルト様、いえ、もうこれからはナスタロヴィカ様ですね」

あどけなく笑うメイド娘に、王国の騎士でありながら身体を女へと換えられた情けない男だと知られている。得体の知れない恥辱に顔が真っ赤に上気して、茫然自失に立ち尽くす。

「それでは早速、着替えをいたしましょうね」

そのアルベルトから、イレネは素早い手際でワンピース状の簡素な寝間着を脱がせた。

「はわっ?! ま、待て、なにをっ!! 着替えくらい、自分で出来るぞ!」

「淑女は着替えもメイドに手伝わせるのが慣わしです。いままでのアルベルト様の常識は忘れてください。これからは騎士でありながらレディでもある身として、王国の方々と接していかなくてはならないのですから。はい、では失礼しましゅ」

これまた鮮やかな手際で、下穿きを脱ぎ降ろされてしまった。

「ひうつ! ま、まて、それはっ!! ああつ」

慌てるがもう遅い。昨晚から穿いていた面積の小さなデルタ型の白い布地は、彼女の手の中にある。目覚めたときから、股間にじゅくじゅくと湿った感触があった。失禁したわけではない。けれども間違いなく身体の中から液体が溢れ出て、陰茎が失せ女陰となった股間を濡らしていた。それが、下着の内側にも染みてしまっている。

取り返そうと手を伸ばすが、それよりも早くイレネに広げられてしまった。

「あら?」

当然ながら、すぐに気づかれた。三角形の白い布地の、股間が触れた部分に黄ばんだ汁がくつきりと染みている。

それがなんなのか分からない。けれどとても恥ずかしいものだということは、直感的に理解できた。

真っ赤な顔を汗まみれにして、情けない形相で強張る。さらけ出された陰部では、心許なく綻んだ割れ目の狭間で、その恥ずかしい液体が落ち着かぬヌルヌル感を強めていた。

「大丈夫ですよ。これはオリモノといつて、女の子でしたら誰でも出てきちゃうものですから。もしかすると生理が近いのかもしれないですね」

何事も無いといった風情で下着をたたむと、傍らの洗濯物の籠に寝間着と共に投げ込む。

「オリ、モノ……？ 生理……？」

剣一筋に生きてきた騎士には聞き慣れない言葉だった。首を傾げていると、イレエネが少し恥ずかしく頬を染めながら耳打ちで説明してくれた。

「……なっ!! このような箇所から、血……!!? 私の身体に、そんなことがっ!!」

初めて耳にする女性の現象に衝撃を受けた。そのような構造になっているとは予想だにしない。

「赤ちゃんを産むための大切な仕組みですから」

そのアルベルトに更に衝撃を与えるような言葉が投げつけられた。

「あ、赤ッ!? 子供が……宿る……、のか? この、身体……に……? 私の、子……ッ」

犯されたときにも脳裏を掠めた、恐怖の可能性がざわめき立つ。

（も、もしかすると……あのときに、もう、すでにッ）

受精してしまっただけかもしれない。誰とも知れぬ赤子がもうすでにこの腹の中で、命を芽生えさせ成長を開始しているのかもしれない。いやそれどころか、一番最初にこの肉體で交わった相手……。魔女に奪われたアルベルト自身の身体。そこから放たれた精液が、この女性を孕ませてしまっただけかもしれない。

（私の、子を、わ、私……が……）

自分の子を自分で孕む。まだ確かめようがない倒錯の可能性にへたり込みそうになる。

「それにしてもスタイル抜群ですよ、ナスタロヴィカ様のお身体」

「……ッ!! な……なにをそんなことをっ。このよう、不浄な魔女の身体など!!」

隠しきれない巨乳と、分泌液で花弁が濡れ綻びた股間を手で覆う。

「ダメですね、ナスタロヴィカ様。美しい淑女は賞賛されて当然なのですから、こういうときは誇ら

しげに悠然と微笑まなくては」

アルベルトの反応にメイドが溜め息を吐きながら文句をつけた。

「それにそのお身体はもうあなた様のものなのですから、あまり卑下しますとお心の方まで醜くねじくられてしまいますよ」

納得がいくものではないが、彼女の言葉には妙な説得力があつて言い返せない。

「いまはナスタロヴィカ様の姿で王国の一員として信用を得なくてはならないのでしょうか? でしたら女性の立居振る舞いが出来なくては、野蛮な魔女と誇られて反感を買うことになりまますよ」

そうなのだ。いまこの姿で自分がアルベルト・メリンであると訴えても聞き入れてもらえない。この姿で話を聞いてもらえないようにならなくては。

「わたくしがなにもかも教えて差し上げますからさあまずはお召し物を身につけましょう」

胸を締め付けられるような屈辱感に唇を硬く結びながら、アルベルトはメイドが広げた真新しいショーツに足を通した。男物の肌着とは構造からして違うアンダーレスを着せられ、両脚もガーターベルトで止められた白い長靴下に膝上まで包まれる。

清潔な布地の心地よい肌触りと、敏感な身体をキユッと引き締められるような感触に不思議な高揚を覚え溜め息が溢れた。その上から刺繍とフリルで品よく装飾された、薄紫のドレスを纏わされる。

「まあ! とてもお似合いですよ!!」

弾んだ声で褒められるが、苦虫を噛み潰した表情しか浮かばない。フリルをふんだんに使った過剰な装飾といい、袖口の広がった袖といい、足にまとわりつくゆつたりとしたスカートといい、動きづらくてたまらない。

（こんなものを着ていたら剣もろくに扱えないではないか……）

乳房のサイズを際立たせるために胸の部分が少し窮屈に出来ている。腰もより細く見せるために引き締める構造だ。これでは自然と動きもお淑やかにならざるを得ない。

ヒールの高い靴を履かされ、ツンと尻を迫り上げるように背筋を伸ばして立つ姿勢は、アルベルトが望まなくても女性としての見栄えを最大に強調していた。その様をもう一度見直し、赤毛のメイドが満足げな笑みを満面に湛えて言った。

「それではナスタロヴィカ様、淑女となるためのレッスンを始めましょうか」

レースをふんだんにあしらった更に豪華なドレスを身に纏う。しかも顔には美貌を最大限に際立たせる化粧がイレエネの手によってなされている。

夕暮れの中、速度を増して走り続ける馬車の中でアルベルトは初陣に赴く新兵の心持ちで妖艶な美貌を曇らせた。いや実際にこれは彼にとつて女としての初陣なのだろう。

王都へ赴いた騎士団長からこのドレスと共に届けられた手紙に、幾度となく目を通す。

罪を認め悔い改めた、魔女ナスタロヴィカの騎士採用を王へと上申した後、ユージーンは婚約者であるアリシア女王へアルベルトの身に起こったことを打ち明け相談したのだという。

この荒唐無稽な出来事に女王は興味を抱き、女身となった若き騎士との面会を求めて主催の舞踏会へ招待してきた。

（その場で私がアルベルト・メリンであると証明できれば）

必死で訴える自分へ、戦友を騙る許すまじ魔女と憤怒の眼差しを向けてきたバイアス百人長の姿が、一瞬脳裏に甦った。

（いや、弱気になるな、アルベルト!! 姫様ならき

つと……ッ！)

げな容姿ながら聡明で知られる、銀の髪も艶やかな姫君に賭けるしかない。

出立前、前途を祝してと注いでくれた甘く爽やかな果実酒が、身体を仄かに火照らせている。

不安を打ち払うように気を高めていると、馬車が静かに停車した。

「姫様主催の宴なのだからつぎ王都で行われると思つていたのだが……」

馬車から降りて唾然と見渡す。なにもない荒野に、古めかしい館が一軒だけぽつんと建っている。

おかしい。こんな朽ちる寸前の建物が王族が主催した舞踏会の会場であるわけない。しかし……

宴のことは他でもない騎士団長直筆の手紙にて知らされたのだ。そしてアリシア王女の王族らしからぬ型破りな行動の数々も惚気話として以前から聞かされている。

意を決して進み出ると、自分をここまで連れてきた物言わぬ御者が恭しく扉を開く。その途端、

「うおっ、ようやくの到着だぜ！ アルベルトの部隊を全滅させやがったクソ魔女様がよおっ!!」

「へっ、こりやまた派手に着飾ってるぜ。さすが男を誘う術を心得てやがる！」

割れんばかりの狂乱の声と、酒と吐瀉物の入り混じった匂いが溢れかえった。

「これ……は……?! ——あうっ！」

呆気に取られて立ち尽くしていると、乱痴氣騒ぎを繰り広げる男たちに中へと引き込まれた。

「ここは……王女殿下の舞踏会場ではないのか？」

目眩を感じながら見渡すと、なみなみと注がれた杯を手にならなく泥酔する荒くれ者の中、いくつもの見知った顔があった。アルベルトが属する白鷲

に加え、他の騎士団の連中や、王城にて要職を務める名だたる貴族たちが、上等な酒をまるで安酒のよ

うに飲み干し、下品な笑い声を張り上げて騒ぎに耽る。

「ばーか、姫様の舞踏会なら今頃王都の会場でそろそろ始まった頃だろうよ」

「ここは俺たちが羽目を外すお楽しみのみ場だよ。今宵はいま噂のクソ魔女様、ナスタロヴィカ嬢を迎えるということで、盛り上がりも最高潮だぜっ！」

下品な罵声と嘲り笑う声が飛び交う。謀られた騎士団長に？ いや親身になってくれている彼が裏切るわけない。アルベルトの換身を疑っているのなら、最初から魔女として処断すればいいのだから。

恐ろくは王城でのユージーンと王女の会話を誰かが盗み聞きしていて、迎えの馬車を装いここにアルベルトを連れてきたのだろう。

「私は姫殿下に招待されたのだ。貴公らの相手をしている暇などない!!」

踵を返し、館を出ようとする。

「おっと、逃がすかよ!! 待ちくたびれてたんだ、たつぷりと楽しませてもらうぜ!!」

その肩口を後ろから力任せに掴まれた。

「くっ! は、放せっ。あわっ!!」

振り払おうとしたが、高い踵の靴と足にまとわりつくドレスの裾がそれを邪魔した。

バランスを崩し倒れ込む。それを戻そうと、男の手が強引に引つ張った挙げ句、豪華なドレスが背中

の合わせ目からビリビリと破かれてしまった。

胸元が捲れ落ち、ただでさえ谷間を大胆に覗かせていた豊満な膨らみが殆ど露わとなってしまう。

「うわあっ! み、見るなっ!!」

慌てて両手で覆う。下に着けたビスチェのおかげで乳首を含む下側は辛うじて隠れている。だが生膨らみに食い込んでくる興奮の眼差しは、物理的な圧迫となって焦りを煽り立てた。バランスを崩したままの身体が男の腕に軽々と持ち上げられてしまう。

「は、放せっ!! ああっ!!」

「そらよっ! その見事な体つきの裸、俺らの前で披露してくれやっ」

「あ、あれは、ポートノイ侯爵!! シュレニアン千人長までっ!!」

以前から親交を深めていた顔ぶれが、酒に酔った赤ら顔を醜く歪めて下品に喚き立てる。

男たちの粘り着く視線に晒され、恥ずかしさと屈辱で全身が灼熱に見舞われたように熱い。

身体の奥から全身を苛む灼熱に、なにもかもが崩れるような感覚へと陥っていると、ホルルの奥に設えられた舞台の上へと押し上げられた。

「ひゅ、いいぞっ。町の連中に犯されているのに大喜びで腰振っていた淫乱魔女の裸踊りだ!!!」

「裸、踊り……、だと……?」

この間にもますます破れ目が広がるドレスの、胸元と股間を隠して立ち尽くす。

「どうした、もったいぶってんじやねえぞっ!!」

「早く脱げっ! とつとと乳見せろっ!!」

「ふ、ふざけるなっ!! そのような破廉恥な行為など、誰がっ。帰らせてもらうぞっ!!」

強引に舞台を降りようと試みた。

「おっと、逃がすかよ!!」

だが、かぶりつきで押し寄せる男たちに阻まれてしまった。非力な身体が軽々と突き飛ばされる。

「ああっ!!」

甲高い悲鳴を上げて尻餅をつき、あられもなく開脚したその奥に女物のショーツを晒す。ドレスに下着のラインが浮き出るといけないからと、メイド娘が選んだ布面積が極端に少ないデザイン。その紐に近いほど細くなった部分が、安産型の肉付きが良い尻房に食い込んで、男どもをどよめかせた。

「——くうっ!!」

慌てて脚を窄め、破けてはだけたドレスの裾で覆

い隠す。もちろん片手で胸を死守するのも忘れないその仕草と、怒りを滲ませながら恥ずかしそうに頬を赤らめる表情が女っぽさ満点で、ますます男たちの劣情が煽り立てられた。

「私は……男、だっ！」

自分自身を確かめるように強く呟くと、ヒールの高い靴を放り投げる。立ち上がりながら破れたドレスも自分から脱ぎ捨てようとした瞬間、

「ふあっ!!」

全身を襲う違和感を詰まらせた。

中腰に立ち上がりかけた姿勢で身を強張らせ、驚きに目を見開く。その途中で、

「——!! どうしたと、いうんだ……? 熱くて、たまらないッ。まさか、病気? いや……」

全身の火照りが一段と勢いを増す。病ならば吐き気や身体の痛みが伴うはずだが、そういった苦痛は感じられない。

むしろ妙な心地よさで虚脱感をもたらしてくる。むしろ妙な心地よさで虚脱感をもたらしてくる。

(こ、これでは……、突破できないッ)

いまへつびり腰で身体を支えている脚が、カクカク小刻みに震えている。この場を逃げ出す唯一の手立てである身軽さと俊敏さが発揮できない。ますます身体の熱は火照りを増し、滝のような汗が肌から滲み出て破けたドレスをじつとりと濡らしていた。

「おいおい、どうした緊張しちやっつかか?」

「俺たちに見られるのが嬉しくて興奮してるんじゃないのか? 汗で透けて見えてきてるし」

「はうっ?! く……う……」

肌へはばり付く感触が気持ち悪くなってきた上等な布地が危うい状態となっていた。観衆のヤジにそれを教えられ、手で隠そうとする。胸と股間の局所は辛うじて防げたがそれ以外の太股や括れた腰などが、薄紫の淫靡なペール越しに生肌を悩ましく透けさせて、男たちの視線を引きつけていた。

「下着はもつと濡れてるみたいだぜ。手、どけたら服着けたままなのに全部丸見えになっちゃうなっ！」

「それより後ろ向けっ!! ケツもスケスケになつてるんだろ!!」

確かにショーツもドレスのスカート部もぐつしより湿って、尻房の丸みにびつとりと密着していたそんな状態で絶対に振り向くわけなどいかなない。汗をますます吸ってヌメリを増してゆく衣装から手を離すわけにはいかなない。しかし、

(く、熱くて……たまら、ない。それに、ドレス……)

肌が、気持ち悪く……。ますます、熱くて)

汗を含んで貼り付く布地が熱を籠もらせる。上質な布がいつまでも水分を抱え込んで蒸発させないため、全然冷えてくれないのだ。これを脱ぎ捨てて外気に肌を晒せばどれだけ楽だろうか。

「スケスケもいいけれど、早く邪魔な服脱げよ!」

その願望を後押しするように男たちの歓声が脱衣を求める。

「すまして突っ立ってないでもつと身体動かせ! 腰振って踊れっ!!」

下卑た笑いで囁し立てられ、意地でも従うものかと憤るが熱さで頭が朦朧とする。このままでは倒れるのも時間の問題だ。

(ド、ドレス……だけなら……、いや、そのような真似ッ。しかし、この熱さ……)

すでに汗が染みて透けた生地は身体を隠す役割を完全に失っている。脱げば熱さを和らげられるのは分かっているが、いまのこの身体で男の前に肌を晒すのはあまりにもはしたなすぎる。

けれど、もう我慢の限界だ。

「お前たち、に、見せるわけじゃ、ない、からな」

求められて応じたと思われてはたまらない。潤む瞳で懸命に睨み付けながら告げると、なぜか歓声が

一段と昂った。その首庄に喘ぎながらアルベルトはぼろぼろに破けて濡れそぼったドレスの残骸から手を離れた。

ズル……、ヌチュル……、グチョ……。

「ん……うっ、く、ふ……」

汗をふんだんに吸った布地が自らの重さで勝手にずり落ちる。ヌルヌルした衣擦れのこそばゆさにゾクゾクと腰が浮き立った。

(は……ああっ!! こんな、はしたない様ッ、見られてっ、見られてしまっているのにッ! く……ううッ、気持ち……イイ……)

好色な視線に晒された状況で認めたくなどないのだが、肉体を揺るがす感覚に逆らえない。

蒸れ蒸れに籠もった熱から解き放たれ、素肌に外気が触れる。開放的な涼しさに虚脱感が増して思わ

ずへたり込みそうになる。膣口と尻穴がふわつと緩みかけ、慌てて気を取り直すと、

「やっ脱ぎやがった!! もつたいぶりやがって」

「うはあ、思った通りすごい乳だ。下着から殆どはみ出してるっ!」

一斉に男たちが舞台上に押し寄せてきた。我先にと

かぶりつきで魔女の悩乱ボディを舐め回すように觀賞する。その勢いに気圧され、アルベルトはよろめきながら後ずさった。

「く……う、見る……な……ッ」

純白の極小サイズなショーツが申し訳程度に股間

を覆い、豊かに熟れた安産尻の房を大胆に布地から溢れさせていた。細腰との対比も見事に張り出した骨盤へ巻き付くガーターの細いベルトが太股を這い、膝上までの黒いストッキングを吊り下げる。

そして括れた腰を更に細く絞った紐編みの白いビ

スチエが、豊富な質量を誇る柔軟巨乳を収めきれず、

乳輪の縁がはみ出るすれすれまで露出させていた。

「それにしても、下着まで汗でぐつちよぐちよだな。

あれじゃ脱がなくても大差ねえぜ

股間でも申し訳程度の淡い陰毛が生えた土手高な恥丘の下、女陰が紅色の淫裂を綻ばせている様が見えたり、手で隠そうとしているのだが、どうしても完全には遮れない。

「く、むしゃぶりつきてえ！ 下劣な魔女のくせに、いい身体しやがってっ!!」

「手足もすらつとして腰も細いくせに、乳や尻ばかりあんなにでかいなんて、身体いやらしすぎるだろ!! ぶち込んだら良い声で悶えるんだろなあ」

（また、あんな、ことを……あうっ!!）

ヨダレを吸りながらニタニタ笑う男たちから後ずさろうとして、自分が脱ぎ捨てた衣装に足を取られる。しかも垂れ落ちた大量の汗に滑り転倒した。

「おいおい、しつかりしろよ!」

無様を笑う声が押し寄せる。

「く、そ……ふあっ! 汗、が……」

急いで起き上がろうとするが、床を濡らす汗が妙に滑る。その上、熱を持った子宮の疼きがまた一段と切迫的になり落ち着かぬ衝動で手足を萎えさせた。それでもどうにか四つん這いに身を起すが、上半身がへなへたと突っ伏し巨乳を床に押し拉げる。

（腕……に、力が、入らない……っ）

その姿勢がまた、尻を観客に向けて突き出しておねだりするような、はしたないものとなった。

「うおっ、すげえ! ケツあんなに突き上げるから、下着完全に食い込んでるぞ!!」

「股ぐらの方も透けるどころか割れ目が布くわえ込んでるし。中のびらびらはみ出しちゃってる!」

（へあっ?! な、にい……ッ! んうッ!!）

メイドが選んだショーツが小さすぎるのだ。お淑やかにドレスを纏っているだけなら問題ないが、こんな不自然な姿勢を取るとたちどころに完熟の肉体を収めきれなくなる。上体を起こそうと踏ん張るが、

脱力した細腕はヌルヌルする床で滑るばかり。むしろ巨尻を床で押し潰しながらますます突っ伏すことになり、一段と迫り上がった股間の割れ目で、食い込んだショーツがずるりと秘裂粘膜を摩擦した。

「あひっ! ク………ンッ!!」

ただでさえ火照った肉の奥底から、灼熱の溶岩弾が炸裂した。快感と言うにはあまりにも激しい、全身を溶かすような刺激が膣前庭から走り抜ける。

尿意が膨れあがり膀胱を切迫させる。

（ひ……ッ、ううっ!! ああ、あッ! 我慢ッ!!）

我慢、しなくてはっ! お、おおうっ!! ンッ

男のときより格段に短くなった尿道がその分急速に危険な込み上げを感じた。大慌てで股を窄め、息を止めて括約筋を引き締める。

「あひゅうッ!! やっ、だ、め、だ、あああッ!」

だがそれも虚しかった。問答無用に尿口がふわんと緩み開き、一気に黄金色の小水が溢れ出る。

しばああああ、じよぼじよぼじよぼ、じよろろろ……

「魔女のヤツ、小便漏らしやがったっ!」

「うへええ、すげえ量だな。しかも匂いも強烈だぜ」

「汗にま……こ汁に、今度はおしっこかよ。よくよく汁垂らすのが好きな女だな」

いくら括約筋を引き絞っても一度排出を開始した尿はむしろ勢いを強め、香ばしい匂いを振りまきながらびちゃびちゃと滝のように迸った。

（んくうううう、あああ、と、止まらないッ!）

こんなッ、あ、ああああ……ッ!!）

騎士として、いやそれ以前に人として、あまりにも情けなさ過ぎる。

「んあッ、は、あう、うう……ッ」

ようやく放尿が収まっても股間の小刻みな震えが止まらない。火照った体温そのままに熱せられた大量の液体が気を緩ませるような暖かさで両脚をぐち

よぐちよに濡らし、特有の香ばしい臭気と共に湯気を昇らせた。汗よりもさらさら感の高い小便にまみれた両脚が床の上で滑る。

立ち上がることは諦め、ならば汗と小便にまみれながら亀のように蹲ろうとするのだが膝立ちにつき上がった尻が迫り上がったまま微かにくねる。

失禁の放出感に解消されるどころか、女性の疼きは一段と強くなっていた。

（ああ、あ、どうなって……? この、身体あ）

振れたショーツを挟み込んだ陰唇の奥で、膣口が開きっぱなしになっている。

「牝臭い小便の匂いさせやがって。なんだかんだもうすっかりその気じゃねえか」

「あ、あ、あそこひゅくひゅくしっぱなしになっちゃって。もうこれ以上辛抱できないみたいだな」

男たちの言う通り、淫乱な魔女の身体は飢餓状態になっている。

「ち、がう……こんなの、は、ね、熱のせい……見るなッ、これ以上ッ。私を、ここから出せえ」

誘うように尻をクイッククイックと揺らしながら言葉だけは意地を張る。だがそんな拒絶の言葉も男たちの耳にはこれっぽっちも届いていなかった。

「じゃあまずは俺からいかせてもらうぜ」

好色な表情を隠そうともせず、屈強な体つきをした男が舞台へ上がってきた。その姿には見覚えがある。騎士団の他の部隊の兵士だ。当然彼もアルベルト・メリンを知っているはずだ。

魔女の正体がその百人長だと彼に分かるわけもないが、どうしても不安が抑えられない。

「最初から飛ばしすぎて、ぶっ壊すんじゃねえぞ」

「俺たちにも楽しみを残しとけよなッ!」

あらかじめ取り決めがされていたのだから、抜け駆けと責める声はなく、むしろヤジと笑い声が飛び交う。その仲間たちにフンと鼻を鳴らし応える

しかし現実には
俺の想像以上に
不条理で……
つつーか……

——なんて
漫画には
よくある話だ

「君を狙う悪魔から
守ってあげる」
と言って居着いて
しまった——

ある日突然
「大使」を名乗る
奴があらわれて

あは、
今日こそ
救世主の
子種……

ちゃんとこっちに
どぶどぶってして
くれなきゃ

もーらいつ……

く……
うっ!?

ん……ふふっ
まだだーめ

朝一番の
元氣な精子は——

朝から積極的な
天使ちゃん!!

これなんて
エロゲ!?

朝から……
……

**ANGEL
DEVIL**
エンジェル オア デビル?
漫画 老眼
COMIC



……もおー
しつこいっ!

あ……す
スママセン……
（ていうか壁……）

士郎様も……こっ
こういうのは
いけないと
思います!



アンタがいつも
邪魔するせいでまだ
一回も臆内射精して
もらえてないし!

ななか……
~~~~っ!!



あたしと士郎の  
セックスを  
邪魔しないでよ  
この悪魔!

セ……っ!?



……な何を  
やっているんですか  
天使さん……っ!



ちょっ  
部屋の中で  
そんなもの……

この世のために  
今日こそ決着を  
つけてやるん  
だから!



ふん良いわ!  
あたしの……  
……じゃなかった



!!!

……口で言うて  
通じる方では  
ありません  
でしたね……

我が故郷の  
復興のため

今日こそ  
貴方には天界へ  
お帰り頂きます！



なによっ！

アンタだって  
目的はあたしと  
同じじゃない！

あつ…貴方とは  
一緒にしないで  
ください！  
出世のために  
士郎様を利用  
するなんて！

触手の叔父様は  
紳士で心優しい  
お方です！

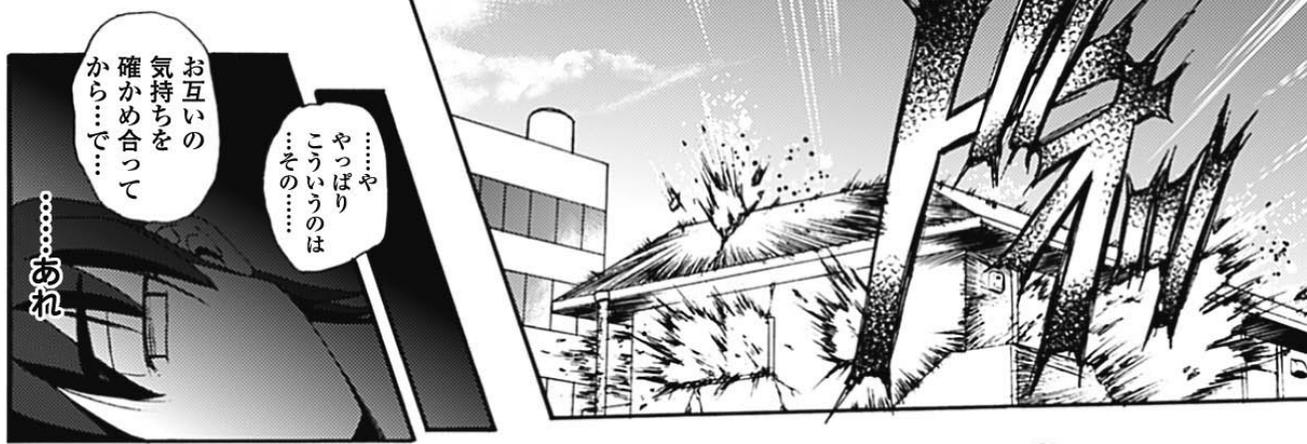
我が一族までも  
侮辱するとは…っ  
もう許しません！

田舎娘は  
寂れた魔界で  
醜悪な触手にでも  
陵辱されて  
なさいよっ！

だから  
俺の部屋で！！

これ以上  
暴れるな  
！！





お互いの  
気持ちをは  
確かめ合っ  
てから……で……

……や  
やっぱり  
こういうのは  
……その……

……あれ



そんなこと  
言ってる  
場合じゃない  
でしょ

士郎に本格的に  
死なれたら  
あたしもアンタも  
困るんだから

俺……  
一体……  
どうして  
……

それじゃ  
一時休戦ね  
わっ  
コッチは  
元気☆

す凄い……  
これが  
殿方の……

そそりですね……  
原因は私にも  
ありますし……

身体……  
動かない……

でも……何か  
下半身が  
熱くて……



——って  
ええッ!?

あぶっ  
あぶっ  
あぶっ

まるでフェラ  
されてる  
みたいにな……



いただき  
まーす♡

ぬめぬめした  
温かいのが  
絡みついて……

わ私も  
失礼……  
しますね

すげえ……  
気持ちいい……

あ  
いひきもろつら  
みはいれ  
(意識戻った  
みたいね)

ふえ…  
あつ!?  
やだ私  
はしたない  
……っ

もお今更  
何言つてんの

死…んだ!?

もお見事に  
跡形もなく  
消し飛ん  
じゃってね

士郎  
アンタさつき  
軽く死んだのよ

部屋とかは  
あたしの力で元  
戻せるけど…

生きた肉体を  
創るのは天界じゃ  
禁忌だから

ええと…  
私が魔術で肉体を  
組成して…

あつそれ  
あたしの!

ヤバ…っ  
股間に全神経が  
集中してる  
せいか…

気持ち良すぎて  
説明を聞くと  
じゃない…!!

このままじゃ  
もう…でっ

出るッ!!

あ…天使さん  
そそれで…  
ずるい…っ

お互いの  
力がうまく  
噛み合わ  
なくて

士郎様の魂を  
戻すために  
天使さんが  
生命力を  
注いだら…

生命力がおん  
…ここに集中して  
しまってます…



士郎様の  
子種が……

そんな  
……

わんわん

おはるうう……

わんわん  
わんわん



あつ……ああ



あ……



つ……次は  
私がっ!

こうして  
生命力を抜いて  
バランスを  
取りやすくする  
ってワケ

あは☆  
一回じゃまだ全然  
ガツチガチだあ♡

そそれで……  
なんでまだ  
こんなコト……?

ん? あー  
だからね

うおっ!?  
悪魔さんの  
巨乳が……ッ!

あつ...やあ...  
こ 擦れて...っ  
ちく...びっ!?

おっぱいが  
大きいからって  
調子に  
乗らないでよ!  
胸は大ききより  
形と性能  
なんだから!

くうう...っ

は...  
恥かしい...けど  
私...頑張ります  
から...っ

良い?  
早く抜かないと  
元に戻れなく  
なっちゃうん  
だからね!

すすげえ...  
4つのおっぱいに  
押しつぶされて...っ!?

ほらっ  
またあたしの  
おっぱいで  
いっちゃい  
なさいよ!

気持ち...  
良すぎて...

あ...あれ?  
おん...ん  
凄く脈打って...

なに...も  
かんがえ  
られ...

凶悪な柔らかさと  
乳首のゴロゴロ感が  
.....



天才錬金術士の  
過酷で淫靡な畏れ!?  
ふたりの快感錬成術

# あるけみぱにく

Alchemy Panic ~ふたりの快感錬成術~

小説  
NOVEL  
みつやようすけ  
**三津谷鷹介**

挿絵  
ILLUSTRATION  
いとう  
**井藤ななみ**

日の光が射し込む事のない重く湿った闇の中で、青白い光がぼんやりと周囲を照らし出していた。

光を放っているのは、一人の少女が提げたランタンだった。油を燃やして得られる通常のそれとは明らかに違う光の色は、その光源が魔術的なものである事を示している。

「シエナ先生、ここもないのかな？」  
少女は灯りを掲げてきよるきよると辺りを見回しながら、可憐なあどけない声で何者かに問いを投げかけた。

「今のところ、まだ見つからないわね。もっと奥へ進んでみましょうか」

少女に「先生」と呼ばれた人物が、冷静に答えを返しながら暗闇から光の輪の中に姿を現す。

しつとりとした、落ち着いた声から想像される印象をいささか裏切って、声の主はまだ若い女性だった。

すらりとした長身に落ち着いた色合いの上衣やマントを重ね、肩口まで伸ばした藍色の髪の上には呪紋の入った帽子をかぶっている。端正かつ知的な美貌の方は声の印象通りだが、深い青色の瞳には優しく思慮深げな光が宿り、冷たい印象はまったく与えない。

驚くべきは、二十歳そこそこと見受けられる若さでありながら錬金術マスターの証である自らの尾を啜る蛇の装飾が入った杖を携えている事で、つまりシエナと呼ばれたこの女性は錬金術師、それも熟練者クラスの技量の持ち主という事になる。

「本当にこの洞窟にあるのかなあ」

「フアン。素材の採取は自然が相手。必ずしも自分の思い通りにいく訳ではないと、いつも教えているはずよ」

ランタンを持つ少女——フアンというらしい——は、彼女の弟子のようだった。その言をあくまで穏やかにたしなめながら、シエナは周囲を見やる。「昏晶石はわずかな光量にでも反応すると言われているから、やはりこの辺りにはないようね」

「はあ、まだ潜るのか……」

フアンはやれやれといった調子で首を振ると、再びランタンをかざして足を踏み出した。灯りを高く掲げた拍子に、その顔が照らし出される。

シエナの美貌が大人の落ち着きと知性の賜物とすれば、こちらは成長過程の少女が持つ無垢さによつて形作られる危うい美しさを湛えていた。

白磁にエメラルドをはめ込んだような淡いグリーンにきらめく瞳と、三つ編みのお下げに結んだ亜麻色の髪。肌が透けるほどの薄物の短衣と、太腿がむき出しの短いパンツに身を包んだ様は、まるで上流階級の娘が自室のベッドでくつろいでいるかのごとき出で立ちだ。シエナとお揃いの帽子とマントがなければ、とてもではないが洞窟の暗闇に踏み込んだ錬金術師の片割れとは思えなかった。

「まっ、いつか。ボクたちが苦勞すればするほど手に入れた素材に箔が付くってもんだし、その分情報も価値が上

がるよねっ！」

「また、貴女はすぐにそんな事を言い出す……」

しかし、その清楚可憐な少女が軽薄な調子で口にしたのは、開き直ったように身も蓋もない言葉だった。後ろをついていくシエナは秀麗な眉根をやや寄せて苦言を呈するものの、弟子のこういった物言いはいつもの事なので半ば呆れ調子である。

「今、私たちが探している昏晶石は、おそらくすぐに価値が出るという物ではないわ。ただ、その性質と形成される条件を解析する事によつて……」

お決まりのお説教が始まりそうになったその瞬間、シエナの鋭敏な感覚がそれまでと異なる空気を察知した。

「……フアン！」

「えっ?! 何、せんせ……うっ！」  
何歩か先に進んだところで、フアンもやつと異常に気付く。

それは、まず息の詰まる生臭さとして暗闇の中で彼女たちの嗅覚を強く刺激してきた。続いて、皮膚に振動として感じられるような低く長い呼吸音が伝わり、最後にフアンの手にしたランタンの青白い光が灰色のぬめりとした鱗を照らし出す。

やや開けた広間のような一隅で、その生物、仔牛ほどもある巨大なトカゲは、数匹の群れでどぐるを巻くようにしてうずくまっていた。

驚きのあまり、フアンはその場に固まってしまふ。しかし、シエナは臆

する様子もなく、そのまま少女を追い越して前に歩いていこうとした。

「ちよ、ちよと先生、もう少しそーつと……」

追いつがりがつ言いさしたところで、トカゲの一匹がぴくりと頭を起こすのが彼女の目に入る。するとそれが合図であつたかのように、群れの全てが頭をもたげてこちらに向けてきた。

思わずフアンが再び身をすくませたその時、シエナが一瞬の遅滞もない滑らかな動作で腰のポーチから小さな丸薬と紙の薬包を取り出した。杖を小脇に抱え、手早く薬包を開いて丸薬ごと包み直すと、振り向きもせず冷静な声でフアンに告げる。

「ちよつと臭うわよ」

え？ と少女がその言葉の意味を理解するよりも早く、シエナは紙包みを思い切りトカゲたちの群れの手前の地面に叩き込んだ。

瞬間、暗闇を真昼のように照らす閃光と熱風が炸裂し、同時にツンと鼻を突く刺激的な臭いが周囲に充満する。

「……うえっ！ 何これっ！」

鼻を押さえても防ぎきれない強烈な臭いにフアンはむせつつ咳き込んだ。しばしの後、ようやく落ち着いて顔を上げた彼女の涙で滲み視界には、こちらを睨みつけていた巨大トカゲたちが残らず首をべつたりと地面に垂らして伸びている姿が映っていた。

「せ、先生、これって……」  
「さ、今のうちに進みましょう」

まだ辺りに濃く漂う刺激臭にも涼しげな表情を崩さず、練達の女錬金術師は涙目の弟子をうながした。

「ねえ先生、さっきのは？」

再びランタンを持って師の先に立ち、しばらく歩いた後でフアノンがシエナに問いかけた。

「あの種のトカゲ類は、視覚や聴覚でなく熱と臭いで獲物を探すから、足音を忍ばせたりしても無意味なのよ。だから光熱弾と硫酢粉で一時的に麻痺してもらおう事にしたの」

「……さっすが、天才錬金術師！」

調子のいい弟子のお愛想に、普段ならば苦笑混じりに来るはずの返事がない。フアノンが思わず振り返ると、シエナは何か物思いにふけっているようだった。

「シエナ先生？」

「……あれは確かに、アカメハイイロトカゲだったわ。本来なら、ずっと西方の湿地に生息するはずの種」

「どういう事？」

「分からない？ いるべきでない所にいるべきでない生物がいる。それはつまり、何者かに召喚されたという事よ」

「それって……」

「そう」  
もはや難しい表情を隠そうとせず、シエナは淡々と自分の考えを述べた。

「この洞窟には、主がいるのね。それもおそらくは、高位の魔術使いが」

トカゲと遭遇した層から一つ縦穴を下りたところで、彼女たちは目当ての希少な鉱石の鉱脈に行き当たった。

フアノンの持つランタンの光を受けて、洞窟の壁に橙色に輝く光の帯が無数に浮かび上がっている。その名の通り、黄昏の空の色にも似た昏晶石の原石が壁から露出しているのだった。

「やつほー！ こんだけあれば取り放題だね、シエナ先生！」  
興奮したフアノンが、鼻息も荒く壁際に走り寄っていく。手ごろな塊を一つむしり取ったところで、師匠から制止の声が飛んだ。

「駄目よ、フアノン。それを持って帰る訳にはいかないわ」  
「え？ だってボクたち、これ取りに来たんじゃないの？」

結晶を採集用の袋に押し込もうとした姿勢のまま、首だけ後ろに向けてフアノンは問いかけた。

「もちろんそうよ。けれど、さつきも言ったでしょう。この洞窟には住人がいるかもしれない……。となると、そこにある物を勝手に取ってはいけないの。たとえそれが自然物であれ、主の了解を得た上で採取させてもらうというのが魔術師同士の取り決めなのよ」

「えー、面倒くさいなあー」  
「そういうルールなんだから、仕方ないでしょう？」

横着な弟子がこねる駄々は、もちろん師匠には通用しなかった。

「……ふう。先生はちよつと固すぎるところがあるんだよねー。そんなんだから美人だし街の男の人たちにも人気あるのに、まだ処……」

「そつ、それはっ！ 今、関係ない話でしょつ！」

珍しくシエナが慌てた声を上げた。  
「貴女の方がふしだらすぎる生活を送っているんですつ！ 何なの、いつも違う男の人と……」

「あ、ボクだって別に誰とでもエッチしてる訳じゃないよ？ 好みに合った格好いいお兄さんじゃないと……」

「そういう意味じゃなくてっ！」  
普段は冷静なシエナだが、色恋話になると途端におたおたとうろたえてしまう。その隙に、フアノンは手にした石をそのまま袋の中に押し込んだ。

（いいや、今のうちに一個もらっちゃえ。許可ももらった後で拾うのも、先に拾うのも一緒だよ）

「……とにかくっ！ 一番奥まで進んで、本当に人が住んでいるのか確かめます！ 素材の採集はそれからよ！」

「はあい……」  
一応、おとなしく従ったふりをして

おいて、フアノンは壁から離れて師匠の元へ戻っていった。

「何あれっ！ でっかいよ先生！」

「どうやら、もう間違いないわね」  
岩陰に隠れ、潜めた声で囁き交わす彼女たちの視線の先には、のっぺりした円柱状の体幹から無数の細長い触腕

を生やした生物が立っている。ローパーと呼ばれる、特に珍しくもない原始的な生命体だった。ただしフアノンの言葉通り、異様なまでに大きい。

通常はせいぜい人間の腰くらいまでの高さで、触手の毒液で小動物を麻痺させては捕食する無害な生物なのだが、今シエナたちの目の前にいる個体は見上げるほどの大きさにスケールアップしていた。触手も太く多く、まるで通路を塞ぐかのように周囲に張り出してうねうねと蠢いている。明らかに自然に発生した物ではなかった。

とは言え、怪物の背後には、奥へと通じる開口部が見えている。何とかして攻略しなければ先へは進めない。

「爆弾でやっつけちゃうとか」  
「……おそらくは洞窟の主が魔術で創造したものである以上、手荒な真似は避けたいわね。やっぱり今度も眠らせる作戦でいきましょう」

シエナは術式の触媒を収めたボトルを探り、液体の入った小さな試験管を取り出して、下から腕を振って怪物の方に投げつける。手前の地面で碎けて飛び散った試験管の中身は、すぐに激しく泡立って白い霧を生成し、ローパーの体幹を覆っていった。

薬の効果を待つシエナたちの前で、道を塞ぐようにうねり続けていた触手がやがてだらりと力なく弛緩する。

「今のうちに横をすり抜けるわよ」  
再びシエナが先に立ち、奥の開口部目指して歩き出した。フアノンも行く

手を照らしつつその後を追いかけたが、怪物の身体と行く先を気にするあまり、足元がお留守になつていた。

ぎゅむっ。

柔らかい割に妙に張りのある異様な感触を、フアンは足裏に覚える。

「……………」

慌てて下を見ると、触手の一本が床を這って彼女の足元にまで伸びており、彼女の靴はそれを踏みつけていた。

「ま、まずっ……」

言い終わるよりも早く、垂れ下がっていた触手の群れが一斉にぞわぞわと蠢き始めた。

「走りなさい！ 急いで！」

フアンの声に振り返ったシエナが叱咤する。フアンが地面を蹴った直後、その位置を触手が嫌いだ。二波三波と続けて振り下ろされるのを何とかかわしつつ、シエナを追って走る。

そのまま走り、あと数歩で敵の攻撃範囲から逃れられると思つた瞬間、行く手を一本の触手が通り過ぎ、フアンは思わずたたらを踏んで立ち止まってしまった。刹那、後ろから電光の速度で伸びた太い触手が両腕ごと彼女の胴体をぐるぐる巻きにして拘束する。

「あつ！ 放せよ……うぐっ！」

悲鳴とも罵罵ともつかない声を上げる口の中に別の触手が捻じ込まれる。

「フアン！」

弟子の危機に、シエナは思わず二三歩踏み出した。しまった、と思う間もなく彼女の元にも触手が殺到し、両手

首をそれぞれ別に搦め捕る。かろうじて杖を手放す事は免れたものの、これでポーチから触媒を取り出す動きは封じられた。

（これは、ちよつとまずいかしらね）

視線の先では、胴を縛り上げられ、喉の奥まで触手を突き込まれた少女が、目を白黒させながら抵抗を続けていた。激しい動きに短いパンツの裾がお尻に食い込み、太腿から続く真っ白な肌が露わになつている。その口へと続く触手が波のように脈打つてのを見て、シエナは弟子の危機が差し迫つたものである事を知つた。麻痺毒を注がれているのだ。

（まだ手はあるけど、使つたら確実にあれを倒してしまふ。そうなつたら洞窟の主の機嫌を損ねるかも……。でも、フアンをあのままにする訳にもいかない。何か他に方法はないの!?）

焦りつつ、同じ危険が自分にも迫っている事を悟る。手首だけでなく、別の触手があちこちから服の中に侵入し、体液の尾を引きながら肌の上を這いずり回り始めているのだつた。

しかし予想に反して、肌に麻痺毒が付着したならまず感じられるはずの感覚の鈍麻は、いつまで経っても訪れなかった。むしろ動悸が激しくなり、触覚が過敏になつたような感覚すらある。頭に霞がかかったようで、思考がうまくまとまらなくなつていた。

（発熱？ 酩酊？ この症状は、一体どういう事なの……？）

とまどう理知的な美女を嘲笑うかのように、太い触手ががら空きになつた胴にぐるりと巻きつく。上下から搾り出されるようにして、胸の膨らみの形が露わになつた。

「ん、くっ……！」

自分でも気付かないうちに張つていた乳房を責められて、シエナが呻いた。上衣に隠されている時は分からなかったが、スリムな外見に反して二つの果実は豊かに成熟している。乳房自身の重みで揺れる動きに、いつの間にか屹立していた乳首が服の裏地で擦られ、同時に意思とは関係なく秘所がじわりと潤うのを感じて、堅物の女錬金術師もようやく自分の身体の変調の正体に気付いた。

（この毒の効果、麻痺じゃない！

……まさか、媚薬!?）

「フアン……」

「はあ、んっ！」

注意のため呼びかけた声と同時に艶めいた吐息が聞こえ、シエナは思わず弟子の名を途中で飲み込んでいた。

小柄な少女の身を包んでいた衣装のうち、邪魔なマントはむしり取られ、短衣もはだけられて、細い肩とささやかな膨らみの白い胸が露わにされていた。その頂点では、桜色の小さな乳首が自分のそれと同じように精一杯に屹立して存在を主張している。ショートパンツと下着は丸出しになつていた。

成熟した女性の証となるものが見えな

いすべらかな恥丘が隠すものなく外気に晒されている。

しかし、何よりもシエナを絶句させたのは、異形の怪物にそこまでの辱めを受けていながら、あどけない少女の顔に嫌悪の色がほとんど浮かんでいない事だつた。

「身体が、熱いよお……。あ、あそこが、じんじんしてきてっ……！」

フアンの頬は暗がりの中でも分かるほどに紅潮し、吐く息は荒いながらも甘やかな調子をその中に潜めている。太い触手が脚を巻き、細い触手が乳首を弄ぶたびに、口から微かな嬌声さえ漏らしながら太腿をもじもじと擦り合わせていた。

「フアン！ 流されてはだめ！」

シエナは半ば自分にも言い聞かせるように大声を張り上げたが、既に魔毒の性感に支配されつつある少女の耳にその声が届いているかは怪しかった。

触手がゆつくりとフアンの左膝を搦め捕り、吊り上げる。無毛の股間の中心で、一本の細い筋でしかなかった秘所が強制的に割り広げられた。地面に落ちたランタンを光を受けてその内側が小さくきらめくのを、シエナは信じられない思いで見つめる。奥手な彼女でも、どうなつた時にそこが濡れるのかという事くらいは知つていた。

（ど……毒の、せい、よね……？）

そう思いたいのは、自分の身体も確実に性感を開かれ始めている事に気付いていたからだつた。唇を噛み、声を

上げる事はかろうじて堪えているものの、触手が肌を擦るたびにその青い瞳は潤み、抑えようもなく快感を与えられてしまっている事を示している。

揺れるその目が、その時少女の聖域に近付く新たな触手に止まった。それ自体が意思を持っているかのような異形の蛇はそのままためらいなく持ち上がり、やがて醜態に膨れ上がった先端を少女の青白い下腹部の終わり、外側からは髪も見えない未発達性の器にあてがう。くちゅ、と湿った音がして、それだけでフアンはさらに身をよじらせた。

(まさか……。あ、あんなのが、入っちゃおうの？ 本当に!?)

その触手は人間の男性器より遥かに太く、フアン自身の手首くらいはあった。そんな極太の凶器が、ぐりぐりと少女の胎内へと先端をねじ込み潜り込んでいく。

「な、なにこれ、おつきいっ……!」

触手が少女媚肉のきつい入り口を拡張し、中に身を潜らせようと先端を捏ね回すたび、フアンはその動きを何倍も大きくしたように頭を振って悶えた。細く絞り出した声で悲鳴を上げるたび、長いお下げがぶんぶんと振れて空中に複雑な軌跡を描く。

ぐり、ぐいっ……。

「ひっ！ ひろがっちゃうっ！ 無理、こんなの、ボクには無理い！ あ、ひ、いいい——っ!!」

……ずぶんっ！

太い部分のはまってしまうと、後は一息だった。

周辺の皮膚が張り裂けそうなほど薄くいつぱいに引き伸ばされつつ、フアン性の器が陵辱者を飲み込んでいく。その瞬間の彼女の表情と声まぎれもない歡喜に彩られていたのが、シエナには信じられなかった。

ぶちゅり……。ずちゅり……。

少女を下から貫いた触手は、やがてゆつくりうねり出した。なだらかな下腹がぼこりと膨らむほど深く突き込み、あるいは未熟な膣壁がめくれ返るほど大きく引き出される。

ごく、と知らず知らずの間に溜まっていた唾を飲み込んだ後、シエナは我に返った。

(わ、私は、一体何を……!)

媚毒の効果ではなく赤面する。怪物に拘束され、危機的な状況にありながら、事もあろうに弟子が犯される様に見入ってしまったのだ。

シエナ自身の、怪物の体液で汚れた肌も固くなった乳首も、既に疼くほどに火照っていた。

「はあん……。ん、きやうんっ!」

挿入時にあれだけ苦しんでいたとは思えないような少女の甘い喘ぎ声に煽られて、シエナの未開発な身体を炙る性感の炎は一層強くなる。

為す術もなく辺りを見回した青い瞳に、フアンの後ろ側へ二本目の触手が回り込んでいくのが映った。そしてそれは、シエナが考えもしなかった場

所、大きく割り広げられた秘所の後ろの小さな穴に狙いを定めていた。

(う、嘘でしょ？ なんてあんなところに入れようとするのっ!)

混乱するシエナをよそに、フアンの後ろに触手の先端が消える。次の瞬間、彼女がまた身体を跳ねさせた。

「ひっ!! 両方、いつべんに入れるなんて、い、や、はああんっ!!」

拒絶の言葉とは裏腹の蕩けた声を上げるフアンをよそに、そのまま触手はずるずると繰り出されていく。消えた分は、少女の体内に収まっているとしか考えられなかった。

(私の……。その、あそこにも……。あんなのが……。本当に入るの……?)

そう思った次の瞬間、いつの間にか自分が「される」のを前提に考えていた事に気付き、シエナは愕然とした。体温の上昇が、子宮の疼きが、天才錬金術師から普段の冷静さを奪い、ただの発情した雌に貶めようとしていた。

(これは毒の効果！ 身体が薬理的に反応してるだけ……！ 心まで流されたらおしまいよ、しつかりしなさいシエナ!)

フアンを貫いているのと同じ擬似男根触手が、先程からスカートの中で腿を、尻を撫で回している。何が狙いかは明白だった。時おり、固く閉じた両脚の中心、ずくずくと疼いて敏感になっっている部分を前後から叩いてシエナの背すじに寒気を走らせる。

(ああ、でも……。もう他の事は考え

られない。ちよつとでも気を抜いたら、すぐに入り込まれてしまおう……)

それだけは絶対に嫌だった。

やがて頑なに侵入を拒む女性器を攻めあぐねたか、触手は姿を変える。先端の開口部から、髪の毛のような細かい繊毛の束が飛び出したのだ。

(な、なに?)

驚きに目を見開いたシエナの前で、細長い陵辱者たちは再び彼女の服の中に潜り込んできた。

自分の胸元、大きく搾り出された乳房を包む服の布地を、ぶくぶくと触手の筋が持ち上げる。股間では下着の中に潜り込んで恥毛を掻き分け、陰裂の終わる辺りを小さく突いた。

自慰の経験すらない優等生は、そこにある女の性感帯がもたらす感覚も知らなかった。ただ人体に関する知識として、それらの器官がどんなものであるのかは知っている。

「だめ……。そ、そんな、ところは、さわら、ないで……!」

脂汗を流しつつ許しを乞う。しかし、次の瞬間彼女を襲ったのは、覚悟していたような強い刺激ではなかった。

ざわざわざざわ……。

「ひ……。ひいっ!!」

無数の繊毛が充血した乳首に群がり、くすぐるよう突き回した。むず痒いの、その部分を触れないもどかしさがシエナに身をよじらせる。

「ちよつ……。なんで、こんな風に、ひやうっ!」



つん、と先端を少し強く突かれた瞬間、拘束された乙女の口から漏れたとは思えない可愛らしい悲鳴が上がった。次の瞬間、その表情は硬直する。恥ずかしい女の部分で、乳首以上に敏感な肉芽を狙う繊毛がぞわりと動き始めたのを感じたのだ。

「や、やめて！　そこはやめてっ！　怖い！　私、まだ、そこは触った事もないかひやああああっ！」

嘆願の声が途中から高い嬌声に変わって伸びた。無数の繊毛が包皮を剥き、初めての刺激に震える核を交互に撫でる。乳首と同様、繊細なまでの動きは未体験のシエナにも一切の苦痛を与えず、最大限にそれまで味わった事もないような快感だけを引き出していった。しかし、彼女にとってはむしろそれがこの上なく恐ろしい。

「はあっ！　もう許してえっ！　おねがいっ！　それ以上はっ！」

懸命に閉じ合わせる太腿の下、膝ががくがくと笑い続けていた。女悦の中心核を好きなように弄り回される刺激に、腰がびくっつ、びくっつと躍る。

二つの乳首と一つの陰核、三箇所から与えられる刺激だけでシエナの脳はオーバーフローしかけていた。手首を拘束されている事も、肌を這い回る他の触手も、それどころか着ている衣服までその感触を意識する事ができない。まるで自分が丸裸にされた状態で敏感な突起を甘く優しく責め続けられているような錯覚が彼女を捉える。

「はひっ……、ひっ……。き、気持ちよくなんて、ないんだから……」

悦楽に瞳を潤ませ、頬を蔷薇色に染めて蕩けた吐息をつきながら、それでも美貌の女錬金術師は自分が触手に感じさせられている事を認めようとはしなかった。それが錬金術師としての理性によるものなのか、それとも汚される事を恐れる処女の本能か、それは本人にも分からない。

しかしその最後の咎も、もはや崩壊寸前だった。

今、女体を取り巻く甘酸っぱい匂いは、触手の分泌液が放つものではない。それは彼女自身が、いまだ固く閉じ合わせたままの女芯の奥から湧き出させた、発情した雌の体液の芳香に他ならなかった。

「はあ……。えはあ……。いい……」

前方から響いてくる泥沼を掻き回すような音、そして細く高く震える聞きなれた声に、のろのろとシエナは顔をそちらに向けた。

その目の前には、ヴァギナとアヌスの両穴をイボだらけの触手にほじられ続けながら、愛しい想い人のペニスのようにそれを受け入れ、喘ぎ声を垂れ流す亜麻色の髪の少女の姿があった。あどけない表情で花束を抱えているのが似合いの小作りな顔を人外の悦楽に蕩かせ、だらしなく快感を貪っている。ぐりゅっ！　ずぶちゅっ！！

「あんっ……。ボクのお……。あかち

やんの、へやあ……。トントんって……、されてるう……」

媚びるように甘い声を上げて、ファンは腰を小さく揺する。(少しはっ……。くっ、我慢、してみなさいっ……。もうっ！)

魔物から与えられる快楽に、ろくに抵抗もせずあっさり酔いしれている少女の姿を見ていると、自分が一所懸命に墮ちまいと抗っているのが馬鹿馬鹿しくなってくるようだった。

瞬間、まるでその心の隙間を見抜いたかのように、両の乳房と秘裂の突起を責める触手の動きが激しくなる。

「ひゃふうっ!!」

一瞬の油断を悔やんでも遅かった。あくまで優しく、まるで焦らしているようにすら思えるほどの繊細なタッチとは裏腹に、疲れ知らずの動きでシエナを休ませない魔性の愛撫が生み出す淫らな波動は、彼女の快楽への防壁に最後の一撃を加えようとしていた。

「んあっ！　い、いま、あつい、のが、あそこ、から……!!」

普段なら絶対に口にしないような言葉がつい漏れてしまう。やはり普段ならその存在をほとんど意識しない自分の女の部分、生殖器が、子宮がひくひくと動き、その内に何か熱いどろどろしたものを溜めてきているのを感じた。それが限界に達した時、自分は――。(そんな時、なんて言うんだっけ……。淫熱に浮かされ、半ば霞がかかったようになつた頭で、ちらりとそんな事

を思った。

錬金術とは反対に、性体験に関しては自分よりも経験豊富なファンが冗談半分に「講義」をしたがる事がある。なるべく軽く聞き流すようにしていたのだが、それでも繰り返し聞かされるうちに、いくつか耳に残ってしまう事はあるのだった。(とんじやう、とか……。とけちやう、とかっ……。?)

つい、その言葉の主を探してさまよわせた視線の先では、ファンが三つ目の男根触手を再び口内に突き込まれていた。

「んっ！　んんっぶうううっ！」

三本の触手がリズムを同じくして激しく少女の粘膜を擦りたてる。可憐な唇も、幼い生殖器も、醜悪な怪物の器官を唾え込まされ、その端から泡立つ雫を跳ね飛ばしていた。シエナの昂らされた性感が、それを見る自分の体内にも同じものが居座っているかのような幻覚を感じさせる。いまだ何ものも受け入れた事がないはずの処女の胎を内側から押し広げて、熱い塊がずくんと脈打っていた。

(あついっ……。あつい、あつい、あついっ……。な、なんなの、これ？　なにが、くるのっ?)

両胸と股間の性感帯だけを責め続けられながら、シエナは生まれて初めての絶頂に押し上げられようとしていた。先程まではがくがくと揺れていた腰が、今では切なげにびくっつ、びくっつと小さ



そんな土地に私は  
生まれ育ちました

ここはアストリア皇国  
四方を山に囲まれ  
ひっそりと佇む資源国です

富国の姫君に  
忍び寄る影……



豊富な資源による  
安定した国政力もあり

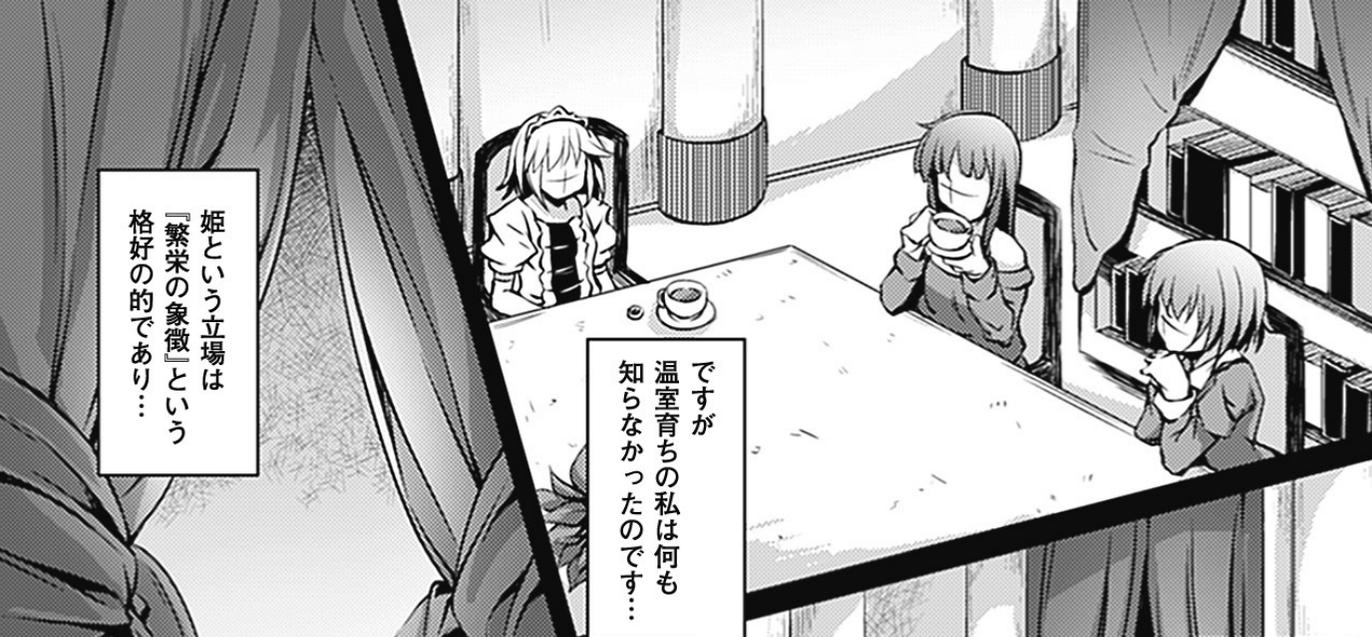
争いとは程遠く  
王族も国民も「裕福」を  
謳歌していました



アストリア皇国王女  
ソニアレッドフィールド

# ひとつの国が 消え行く時

The Kingdom Lost



姫という立場は  
『繁栄の象徴』という  
格好の的であり…

ですが  
温室育ちの私は何も  
知らなかったのです…

城内は静けさの中  
一歩一歩確実に  
世代交代へと  
動いていました

裏ではその豊富な資源が  
支配争いを生み…



もうその手は  
すぐ近くまで来ていた  
というのに…

私は…



射精でますよ…ツ

んツ…

んんうツ

またこぼして…  
本当仕方ないですね  
ちゃんと飲む約束  
だったはずですが？

んむう…  
なんで私が…あ



ははは  
そうですね  
勝手な話です

むにー  
ですが今この国は  
利権を勝ち得なかった  
者に対して酷なのです

私はどうなるの  
ですか…っ



トロ  
トロ  
貴方は繁栄と権力の  
象徴なのですよ

弱き者や支配欲のある者から  
恨みを買うのは分かりきって  
いたことでしょう

そうかもしれないですが…  
でもそれは…貴方達の  
勝手ではないですか…っ

これまで高みの見物を  
決めていたんですから  
その者達の慰み物と  
言った所でしょうか

勝手勝手というのも  
いいですが現実を受け  
止めて頂かないと

そんな勝手な話……っ！  
こんなことして許されるとっ

いっいやっ！  
おしりやめっ  
触らないでっ！

それにどうせ辛い現実なら  
気持ち良い方がいいと  
思いませんか？



不浄な穴で達して  
しまっだなんて

王女の威厳が  
微塵も感じないような  
潮吹きですね

そんなわけ……  
ない……から……っ

流石は王女  
身体は弱くても  
心は御強いようだ

ちよ……っ  
今はヤメ……っ

しかし素質は十分ですね



どうしました？  
艶っぽい声が漏れてますが



馬鹿  
違いますっ！

貴方がそんな所を  
いじるから気持ち  
悪いだけで…っ！



ガッ

ドドド

言葉と身体が  
全く一致して  
おりませんが

そっ  
そんなことは…っ  
私はちゃんと！

そうですよね  
王女なんですから

こ…こらっ  
やめなさいっ







……  
どうしても

お前の国の  
情報を漏ら  
せないで？

# 囚われの騎士が 受ける拷問とは!?

ええ……  
あなたも  
いい加減！  
諦める事ね

捕虜に  
なってるから

私は一度も  
口を割らな  
かった

ああ  
だがそれは  
拷問が

「人道的」な  
範囲での話だ

色々な拷問を  
されてきたけど

これからは  
少々手荒な方法を  
採らせてもらう

……結果は  
同じよ……

さあ……  
どうかな

# さんら〜ん

れい ぜい  
冷泉

漫画  
COMIC



イヤあま  
あまッ!!?

ヒギッ

ヒギッ

はッはッはッ!  
どうしたア  
さっきまでの  
威勢は

ヒギッ

こんな...のッ  
狂ってるッ!

酷すぎるッ

だから  
言っただろう

ボコ...

ボコ...

ここから先は  
「手荒」だとなあ

ざざざ

さあ...  
このままたっぷり  
味わうといい

この  
化け物の  
産卵を

イヤッ

イヤッ  
イヤッ

クリュー

ユッ

ユッ

ユッ

ルリナと珠優のイノセントピース奪取に失敗した真目を  
懲罰の触手へヒニスが蹂躞する!!



守護聖女  
prism saber  
プリズムセイバー  
乙女たちの散華

第2話 流転

小説 うつせみ 空蝉 挿絵 ふなむし くまっち & 船虫

ORIGINAL Lusterise

著者近刊  
好評発売中!

「スレイブドール  
紅眼の女特務捜査官」

「うああ……生き返るうう」

「まあ、ルリナさんつたら」

風呂場から、ききやいと姦しい少女同士の会話が漏れ聞こえてくる。

ごくごく一般的な中流家庭の風呂に防音機能などあるはずもなく、脱衣所に立てば自然と浴槽内で残響しまくった会話内容が耳に入ってきてしまうのだ。

「着替え、置いておくわ」

「あ。ありがとう、千晶さん！」

返事をしたのは、つい一刻ほど前まで大剣を構え、異形に立ち向かっていた少女——篠宮ルリナ。

少しウェーブがかかったロングヘアが特色の彼女は、異形に襲われたことなどまるで感じさせぬ元氣満々な大声で返答し、さっそくもうひとりの入浴者にしたしなめられている。きつと、磨りガラス越しには覗けぬ表情も、明るいものであるのだろう。

「お手数おかけいたします、功刀さん」

たしなめた側の少女——神楽坂珠優は旧華族の出自らしいおしとやかな物言いで、やはり見えぬ磨りガラスの向こうでおそくべこりと頭を下げた。

ふたりとも、異世界の産物たるイノセントピースに選ばれし戦士である。

（——でも）

あまりに緊張感がなさすぎる。突然選出されたことでもあり覚悟も何もできてないのだろう、と漏れ聞こえる会話を盗み聞くにつけ実感する。

（あの様子じゃ、まだしばらくはおしやべりに夢中で出てきそうもない……か）

弓戦士の装束から制服へと衣装が戻り、戦いの後ということもあって汗を流したくもあつたが、あいにく自宅の風呂は三人一度には入れるほどには広くない。

とりあえずは異形の汁まみれになったあのふたりが出るのを待つことにした。

（また……少し大きくなった？）

成長著しい胸元が制服を押し上げ、苦しげに身じろぐ。

——湯船に浸かる彼女たちに、功刀千晶というフルネームまで教えたのは失敗だったろうか。汗ばんで張りつく制服を疎ましく感じつつ、黒のポニーテールを掻き掻き。きつい胸元を指で引つ張り隙間を作つてようやく大きく息を吐く。

（あのまま路上に放置するわけにもいかなかった）少女ふたりの服装が破けていたりして、目覚めた時に困るだろう、との親切心からの行動ではない。

それだけならわざわざ自宅まで連れてくる必要はなく、名を告げる理由にもならない。適当に着替えとタオルなどを用意して、目覚める前にどこか人目につかない場所へ移動させれば済んだ話だ。

自宅へと連れてきたのは、落ち着いて話をするため。状況を飲み込めぬままに戦端に巻き込まれた同年の少女たちに、とりあえずの事情だけでも説明する必要があると考えたからだ。

「貴女の判断は正しいと思います」

イノセントピースがひとつ「アメジスト」。手にした紫の輝きから響く声に、無言で頷く。

声のぬしは弓戦士としての力の源、「射抜くもの」ラストフォルテ。いち早く戦士としての覚醒を促してくれた相棒であり、戦いの理由から戦闘技術まですべてを教えてくれた師でもあつた。

「髪の毛長いほうのは、ファイタータイプ。短いほうがプリーストタイプ？」

「はい。武器形状からして、エストゥファンとアーレンゲルテにより選ばれた聖女です」

聖女。そう、相棒は戦士たちを呼びならわしていた。脱衣所を出てその相棒といくつか言葉交わしている、さほどの間も置かず戸の向こうで騒がしい声が響き始める。

「異形と相対した恐怖を紛らわせてるのかしら」

事務的な応答を常とする相棒は、確たる正解のない疑問には答えることなく。代わりにがちやりに脱衣所の戸が開いて、湯気を撒き散らしながら、先ほど用意した手前の衣服へと着替えた少女ふたりが姿を見せた。

「あ。お風呂と服。ありがとね、千晶ちゃん」

「君たちの着ていた制服は今、洗濯している」

「ちゃん——？ 会つて間もないのに馴れ馴れしい呼び方をするルリナに、ひそめた眉を向ける。

「本当にありがとうございました」

一方、ショートヘア少女はおつとりとした風貌そのままな少々ゆつたりとした口調で、またべこり頭を下げてくる。

「さつそくで悪いが、先ほどの異形の件。それになんたたちが持つ力について説明させてもらうわ」

話をささげられたふたりがキョトンとした表情を浮かべるのも構わず、単刀直入に告げる。あまりに日常的で気の抜けた少女たちの話を聞いてやる暇も理由もない。今は一刻たりとも惜しいのだ。

「それで、話つて……何かな？」

部屋に案内すると、座るなり畏まった様子でルリナが問うてくる。話すと言っているのだから黙って少し待てばいいものを——どうにも苦手なタイプだ。「あの、真つ黒くてグネグネした生き物のこと……なのですよ？」

一方、珠優のほうはルリナを制し、それとなく話の先を促してくれた。

「ああ。あれは異世界より飛来した魔王の手先だ」

「い、異世界!? それに魔王つて」

「突飛に思うかもしれないが、事実よ」

あんぐり口を開けたルリナに、念を押す。

「魔王はイノセントピースと呼ばれる石に封じられていて、その封印を解くためのエネルギーを求め、

部下や物言わぬ低級な異形などを送り込んできた」  
「貴女方が持つ宝石も、魔王を封じたのとは別のイノセントピースです」

「い、石がしゃべった!?!」

一方的に情報だけ伝えても信用は得られまいと、あえて途中から相棒に語り部を任せてみたが、どうやら功を奏しづらい。

「じゃあ、私が石を拾った時に聞いた声も」

「私も、ルリナさんが倒れた後にどこからともなく響く声を聞きました」

「珠優ちゃんもっ?!」 そういえばあの声、『選ばれし戦士よ。健闘を祈る』って言ってた……」

「各々が持つイノセントピースに宿る異世界の戦士の声だ。彼女たちを選ばれた私たちは、その能力を受け継ぎ、戦うことができる」

一気に入信じる方向へと傾いたふたりの様子を見て密かに安堵の息を吐き、相棒に話の続きを促す。

「異世界より現れたある男が、あるじである魔王を復活させようと目論んでいます」

そのため連中は人間のエナジー、生命力を糧にしようとしており、果ては悪意を込めたピースを使い人を魔物の姿に変えたりもする。

「そ、それじゃあ私たちが戦わないと」

「この世が減ぶ……ことにもなりかねないわね」  
そうならないために戦っている。彼女らよりも早くに戦士としての力を得たこの身を粉にして、これ

までで十四体の魔物——聖女がギアムと呼ぶ、醜悪な触手を備える異形どもを浄化してきたのだ。

「——ふたりとも、石を渡して」  
制服の胸元の苦しさを吐き出すように、気づけば自然とそう口にしてしまっていた。

「え……で、でも、石の力を借りて変身するって今」  
「わ、私たちにも何か……」  
ふたりの少女が、口々に異を唱える。聖女に選ば

れた、いや選ばれてしまった者なりの責任は、多少なりとも感じていようだ。

「魔王の封じられた巨大なイノセントピースは現状複数の欠片に砕け、一部消失しています。魔王の配下は失った欠片を探すと同時に、再度巨大ピースへと修復しようと企んでいるのです」

「修復は人から奪ったエナジーを注ぐことでも可能よ。でも、別のピースから力を得るほうが早い」

つまり、石を持ち続ける限り連中に狙われ続けるということだ。告げた途端、ふたりは二の句を継げず黙り込んでしまった。どちらも「この世が減ぶ」と告げた際と同様の、不安と怯えにまみれた目をして

いる。彼女らの見せたその表情が、どうしても覚悟の足りなさを強烈に剥き出させる。

(覚悟のない者を連れて、戦力にはならない)  
ならば自分ひとりのほうがいくらかまだ勝率が上がる。これまでも単身で責務を果たしてきたのだ。

「そ、そうだよ。ひとりよりも三人のほうが」  
「ここでの話は忘れて、石を置いて帰りなさい」

なおも食い下がろうとするルリナと、その隣で何事か言いたそうに、けれど結局口を開くことなくうつむいた珠優。まだ日常生活へと引き返せる位置にいるふたりにびしやりと告げ、背を向けた。

決別の意思を言葉よりも明確に態度で示し、以降なおも言い募る少女たちの言葉はすべて意識の埒外へとすり抜けていった——。

——吠えるだけ吠えてふたりの少女が帰路についた後。自室にひとり残る少女は黒髪を苛立たしげに掻き上げて嘆息する。

(本当、よくもああ、あれこれとしゃべれたものね)  
うつむきがちの珠優と対照的に、ルリナは舌鋒留まることを知らず。果ては「ひとりじゃ危ない」だ

のとまくし立て、「だから一緒に」としつこく食い下がつてきた。

「足手まといよ」  
経験も覚悟も足りぬ者を連れていては、勝率は下がる一方だ。そう言って何度突っぱねようと、執拗に共闘を持ちかけてくる。しまいにはそれがまるで

「単身戦い抜いてきた実力と覚悟、それを裏づける努力」まで軽んじているように思えてきて、結局追い出すように疎ましいふたりを帰路につかせたのが、ほんの数分前のこと。

結局イノセントピースも渡してはもらえなかった。

「明日。借りた服を帰しにくるから」  
土曜で学園も休みだし、その時にまた話し合おう。そう言って最後までこちらを振り振り返り帰っていったルリナの姿を思い出し、また前髪をイライラと梳き上げる。

篠宮ルリナ。明るくて誰にも分け隔てなく接するがゆえに、学園でも人気者として名の知れた娘だ。直接面識を持つてみて、確かに評判のとおり性格だと感じた。と同時に、こうも思う。

(私とは、何から何まで正反対)  
今己の胸を掻き乱す感情もそこに起因しているのだと、苛立ちの一方で冷静に自己分析が成される。

生来「できることは自分でやりなさい」と躰けられてきた。その教えの甲斐あってか、教授した当の両親がめつたに寄りつかぬ自宅で、ひとり暮らすことに不便を覚えたこともない。

「やはり、私だけで事を成す他ないということね」  
ある日突然我が身に降りかかった戦士としての運命。それもまた、「ひとりであること」。

いや、ルリナたちが使い物にならぬ以上、「ひとりでもやらねばならぬこと」である。決して自ら望んでなかったわけではなかったが、他の誰かに任せる気は、毛ほどもない。

「それが最善でしょう」

こんな気分の方は端的に、事実のみを伝えてくれる相棒の言葉が何よりありがたい。

(篠宮ルリナと、神楽坂珠優……か)

再度、脳裏に去り行く際のふたりの姿を思い浮かべる。どちらも自分ない一人を惹きつける「魅力にあふれていた。学園で評判の外見はもちろんのこと、社交的で明るさに満ちた、まるで太陽のような笑顔を持っている。

強く食いがつたルリナの意志の強さは己の写し身のようにありながら、芯の部分で決定的に違う。ゆえに、歯痒さと苛立たしさを覚えてしまうのだ。

(羨ましい、のか……私はず?)

傍目に見ても親友同士、深い絆で繋がっているあのふたりに、憧憬と羨望を抱いているのか。自問の答えは、身の内に存在せず。

「ふん。ずいぶんとみすばらしい住み処だな!」

「——人の矢で無様に脚を貫かれた子に言われる筋合いはないと思うわ」

思考をささげないように不意に響いた居丈高な声に向き直り、姿を視界が捉えるよりも早くそれが誰の声であるかを察知し反論する。

驚きは、欠片ほども生じなかつた。

「性懲りもなく、よくも現れたものね」

すでに足首の矢傷が癒えていることを視認し、突如出現した小柄なツインテール少女を目で射抜く。

「貴様が気配を絶つても、あの連中を連れていてはな。おかげでこうして貴様の住み処を知れたというわけだ。くふ……ふはははははははっ!」

黒の下着じみた露出の多い装束に、蝙蝠を思わせる二枚の羽。両の手には巨大な、鮮血色の鉤爪。

戦士の姿で現れた彼女は、すべて思いどおりに事が運んだ嬉しさに、細身の肢体をふんぞり返らせ、飛び跳ねんばかりにはしゃいでいた。

(でもそれはこちらも、同様)

戦いのすべすら知らぬルリナと珠優がクリスタルから漏れる波動を消すなど知るはずもないこと。そして、同じく、ピースに選ばれた戦士である真白ならばその波動を追って再度姿を見せるであろうこと。以上二点を考慮して、逆に餌としてルリナたちを使い、この場へ標的たる少女をおびき寄せたのだ。

「ここなら、誰にも見咎められずに事が済むわ」  
 真白のようににはしゃぐ気持ちにはならなかつたが、務めを果たせる嬉しさに、胸の奥が躍る。

「はっ、強がりを。口だけは達者だな!」

「それも、こっちの台詞」

「……いちいちムカつく女め! 今度こそ八つ裂きにしてやる!」

軽く刺激しただけで、易々と挑発に乗ってくる感情の起伏激しく激昂しやすい少女の性根を利用すれば、いくらでも有利な状況を得られそうだ。

「——イノセントアクセラレーション」

キーワードを唱え、瞬時に制服を戦闘衣装——肌をびつたりと包む装束に変化させる。己が背丈よりも巨大な弓を番えて即座に臨戦態勢を取った。

ふんぞり返って待ち構える敵を見据え、戦法と対処の方策を手短かに選定していく。

(学園で観察したところ、変身状態の彼女と本来の天城真白との間に記憶の共有は見られなかつた)

悪意の込められたピースにより強制的に戦士として発現させられた弊害だろう。おそらくピースの悪意に引きずられる形で人格を歪められてもいる。

「悪いが、本気で仕留めさせてもらう」

悪意によってギアムと化した人間を浄化する際にすら、極限まで相手を疲弊させる必要があつた。それを同じ戦士相手に行おうというのだ。敵の身を案じたり境遇に同情をしていては、成しえない。

「哀れむような目で見ると、このっ……身の程知らずが! 絶対に引き裂いてやるからな……!」

ギリギリと歯を噛み締めて、半歩。真白のほうから間合いを詰めてくる。

弓矢の間合いは、当然相手よりも長い。だが武器の特性上溜めを必要とし、隙が生じがちでもあつた。前回のような奇襲狙撃ならともかく、距離を詰められれば相手が有利。そして広くない室内という条件も明らかに当方の不利に働く。

(……問題ない。やれる……)

それでも相手が真白ひとりなら倒せる。自信を裏づけるだけの鍛錬を日々重ねてきた。敵が有利な状況に溺れ、また激情に駆られて隙を見せていることも考慮すれば、勝率は十二分にある。

「——拙速だな、真白」

前触れなく新たな気配が真白のすぐ隣に降臨するまではそう、思っていた。

「邪魔をするなメルコール!」

現れるなり腕をつかまれた真白が、その拘束を振りほどこうと遮二無二もがく。

「う、うるさいっ。手を放せとっ……ひやわあ!!」

メルコール。そう呼ばれた端正な顔つきに手に手を放され、半ば吊り下げられる格好だつた真白の身体が落下する。居丈高な態度ながら、真白は完全に男の手の中で弄ばれている——少なくとも今は、そのようにしか見えない。

(男……ということとは戦士ではないのか?)

心中での問いかけに、違う、と相棒は答えた。

聖女と名がつくように、ピースに選ばれた戦士は例外なく女性だ。醜態でなく、触手を備えてもいないことからギアムである可能性も低い。

であるならば、なぜ。

（人間となんら変わりないように見える目の前の男に、これほどの威圧感を感じる――？）

飄々とした風を装いながら、水のまなざしよりなお冷たい、凍えそうなほどの殺気を全身から放つ男。「何……者？」

醜悪な触手群に不意打ちされた時にすら感じるこののなかった本能的な恐怖に駆られ、反射的に問うていた。

ジロ、と揺らいだ青い瞳に見初められ、ますます全身に寒気が奔る。疎みかけた心を、組んだ腕で胸肉ごと押し潰して隠し、懸命に視線で射返す。

「これはこれは。お初にお目にかかる」

男は大仰な態度で、今初めて気づいたとしても言うように振り返って会釈をし。

「メルコールだ。我があるじたる魔王復活のため、この地で人間の持つエナジーを集めている。――貴様ら聖女の、敵だ」

水細工のように整った顔を上げるや真白以上に尊大な態度に豹変し、不敵な笑みを浮かべてみせた。

洗いざらいぶちまけるのも、余裕の表れか――。

「……では、首謀者たるあなたを倒せばすべて事は済む、ということね」

「そう、できればな」

人の恐怖を見透かしたように余裕を保つメルコールに対し、虚勢を張れば張るほど、ひとりりで追い詰められていく。そんな予感に駆られて、二の句を告げるのですらためらわれる。

おかげで、再度先手を打ったのも彼のほうだった。「先ほど別れたお前の仲間。あのふたりにもつい今しがた追っ手を放った」

「私が、一度切り捨てたあの連中を助けるとでも？だとしたら、見当違いもいいところ」

わざと挑発するように言っただけなのに、男は余裕の笑みを崩す素振りすら見せなかった。沈黙に支

配された空間で、目と目で互いの腹の内を探り合う。（未熟なふたりを助けたところで、戦力の足しにはならない）

足手まといを連れるくらいなら、単身で戦うほうがよっぽど早く、楽に事を成せる。連中は人体から奪ったエナジーを、魔王の封印された巨大なピースの欠片に注ぎ込み、復活の糧とすることが目的だ。

男の言うようにルリナたちが襲われたとして、今すぐに命奪われるといった事態にはならぬはず。

魔王の復活が成る前に事を終わらせる――人的被害を極力減らすためにも、今ルリナに構う暇はない。彼女たちの成長を待つ時間的余裕はないのだ。

頭では、そう判断することこそ正しいと答えが出ている。ただ――。

（なぜ。あの子の顔が今になって……頭の中に）不意に思い出されたルリナの顔が――自分には決して浮かべることのできぬ無邪気な笑顔がこびりつき、離れてくれないでいた。

「ごちゃごちゃと横槍を入れおって。今この場でコイツを始末しちやえば済む話じゃないか！」

真つ先に沈黙を破ったのは、蚊帳の外に置かれて憤懣やるかたない様子で苛立ちを爆発させた、小さな戦士。真白だった。

「疑るようなら、コイツを追加の追っ手に差し向けてもよいが？」

追っ手の有無を懐疑するこちらの内情を読み、真白を無視したメルコールが酷薄な微笑を浮かべた口元をさらに歪め放言する。

「――目的は、何」

「クク。理解が早くて助かるよ」

ぶうん――。男の背後に、巨大な黒い穴――真白が逃亡する際に使用したのよりも大きな異次元との連絡穴が出現する。

「なんでわざわざこんな女を……。おい！ 変な素振りを見せたら即八つ裂きにしてやるからな」

顎をしやくるメルコールに促され、慥無礼なエスコートに引き立てられるように、穴の前に立つ。まるで「変な素振りを見せろ」と言わんばかりの真白の挑発には、無言を貫き。

（これはチャンスだ……！）

敵の大将自らが陣地へと連れていつてくれると申し出てきた。わざわざ不利な状況を作ると言うのだから、相当な自信があり相手をなめているのか、でなければ敵にも何がしかの切迫した状況があるのかもしれない。進んで捕虜になる選択は危険も高いが千載一遇の、チャンスでもあるはずだ。

だから、わざと拘束されてやるのだと、頭の中で己に言い聞かせて、こびりつくルリナの笑顔をかぶりを振って打ち消しては、一歩ずつ前に踏み出す。

「では、参ろうか――」

身体が闇へ溶けゆくような不快な感覚に襲われた直後、視界は瞬時に漆黒に食らい尽くされていった。

数時間にも、ほんの一瞬にも感じられる不快な時を経て、突如まぶたに感じた眩さに目を瞬いた瞬間。視界の先には見知らぬ光景が広がっていた。

「ようこそ、お客人。我が城へ」

相変わらずのメルコールが長軀を折り曲げ、大仰なポーズをして出迎える。後方にいたはずの真白も、不快な感覚から脱したと感じた次の瞬間にはもうメルコールと並び、前方に陣取っていた。

（ここ、が……敵の）

男が城と呼んだ空間は、現実とは思えぬほど広大で、地平の彼方まで漆黒に支配された世界。城というよりも柵のない巨大な牢獄――そんな負のイメージを色濃く思わせる、空虚そのものな場所だった。生命の息吹がおよそ感じられぬ、人工的な香りの



するただ広いだけの世界。少なくとも、この星に飛来した連中が拠点とする場所のひとつではあるだろう。その闇を、細部まで点検するように視線で追う。「じろじろと、人の家を眺めるのは無礼だろう」ふふん、と今日初めて余裕を漂わせた真白が、例によってどこからか出現した漆黒の触手で象られた椅子にふんぞり返って、子供じみた嘲笑を漏らす。「拘束もなしで聖女を連れ込むなんて、相応の自信があつてのことかしら？」

「フツ、さて……どうだろうな」  
 時に挑発し、時にわざと言葉に隙を作つて相手の出方をうかがいつつも、目線と全身とで敵の陣容を探る。感じる気配は触手椅子の上で偉ぶりわめいている真白と、目の前のメルコール。巨大なものはそのふたつだけで、他には物言わぬ無数の異形生物。漆黒触手の心地悪い息遣いが感じられるのみだ。（やはり……）

勝利への最大の障害は、メルコール。手負いでもある真白だけが相手なら、ほぼ確実に勝利できる自信がある。

「~~~~つ、このつ無視するな！ どこまでもムカつくヤツつ！メルコール！今すぐやらせろ！ズタズタに裂いてエナジーを搾り取つてやる！」  
 居丈高な態度で、わざわざ拠点に招待したばかりの標的の抹殺を宣言する少女の顔は、無視され続けた怒りで、今にも沸騰しそうな勢いだ。

（せいぜい昂つてちょうだい）  
 メルコールという底の知れぬ不確定要素が存在する以上、真白の感情を揺るがし、冷静さを損なわせておくに越したことはない。戦場でクレバーでない者は、いくら実力があろうとそれを完全に発揮することはできぬのだから——。

「吠えるな、真白。そもそも貴様からはまだ、前回の失態の弁明を受けていないぞ？」

前回、というのはルリナと珠優が最初に襲われた時のことだろう。男の口振りからは、立場上は真白の上官に当たることも読み取れた。部下でありながら尊大な態度を崩さない少女は、さぞかし扱いにくい駒であるはずだ。

「ぐ……貴様の指図は受けないと言つたぞ。真白は真白の好きなようにやるのだ！」  
 「俺も、言つたはずだな。結果を出す限り、文句は言わぬと」

ふたつの暗い気配の狭間で、剣呑な空気が充滿する。敵方は見るからに結束が保たれていない。（同士討ち、とまではいかずとも、どちらか手傷でも負つてくれれば……！）

できうるなら、実力未知数なメルコール側の負傷が望ましい。そうならずとも、真白との応酬の中で少しでも実力の片鱗が垣間見れば、反撃の策の練りようはある。

「う……るさい！ 真白様に指図するな！」  
 「誓いを違えるか」  
 今や肌にしりしり焦げついて感じるほどに周囲の空気は緊迫し、魔王の配下同士たる男と少女の間には一触即発の雰囲気漂う。

すでに椅子から立ち上がつて両の手の鉤爪を差し向ける真白に対し、メルコールは悠然と丸腰のまま無防備に真白に向け歩み寄ろうと、敵である聖女に背を向ける。

（つ、まだだ。まだ……つ……）  
 背後を振り返ろうともしない男の背中は一見隙だらけであるように思えたが——その長軀からは禍々しい殺気が絶えずこちらへと向いていた。手にした弓矢をわずかに揺らしただけで、男の気が呼応するように増大するのを感じる。

（こちらの動きに反応、してる……！）  
 じかに見つめられていないのに、一挙手一投足が

筒抜けとなつていった。機をうかがつていたはずが得体の知れぬ不安に触まれ、むしろ自分の隙を隠すことに忙殺され始める。

「もう一度だけ問うぞ。勝手に事を起こし、拳句良質のエナジーを持つ聖女二名の捕獲に失敗。返り討ちにあつたことについて、釈明……せぬのだな？」  
 「う、うるさいと言つている！ 見下すような目で見るなあつ」

大人の拳ひとつほどのわずかな間隔を置いた間近で相対する真白も、男の氣勢に圧されているようだ。声こそ張り上げているものの額に脂汗をにじませて小柄な体躯を伸ばし、必死になつて虚勢を張っている——傍目には、そのようにしか映らない。（哀れ……ね）

敵に同情したつて得はない。そう理解してはいても、思わずにはいられない。それほどぶたりの実力差は浮き彫りとなつていった。  
 「くそ、くそくそくそおおつ！」

「ブンツッ！ ブンツッ！」  
 真白の振り回すふたつの鉤爪が、幾度も空を切り空しい音を奏でていく。その一撃一撃が、裂いた後に血の色で染め抜かれた爪の残像を残すほど、鋭い斬撃だ。

それを男は体躯を前後に軽く揺らすだけですべて、完璧に紙一重で見切つてみせた。

「仕方あるまい」  
 言つてまぶたを閉じるや、おもむろにかざされた男の右手のひらに、突如それは出現した。  
 「なっ……き、貴様あああつ」

目にした途端真白の表情が強張り、次いで一瞬戸惑いの色が浮かんだ後、即座に激昂に染め上がる。メルコールの手の上に現れ浮遊する物体——それは先ほどルリナたちを襲つたものよりも小ぶりな、触手の群生——塊だった。

（こちらに反応、してる……！）

小ぶりといえど、塊状に集まったそれは大人の男の胴体ほどもあり、まっすぐに伸ばせば体長は各自優に一メートルを超えるだろう。うっ血した状態を思わせる毒々しい色の表皮を持つその触手どもはまるで一個の生命であるかのようにうねり絡まり合って固まり、徐々にあるひとつの姿を形作っていく。

「っ、禍々しい……」

注意深く事態の推移を見続けるつもりが、反射的に声を漏らして目を逸らしてしまつたほどの醜悪さ。「人間の男の股にある物と、さほどの差もあるまい」鼻で笑つた男の言うとおり、毒々しい表皮を脈打たせながら絡み合う触手どもが作り上げたそれは、人間の男性器そのものを形成していた。ただ、長大な幹の根元には精液を生成する袋の代わりに、インゲンチャクを思わせる「余つた触手ども」が無数に垂れ下がり、脚のように忙しく蠢いている。

似て非なる存在を強く印象づけるその蠢きが、初めて目にする生殖器もどきへの恥じらい以上に強烈な、吐き気を伴う嫌悪感を催させる。

「負けず嫌いの貴様のために、新たな力を授けてやろうというのだ。よもや断りはすまいな？」

「ふっ……ざけるなあああ！」

おそらくその歪な物体の用途を知っているから、なのだろう。あからさまな憤怒と恐怖とをものはや隠そうともせず——隠す余裕すら持たずに、小さな戦士の巨大鉤爪が、それ以上近づくなとばかり、ふたりの狭間の空を掻き、切り刻む。

「そら。受け容れろ、その矮小なる身の内に……新たな力を！」

斬撃をかわしきり息も乱さず冷淡に言い放つた男の右拳が、高々と掲げた状態のまま、真上に浮く異形を押し出すように握り締められた。

直後——毒色の擬似ベニス空を飛び越えたかのように、瞬時に真白の股下へと移動した。

ずるっ……ずるずるずるずるうううっ！

「ひ……や、やめっ……うわあああああああつ！」

はみ出た無数の脚を這いずらせ、歪な肉棒が少女の内腿を想像だにしなかつた速度で這い上がる。

激昂と動揺にまみれた少女は四肢を暴らせ懸命に鉤爪で、味方だつたはずの触手群を裂いていつた

「無駄だ」

男の言葉どおり、真白の行動のすべてが徒勞に終わる。触手は切り口から延々生え続け、増殖を繰り返すことでかえつてその数と勢を増す。結果——少女の抵抗空しく、瞬く間に触手群は極薄の股布へと到達した。

づるっ——にゅぢゅつづにゅぢゅつ！

「やつ、んあああつ！ やめると言つてっ、ひやあう！ どうして言うことを聞かないんだあああつ」

まるで愚図の子供のようだ。股布を擦られてしきりに身じろぐ少女を見て、率直にそんな感想を抱く。

「見惚れているのか？」

「……っ！」

不意に振り向いたメルコールの凍てついた視線に貫かれ、心臓が戦慄に震える。次の瞬間、反射的に弓を番え矢を放つてしまつた。

「かああつ！」

狙いも威力もあいまいな一撃は、男の一喝——気を打ち放つただけで射落とされ。

「初心な聖女殿に、特等席を用意してやろう」

パチンと指鳴らした男の合図に従い、たつた今まで真白の背後にあつた触手椅子が、やはり瞬間移動したかのように一瞬ですぐ真後ろへと出現した。

にゅぢゅ……ぢゅるるるるるっ！

「ぐ、うあつ……！」

それ自体が意思を持つ異形の椅子から黒々とした触手が幾本も伸び、男の気に当てられ金縛りにあつたように強張る四肢をたやすく拘束する。

取り乱し隙を見せたことへの悔恨と羞恥を覚えつつ急ぎ全身に力を込めるも、すでに遅く。無理やり椅子の手に引きずられ、力づくで座らせようとギギギ縮め上げられ、骨のきしむ音を聞かされた。

（こんな気味の悪いものに座りたく……ない！）

生命の息吹を思いきり禍々しく体現した脈動を繰り返す、漆黒の椅子。それを形作る触手どもが、表皮からヌルつく体液をにじませ、獲物を待ち構えるように蠢いている。生理的嫌悪感を催すと同時に、

「ただ座らされるだけでは済むまい」との確信めいた想像が胸を焼く。

「あぐ……いや、だつ、あつ、あうあああつ！ コレを、コレを生やすのは嫌あああつ！」

中腰の不安定な態勢で踏ん張り、着席の拒否を決め込み。響いた金切り声に目を向ければ、股に張りつく異形の幹を両手で支え、引き剥がそうと躍起になる小さな少女の姿が再び視界に入ってくる。

（生やすつて……あ、あんなモノ……を？）

彼女の発した「生やす」という単語がおぞましき予感を誘い、否応なく少女の股下で跳ねるソレを注視してしまう。想起したのは、これまで幾度となく倒してきた異形の怪物ども——ギアムのそれぞれ醜く特化した触手まみれの姿だ。

ギアムも元は人であつた者たちの欲望を悪のピースにより極限まで増幅させることで生み出される存在。同じく悪のイノセントピースにより戦士として目覚めさせられた真白とは、力の根源が共通する。

「無様だな。だが、新たな力を得るための処置だ」

おぞましき計画の首謀者は、触手椅子の背後に回り、背もたれに手を乗せて悠然と笑んでいた。

「ち、くしょうっ、絶対に……許さないぞっ。後で後悔させつ、んぎあああつっ！」

「許す許さぬというのは、実力や地位が上の者が使う言葉だ」

「あんなモノが……新たな力だと言うの?」

わざわざ企業秘密を教えてくれるわけ——そう挑発したところで結局男の不快感は崩れない。それでも堪えきれない腹の内の激情に駆られ、口にせずにはおれなかった。

「とりあえず座つたらどうだ? いつまでもそのままの姿勢では疲れるだろう」

悔しいが男の言うとおり、絶えぬ圧力によって早くも疲弊に喘いだ脚が小刻みに震えだし、これ以上中腰の態勢を維持するのにも限界があった。

「お断りよ……っ」

わずかな振動でさえ足が滑ってしまいそうで、弓矢を標的に向けることはおろか、そうするために努力することすら難しい。

なのに、フツと男の唇が歪んだと思った次の瞬間。

「まあ、そう言うな」

「なっ?! 嫌っ——!」

グツと両肩をつかまれて力任せ、強制的に椅子の上へ腰を下ろさせられた。

べちゃっ——。

横暴に文句を吐き散らす間も、ない。

「んくうっ……!」

勢いよく腰を落とした際巻き起こした微風により、運悪く腰穿きがめくれ上がり、ヌルつく異形の表皮へとじかにショーツが接地してしまふ。

(……っ、ひ……湿って……冷たっ……嫌ああ!)

座るなりズルッと尻を滑らせるほどの、大量の液絡まりうねる触手どもがござつてにじませる体液が、瞬く間に薄い布地へと染み入ってきて、粘ついた湿り気の心地悪さを否応なく味わわされた。生理的嫌悪感が増し続け、背筋に絶えず悪寒が奔る。

わずかな身じろぎを起すたび、尻の下でグチュグチュと汁が泡立ち、攪拌されてなおいつそう粘り

気を増していった。

「——話を、しようか」

男は相変わらずの冷然とした容貌で、仲間の叫喚をチラと目端に留め。どこか愉しげな様子とうかがわせながら、真白の受けている仕打ちの全容を語り始める。

「やだっ、やああっ! パ、パンツめくっちゃ……くんうアア! 嘔むのもだめエエ!」

男の酷薄さを際立たせるように、真白の悲痛な嘸きがこだましていた。

(……下衆!)

平然とした様子のメルコールに対し、心底からの侮蔑をまなざしに乘せて送る。その男の肩越しに見てしまふ。ほんのわずか目を離していた間に、真白はさらに酷い有様になっていた。

まず、真っ先に目についたのがよじれて脇に引つ張り寄せられたショーツよりはみ出た薄い恥毛と、その毛を食らう勢いで群がる数多の毒色触手群。割れ目部分は今や完全に異形の群れに覆われ、まったく視認できない状態だ。絶えず響く卑しい粘着音とともに触手の脚が蠢くたび、ドロリと濁った蜜汁と触手汁の混合液が四方八方飛散する。

「んぶっ! んんんっ……! ぶあっ、ひゃ、ひゃめえっ……臭いの、喉にらひひゃっ!」

ぶぢゅぶぢゅと粘着質な水音が、少女の小さな口からこぼれていた。股下からはるばる伸びた毒色触手に口内まで侵食され、掻き回された口腔から唾液と、異形の体液とが、やはり混合して漏れ出ている。

「口淫を見るのは初めてか」

「……だったら」

どうだというのだ。つい我を忘れ剥き出しかけた激情を、グツと生唾ごと喉の底に押し込める。

「フ……成る程」

感情を見せれば見せるほどに男に嘲笑われているようで、とにかく無性に腹が立った。四肢を椅子に

繋ぎ止めている拘束を引きちぎろうと試みたが、尻の下の感触に対する嫌悪が先にたっているせいで意識の集中が阻害され、一向に力の集束が叶わない。「負け知らずゆえ、辱められた経験もないわけだ」

「……!」それがどうしたと……ひアッ!」

ドクン——にゆぶりゆりゆつ!

一瞬迷いに囚われたその隙を狙ったかのように、尻の下の触手どもが胎動する。同時に真下から押し上げてくる物の存在を、総毛立つ尻肉でじかに感じ取った。

「ああして真白に飲ませている汁も、貴様の尻に染み入る汁も、濃度は違えど同じ効能を持っている」

「なっ?! んひゃうっ……く、くううっ」

尻の下の何かにツンと臀部をつつかれた。と同時に、ネットリとした粘液が一斉に噴きつけられる。

「人の世で言う、媚薬というヤツだな」

「びやっ、ふうああああ!」

ツンツ、ツンツ——ぶびゅ! ぢゅぶぢゅぶ!

尻を小突かれ、隙間なく粘ついた汁をすり込まれた。蠢く触手自体が巨大な舌のようで——ペロペロと尻をなめ回されているような、不快な心地。

だというのに——。

(な、なにつ、これ……か、身体の芯つ……!)

風邪でも引いたみたいなのに、全身が気だるさと火照りに覆われていく。じかに接地している股下がウズウズうずいて、しきりにかゆみとは違うむずつきを訴えかけてくる。じわり——異形の体液とは違う蜜が、ショーツに次々新たな染みを作っていた。

男は「程度の差こそあれ」真白も同じ目にあっている、と言った。この触手椅子に平然と腰かけていた真白が狂乱し拒絶するほどの——。

(こ、これ以上の刺激をあの、小さな身体につ!!)

想像することすらはばかられる、人外の所業としか思えなかった。

「ヤツの表情を、よく見てみるがいい」  
促されて再度、真白の表情をうかがう。

少女は目に涙を溜め、悔しげに唇を噛んで、非情の仕打ちに耐えているように見えた。

「っ、あ、っ……あなた、相当恨まれてるよう、ねっあ、あくうう……!」

椅子に浮き上がった出っ張りめいた部分が、執拗に尻の谷間を突っついてくる。くすぐったさに、摩擦でぐちゅぐちゅと泡立った異形の汁気とが混ざり合い、強烈な悪寒が背に奔り。同時に、意図せず切ない衝動に胸が焦がされる。

「そう、見えるか?」

「それ以外どう見ろと……!」

真白の涙の理由は、屈辱にまみれた情けなさを噛み締めているから。唇を噛んでいたのは、湧き出る嗚咽を憤怒の情ごと押し殺すためだろう。そう考えたからこそ、どこかで真白に共感を覚えながら、己の肉体が思うままにならぬ歯痒さに耐え忍び、やつとの思いで皮肉をメルコールにぶつけた。

「いぎっ……ああああっ! 裂け、るううううう!」

(っ、うう……今度はない……っ!?)

耳朶をつんざく叫びにつられて、煩悶する肢体を揺るがし、気だるさで重たく垂れ下がらまぶたを強引に開ききる。視界に映し出されるのは、相変わらずの真白の姿。股に張りつく触手ペニスを両手で押さえ、もじつく脚でヨタヨタと躍りながらも懸命に耐えている、哀れな生け贄のようだ。

「怒りだの恨みだの、つまらぬことを気にかける前によく見るのだ。真白の胎と、腿の辺りをな」

「く、ふ、あっ……み、耳元でささやかないで!」

息がかかって汚らわしい。強がった言葉に気を取られ、息をかけられた耳たぶが切なさに悶えたのを見逃してくれば——甘い期待にすがりながら、男に言われたとおり、真白の腹部と内腿付近に目を凝

らす。

「あ、ぐっ……ううう……んぐうっ!」

「どうした、真白よ。声など殺さず、いつものようにさえずればよからう」

冷酷な男の言葉が、唇を噛んだ少女のまなじりをますます吊り上げさせ、声の代わりに、ぼたり——その股根を伝う鮮血が、ある事実を伝えてくれた。

(や、破れてっ……!)

ずぶ、ぶぶぶううっ!

「はぐっ……うあああああっ! い、いたあっ、ああぐう! お、奥つ、嫌あああああああっ!」

前後に激しく抜き差しされる触手の脚の行き着く先へとようやく視線が追いつき、悲痛な光景に驚愕し、息が詰まるほど喉と胸が引き撃った。

異形ペニスが乙女の小さなショーツを押しつける。うねる脚の側を真白の股間へと伸ばし、深々、幾本もこぞって突き入っている。

ずぶずぶと少女の処女地に沈み入る脚どもは、どうやら伸縮自在であるのか、想像以上に奥深くまで伸び、食い入っているらしい。さらに視線を上向ければ、華奢な真白の腹部をポッコリ盛り上がらせるほどの容量が潜り込み、うねり狂っているのがはっきり見て取れた。

「胎内深くまで根を張らねばならんだ。処女膜は諦めろ」

男の非情の宣告を聞く真白の唇から、止め処ない嗚咽が漏れ出てゆく。ギラつきの増した少女の瞳は——

叶うことなら目の前の男を今すぐこの手で殺してしまいたい。そう語っているようにすら見えた。

「そら、ひと息に入れてしまえ」

おそろく己の意思に関わりなく悪意あるピースの宿主に選ばれ、今、物言わぬ異形に純潔を奪われた哀れな娘。強大な力を持ちながら、儚さにまみれた少女に、さらなる試練を課すがごとく男の声が飛ぶ。

にゆず! ぶぢゅぢゅずずつ! ぶぢ、ぶぢつ! 卑しく、無様で、痛々しい。様々な感想を抱く粘着音を伴って、真白の股間に生え立つた毒々しい幹が、歓喜の咆哮とばかりに上下に二度三度震えた。

「痛アツ、あアグ! こっ、れ以上つ、む、無理イ……イあつ?! いぎあああああ——っ!」

喉からす勢いで叫んだ真白の尻が弾む。その様はまるで真白自身が男性器を慰めようとしているかのごとく。カクカクと前後に少女の腰は跳ね回る。

「うあつ、ああああつ! ひ、響くうううっ!」

傲慢さが薄らいだ代わりに苦悶の表情に彩られた真白。悲痛な印象をより強めるその幼女体型と、不釣り合いなほど雄々しい毒色をした肉の竿。

「っ……ひぐうッッ!」

真白に囚われかけた意識を引きずり戻すように、尻の下の出っ張りが圧力を強め、とうとう谷間を滑るようにしてショーツ越しに小さなすぼまりにまで到達した。執拗に突っつき、こねくる動作を繰り返しては、また例の媚薬液体をすり込もうとする。

ぬぶ……ねぢよりゆるっ、ぬぼにゆぶっ……。

「あ、ふっ、うう、あつ! い、あつ! みよ、妙な音立てないっ、んああ! 立てない……で!」

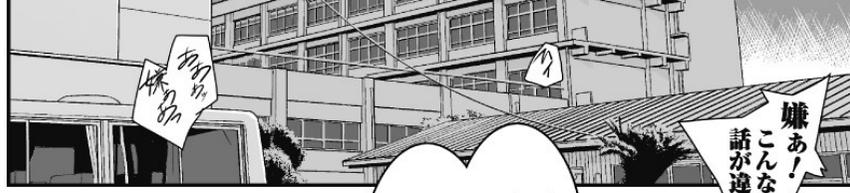
真白に負けず劣らず卑しい水音が、己の恥ずべき場所からもあふれていた。耐えがたき羞恥に悶える胸に悶々とした熱が加わって、切なさや歯痒さなどが混濁する。足掻くほどに、出口のない肉欲の連鎖に囚われてしまう。

「乙女と呼ぶものはばかられる、卑しい音色だ」

「くらアツ!」

ぎゅむうっ——背後からメルコールに、両の乳房を握り潰す勢いでわしづかみにされ、言葉による抵抗は即座に封殺された。突き抜ける痛みと屈辱とに目を剥き、意識を向けた瞬間。

ぶぢっ、みぢみぢみぢつ!



ちよっとH  
するだけって



ふふふ…  
これだけ  
いれば  
上も満足して  
くれるなァ

嫌あ！  
こんなの  
話が違う！



ヒッ  
やめて！  
せめて  
普通に…

オラ  
腕出せ！  
楽になる  
からよ



転校してきた  
かいがあった  
組織の尻尾  
掴んだぞ



まさか  
お前が

お前は2年の  
観月瞳…



お楽しみ  
のようだな  
山中先生



闇夜に紛れて  
悪を討つ！

# 闇復讐者

The Revenger,  
from the Darkness  
リベンジャー  
よりの復讐者



裏切り者の強化人間め！  
捕らえれば賞金が出るぞ







そうか



し知らん  
奴らいつも  
顔を隠してて

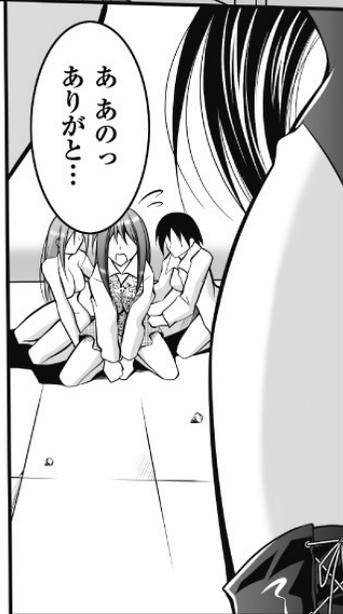
けど多分  
この学園の人間で  
基地もここに  
あるはずだ



二度とこんな  
目にあいたく  
なかったら  
己の軽率さを  
反省しろ



助けたわけ  
ではない  
邪魔なら  
殺していた



あああ  
ありがと...

やはりここは  
組織のアジト  
だったか

ならば  
怪しいのは



きゃ!?



写真はよせと  
言ってるだろ

ごめん  
だってー



アンニユイな  
瞳ちゃん

ゲット  
だぜー



なぜだ…  
写真を撮ると  
撮られると

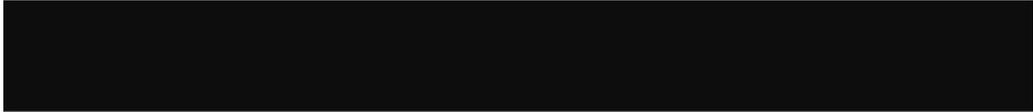
悪寒が…

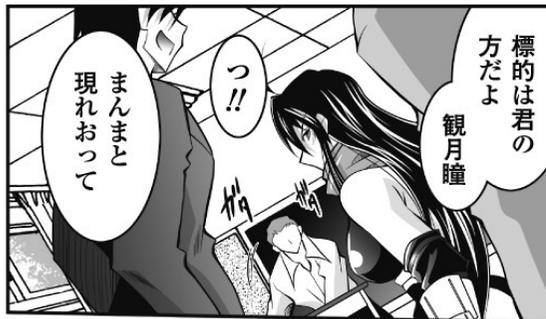


わわっ!  
やめない  
かっ

瞳ちゃん  
格好良いん  
だもん♡

2年C組  
海原透子  
教頭室まで  
来なさい









あああああ

ゲッ...

嫌あ...  
やめて

許してえ  
いやあああ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ



記憶が...?

何!?

組織の  
ために  
私はあ...

誓いますう  
うらうツツ!!



何!?  
撮られると…



痛



やめて!  
もうお家に  
帰して…

香の影響か?  
フラッシュが  
きっかけになり  
記憶の退行を  
引き起こして  
いるようだな

違う!  
私は…

く…ああっ  
撮るなあ!

違う!  
誓い…  
組織に忠誠を

くそおつ  
動け!  
この体あ!!  
ハハハハ



きゃあああ  
ああっ!!

助けてっ  
ママあ!

自分で勝手に  
再洗脳されてる  
ようなものだ

く……こそ

私が……  
誓うのは

復讐だ!



ああ♡

ほら再び  
組織に忠誠を  
誓うがいい

こころ  
精神は組織を  
受け入れている  
じゃないか



ああああ♡

口では反逆  
していても





ん…

ん

おはよう  
観月君♪

貴様は  
山中!!?  
昨日殺した  
はず…!!

ふふ…

お前の肉体は  
競売にかけられ  
ているんだよ

俺が最初の  
客ってワケさ

何だ?!

今までの様子は  
学園の裏サイトで  
中継しててな

な…何を  
する気だ

再生とそれで  
全財産使って  
しまったが



先代神伽の巫女と出逢った咲妃に、  
九未知会のミスカが襲い来る！

# 呪詛喰らい師

カースイーター

封の四 妖銀貨

あおいむらまさ  
小説 蒼井村正

あると  
挿絵 或十せねか



がすがりついて胸を揉んでいた。

見た目の年齢は七十代後半から八十代、身長は百六十センチに満たず、白髪頭の髪は、伸び放題、乱れ放題で、年齢の割に脂ぎって見える細面の顔には、スケベつたらしい笑みが浮かんでいる。

「ずいぶん敏感ではないか？ 身体も熱いぞ……オッパイが気持ちええのかなあ？」

少女の紅潮した耳元に卑猥な声音で囁きかけながら、老人は骨張った指をワキワキと蠢かせ、若々しく張り詰めた爆乳を円を描いてこね上げる。

「きゅふんッ、……常次殿、いい加減にして下さい！ あふう……はあう！」

「何を今更。これがワシ流の挨拶だつちゆうことは、よう知つてるやろが？」

「おつ、おい、爺さん、セクハラは止めろよ！」

悩ましげに身悶える咲妃の痴態に見とれていた信司は、ハッ！ と我に返ると、老人の襟首を掴もうと手を伸ばした。

「おおつと、危ない！」

おどけた口調で言った老人は、クルリと身を翻して飛び退き、勢い余った信司の手は、咲妃のたわわなバストを真正面から驚掴みにしてしまう。

「うあ！ ごつ、ゴメンッ！」

堪らない弾力の肉球に手のひらを張り付かせたまま、上ずった声で詫げる信司。

「くふう……さつ、先に手を離してから謝れ！」  
頬を赤らめて身を振った呪詛喰らい師は、揉みこねられて乱れた制服の胸元を直し、呼吸を整える。

（まだ、阿絡尼を封じた時の神気で、身体が敏感になつていようだな。胸の鼓動がなかなか治まらない……常次殿にも見抜かれたか？）

揉みこねられた乳房の疼きに眉を擡める咲妃を、セクハラ老人はしばし無言で見つめた後、人なつっこい笑みを浮かべた。

「ほほッ、挨拶終了じゃ。まあ、何も無いところだが、上がれや」

一騒動あつたものの、二人はだだっ広い板床の中央にあぐらをかいた老人の前に、並んで座した。

「ワシは武御雷常次。一応、この責任者やらしてもらつとる。兄ちゃんは、むつつりスケベで都市伝説マニアの岩倉信司君だな？ 咲妃ちゃんの報告書にしよつちゆう名前が出てくるぞ」

今更のように自己紹介した作務衣姿の老人は、ニヤニヤ笑いを浮かべながら信司に声を掛ける。

「えっ?! オレは確かに岩倉信司ですけど……むつつりスケベですか？ あははは」

強張った笑みを浮かべて答えた少年は、隣で笑いを堪えている咲妃を横目でジロリと睨む。

「早速ですが、お聞きしたいことがあります。淫魔侵入事件の夜。常磐城久遠と名乗る女性と出会ったことは、常次殿も知つておいででしょうか？」

改まった口調で、咲妃が話を切り出した。

「うむ、報告書で読んだ。あいつの……久遠のオッパイも、なかなか見事だつただろう？ ああ、もう一回、あいつの乳も揉みたいなあ」

「常次殿、オッパイからは、そろそろ離れていたじゃませんか？ 真剣な話なんです」

「なんじゃ、ずいぶん堅物になつたなあ。まあ、仕方がない。包み隠さず話してやろう。……あれは、今から五十年以上前の話だ……」

「稀代の天才退魔士であつた久遠は、神伽の巫女として活動していた。もつとも、咲妃ちゃんと違つて、籠の鳥みたいな扱われ方だつたが……」

「籠の鳥、ですか？」

「うむ。俗世間とは一切接触を持たず、常に護衛に守られていて、神伽の任務の時だけ出動する。今に

して思えば、もつと自由にさせてやりたかつたな」  
客である咲妃が淹れた茶をすすりながら、老人はしみじみとした口調で語る。

「久遠は、そんな環境に不平一つ漏らさず、巫女の責務を務めていた。優しく、賢く、強く、何よりも最高のポインちゃんだった。あの感触、今も忘れられん」

オッパイフェチの老人は、既に死語となつている言い回しで、久遠の巨乳を懐かしむ。

「またオッパイですか……」

呆れ顔のため息をつく呪詛喰らい師。

「まあ、そんなこんなで、幾柱もの淫神を神伽によって鎮め、その身に封じた久遠は、ついに、次の階梯へと至つた……」

「次の階梯というとは？」

「……神産みの巫女」

重々しい口調で、常次は咲妃の問いに答える。

「その名の通り、取り込んだ巫神、淫神の神体を、別の人間を依り代として転移させる力を持つ者」

作務衣姿の老人は、先ほどまでの冗談めかした口調を一変させ、押し殺した声で告げた。

「そんな力を、人が持つことが可能なのですか？」

「前代未聞だが、久遠は確かにその力を得た。そんな彼女を狙つて、幾多の魔道組織、淫魔が襲来し、退魔機関も総力を結集して挑んだ。そして……悲劇が起きた」

常次の沈黙に、空気が重く張り詰める。

「悲劇、とは？」

むつつりと押し黙つてしまつた老人に、咲妃が話の続きを促す。

「……久遠の護衛であり、恋人でもあつた退魔戦士が、戦いのさなか、彼女から与えられた神格の力を暴走させ、敵味方を含め、大勢を巻き込んで命を落

とした」

「常次がギリッ、と無念そうに歯ぎしりする音が、静まりかえった本堂の中に耳障りに響く。」

「自ら与えた力のせいでも、愛する者たちの命を失った悲しみと絶望、そして己への怒りで、久遠は自らに呪詛をかけて、奈落に落ちた」

「老人は語り終えると、フウツ、と大きな吐息を漏らして顔を伏せた。」

「奈落というのは、あの石門のことですね？」

「そう。あれは『哀女ノ岩戸』。自己幽閉型の強靱きわまりない境界よ。あの石門から、久遠は一步も出られず、外部への力の行使もできないはずだ」

「それは変ですね。妖銀貨たち、九未知会の連中は、自在に出入りしているようでしたが？」

「あくまでも、呪詛の対象は久遠唯一人。特定の条件を満たせば、第三者は出入り自由なんだよ」

「それもあある意味、残酷な話ですね……」

「久遠の憂い顔を思い出しつつ、咲妃はつぶやく。久遠が九未知会の盟主だというなら、アンノウンズどものこれまでの活動にも納得がいく。自らにかけた呪詛の強大さ故、岩戸から出られぬ久遠に、亜神や淫神を供給し、封印を解く力を与えようとしていたのだろうかよ」

「なるほど……。ところで、彼女は、私のことを伴侶と呼びました。亡き恋人の後釜にでも据えるつもりなのでしょうか？」

「いや。誰にも、あいつの代わりはできません。乱れ放題の白髪頭を振って、常次は即答する。」

「おそろく、新たな神伽の巫女である咲妃ちゃん急成長を知って、外から岩戸の呪詛を解除させる二段構えの策を取ることにしたのだ」

「俯き加減だった顔を上げた常次は、孫娘ほども年の離れた神伽の巫女の目を真っ直ぐに見つめながら

言葉が続ける。

「ここ数ヶ月で、咲妃ちゃんは急激に力を増した。だが、久遠の力にはまだまだ及ばぬ」

「それは、初対面で痛感しました。しかし、私は、神伽の巫女。久遠が救いを求めているのなら、全力で神伽の戯を執り行うだけです！」

「きっぱりと言いつつ咲妃の顔を、信司は果然とそして、常次は頼もしげな笑みを浮かべて見つめる。」

「いいねえ、惚れちまいそうだな。咲妃ちゃん、ワジのカノジョにならんか？」

「お断りします！」  
セクハラ老人の申し出を、呪詛喰らい師は即答で拒絶した。

「あちゃあ！ また振られたか」  
軽妙な口調に戻った常次は、白髪頭をボリボリと掻きながら苦笑を浮かべる。

「護衛も本場に付けないんだな？」  
「ええ。これは戦いにあらず。神伽ですから……。あ、一応、善後策を考えてありますので、計画書をお渡ししておきます」

咲妃は、ケースに入ったメモリーカードを常次の前に置いた。

「さすがは咲妃ちゃん。ならばこれ以上とやかく言うまい。久遠に関する詳しい情報は、パソコン通信で送ってやる」

「パソコン通信って……やっぱり古いな、爺さん」  
それまで黙って話を聞いていた信司が、場の空気が和らいだのを察して、ポツリとつぶやく。

「余計なお世話じゃ、むつりスケベ！」  
「自分だってオッパイフェチじゃないか!？」

「巨乳愛好家と呼べ！」  
「クククッ、思った以上に二人は馬が合うようだな。お前を連れてきて正解だったよ。信司……」

常次と信司のやりとりを聞いていた咲妃が、含み

笑いを漏らす。その表情には、先ほど見せた凛然たる覚悟の名残は見られず、いつも通りの飄々とした物腰に戻っていた。

常次との会話を終えた二人は、帰りの電車で揺られている。

「……なあ。あんなに重い話、オレなんか聞かせちまって良かったのか？ 極秘事項なんだろう？」

対面式のシートに座った信司が、沈黙に耐えきれずに口を開いた。

「ああ。いいんだ。私の置かれている状況を、友人に知っておいて欲しかったからな」  
「雪村さんや鮎ねえじゃなく、本当にオレで良かったのか？」

「あのセクハラ老人のところに、女子連中を連れていくわけにはいかないだろう？ 確実に採まれるぞ」

「そつ、そうだな……」  
制服越しにもポリウムを誇示している咲妃の爆乳にチラチラと視線を走らせつつ、信司は頷く。

「つまり、オレは消去法で選ばれたってわけか……で、オレたちに何かできること、ないのか？」

「一つだけあるぞ。私を信じてくれることだ」

「それだけかよ!? そりゃ、オレは無力かもしれないけど、あんな話を聞いたら、もつと何か……」

意気込む信司の膝頭に、咲妃の手のひらがそつと置かれた。

「お前たちと築き上げた絆が、私にとって最強の切り札になる……。そんな気がする」

「絆が？」

至近距離で見つめてくる少女の美貌と、腿に伝わる手のひらの温もりに胸ときめかせてしまいつつ、少年は上ずった声で聞き返す。

「信司、お前の名字、岩倉（岩蔵）とは、神が最初

に降り立つ大岩の暗喩でもある。まさに、私はお前と出会ったことで、槐宝学園にやって来て、かけがえない友人を得た。その縁と絆を信じたい」  
いつになく真剣な口調で、呪詛喰らい師は親友の少年に語りかける。

「あ、あの……オレ……常磐城さんのことも！」  
信司が意を決して何か言いかけた瞬間、列車がホームに到着した。

「さあ、我が町に帰ってきたぞ。今日は付き合わせまして済まなかったな」  
さつきと席を立つた呪詛喰らい師は、軽やかな足取りでホームに降り立つ。

「ちよつと待ってくれよ。なあ、今日、あの爺さんに聞いた話、鮎ねえにも教えていいんだよな？」  
咲妃の背中を追いながら、信司は呼びかける。

「ああ。好きにしろ。腕枕でもしてやって、寝物語にでも聞かせてやるといい」  
鮎子の告白を受け入れた二人の仲が、急激に進展していることを知っている咲妃は、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「なつ、何を言ってるんだキミはあ！」  
「フフツツ、じゃあな。また明日、学校で会おう」  
面白いほど取り乱す信司と駅前で別れ、咲妃は家路についた。

飲み屋やクラブが建ち並んだ繁華街の近所までやってきたところで、咲妃の足元に、チャリオンツと涼やかな音を立てて銀貨が跳ね転がってきた。

「妖銀貨のミユスカ……私を捕らえに来たか？」  
立ち止まった呪詛喰らい師の前に、スレンダーボディを白スーツに包み、ソフト帽を目深に被った男装の麗人が立ちほだかる。

「いや、今日はお前とゲームをやりに来た」  
「ゲームだと？」  
怪訝そうに問い掛ける咲妃。

「そう。賞品は、妖銀貨の力の源……私がネメシスと呼んでいる淫神だ。どうだ、受けるか？」  
「条件次第だが、本気か!」  
白スーツ姿の麗人は、苦笑を浮かべて頷いた。

「私としても、長年連れ添った妖銀貨の力をあつさりと手放す気はない。そこで、趣向を用意した」  
ミユスカは、呪詛喰らい師に目配せして歩き出す。

「そういえば、阿絡尼から奪った神体の力、使いこなせるようになったかな？」  
並んで歩きながら、ミユスカが問い掛けてくる。

「まったくダメだ。あの神体は、阿絡尼の潜在能力と強く結びついていたらからな。おそらく、私にはごく一部の能力しか使えないだろう」  
咲妃は正直に答えた。

「そうだろうな。阿絡尼の力は、我が盟主が与えしもの。他者には制御できなくて当然だ」  
「やはりそうか。久遠は神産みの巫女なのだな？」  
核心に迫る問い掛けに、ミユスカは無言で頷く。

「だが、私の力は盟主殿に与えられたものではない。少し昔話をしよやろう」  
「今日は昔話をよく聞かされる日だな」  
風俗店が建ち並ぶ一角に足を踏み入れた妖銀貨は、よどみなく歩を進めながら語り始めた。

「かつて、東ヨーロッパの某国で内戦があった。宗教と民族の対立が招いた、泥沼の内戦だ」  
けばけばしいネオンの照り返しで、白スーツを極彩色に染めながら、男装の麗人は言葉を続ける。

「私はまだ幼い少女だったが、愛する人々を守るため、液体金属状の淫神、ネメシスの依り代となって、迫り来る敵の大部隊と戦い、これを殲滅した」  
ミユスカの美貌に浮かぶ苦笑が深くなる。

「……だが、淫神は、さらなる破壊と殺戮を欲していた、私は暴走状態に陥った。そんな私を止めてくれたのは、妖銀貨の解放を知って退魔機関から派遣

されてきたエージェントだったのだ」  
そこまで一気に話した男装の麗人は、フウツ、と大きく息を吐き出した。

「私は修練の結果、融合した淫神の一部を、銀貨に変化させて体外に取り出すことに成功し、殺戮衝動の呪縛から逃れ、フリーの退魔戦士となった」  
「妖銀貨の名前は、屈指の戦闘エージェントとして、退魔機関では伝説的な存在になっているな」  
ミユスカの隣を歩みながら、咲妃は応じる。

「しかし、戦うたびに業は溜まり、衝動は際限なく強まってゆく。抑え込むのも、そろそろ限界なのだ……おっと、到着してしまつたな」  
「ここは、ストリップ劇場？」  
ミユスカが足を止めた建物の電飾看板を見上げ、制服姿の少女は険しい表情を浮かべる。

「そうだ。ここでゲームに挑んでもらう」  
「ろくでもないゲームのようだな」  
「それでもないぞ。誰も死なず、傷つかず。興奮と快楽に満ちたひとときを過ごせるだろう」  
意味有りげな笑みを浮かべた妖銀貨は、ストリップ劇場のドアを開けて咲妃を誘う。

「興奮と快楽？ 確かに私の得意分野ではあるが、何か裏がありそうだな？」  
「不正や畏は一切なしだ。純粹にお前の魅力を試してもらおう。さあ、入れ」  
淡いピンク色にライトアップされた劇場内には、既に客が入っていた。

塾帰りらしい少年三人組、様々な年齢層の、スーツ姿の男性が十人余り、思い思いの服装の若者が数人、あわせて二十人近い人数が、私語一つせず宙に目を据えて客席に座っている。

「この男たちの体内には、一人一枚ずつ、妖銀貨を憑依させてある。それを取り出す手段は、彼らを絶頂に導いて射精させることだ」

「そんなことだろうと思った。ご奉仕か？ それとも、輪姦されるということかな？」

様々な年齢層の客たちを見回しながら、呪詛喰らい師はうんざりした口調で問い掛ける。

「いや。男どもには指一本触れさせないし、お前が彼らに奉仕することもない。自慰行為を見せつけ、彼らに興奮の極致に導いて果てさせればいい」

「自慰行為だ?!」

「ああ。彼ら全員が射精する前に、お前が十回果てたら私の勝ち。こんな条件で、最強クラスの戦闘力を秘めた淫神、妖銀貨を手に入れられるのだ。大サービスだと思っただけじゃないか」

「やってやるさ！ これも、変則的な神伽の戯。恥じらうことなど何もない！」

きっぱりと言い放つ咲妃であったが、その頬は紅潮し、瞳には迷いの色がある。

「まだ、身体が本調子ではない……欲情してしまつたら、抑えきれないぞ」

阿絡尼に憑依していた強力な淫神を封じてまだ数日。濃密な淫気の影響で、肉体の感度は著しく上がつてしまつている。

常次に胸を揉まれた時も、ろくに抵抗できぬほどに感じ、乱れてしまつたのだ。

「では、舞台上上がって、始めてもらおうか。おつと、その前に、印象希薄化の呪印は解除して、真の姿と色香で、男どもに媚びるんだ」

「判っているさ！ 解ッ！」

呪印を解除した咲妃が、直径3メートルほどの円形ステージに上がると、ミュスカがパチンツ！と指を鳴らした。

かけられていた催眠暗示が解けたのか、それまで無表情だった観客たちが急にざわめき出す。

「あれ、槐宝の制服だぞ！ 本物の女子校生か？」

「すげえ美人だな。オッパイもでかいぞ……」

「槐宝の女子は結構まめにチェックしてたけど、あんな美少女が居たなんて、見落としてたぜ！」

男どもの囁き交わす声と、欲望剥き出しの視線が、微弱な電流のように全身をビリビリと刺激して、それだけで身体が火照り疼いてしまう。

「妖銀貨に憑依されても、理性や感情は残っているようだが、全員、あからさまに欲情しているな」

男たちの股間は、着衣越しにもはつきりと判るほどに勃起しており、目は興奮で血走っている。

「妖銀貨が憑依すると、身体能力が強化される副作用として、極度の興奮状態に陥る。これはお前にとつて有利なのではないかな？」

舞台脇に立つたミュスカが声を掛けてくる。

「興奮しすぎて、飛びかかってくるはしらないだろうな？」

「安心しろ。お前か私が命じない限り、身体には指一本触れぬように暗示をかけてある」

「私の命令にも従うのか？ お前たち、遠慮せずにもつと前に出てきていいんだぞ」

咲妃が声を掛けると、男たちは我先に席を立ち、円形舞台の周囲に群がってきた。俗に言う、「かぶり付き」の状態である。

「なるほど……面白い」

ニヤリ、と笑みを浮かべ、勝ち気な口調で言いながらも、呪詛喰らい師は、胸の奥からジワジワと込み上げてくる羞恥心に戸惑っている。

（こういう状況で欲望剥き出しの視線を浴びるのが、これほどまでに恥ずかしいとは……。印象希薄化の呪印に頼りすぎたか？）

呪印の効果で、普段は他人の視線を気にせずに過ごしているだけに、あからさまな欲望のまなざしを浴びる状況には慣れていないのだ。

「おい姉ちゃん、早く脱げよ！」

「勿体ぶらずにオッパイとオッコ見せろ！」

舞台上で固まっている咲妃に焦れた男たちが、野卑な声を上げた。

「焦るなッ！ 私にも心の準備が……」

「早く始めないと、そいつらに憑依させた妖銀貨が暴走するかもしれないぞ」

柄にもなく恥じらう神伽の巫女に、ミュスカが追い打ちの声を掛けてくる。

「判ってる！ お前たち……わつ、私の色香で弾かせてやるぞ！」

舞台の上で膝立ちになった咲妃は、恥じらいと色香の入り交じった視線を観客たちに投げかけながら、シャツのボタンを一つずつ外してゆく。

シャツの前が大きくはだけられ、深紅の革帯ボンデーに緊縛された半裸身があらわになると、その場にいたほぼ全員が、ゴクリ、と喉を鳴らす。

「うほお、清楚な学生服の下はSMコス着てるなんて、実はとんでもない淫乱美少女か?!」

「学生のくせに、すげえ格好してるじゃねえか。いぞ、もつとエロエロに身体をくねらせろ！」

舞台上に身を乗り出したサラリーマン連中がはやし立て、口笛と拍手が鳴り響く。

（この男たち、完全に操られているわけではない。普段抑圧されている性衝動が、妖銀貨の影響で増幅されているのか……スケベどもめ！）

「勿体ぶらずにスカートも脱げよ！」

「く……判った……脱いでやるさ」

まろやかなヒップラインを、脱ぎ落とされたスカートがスルリと滑って膝元にわだかまると、声にならぬどよめきが湧き起こる。

ムッチリと肉感的な太腿から段差なしに続く美尻の谷間には深紅の革帯が深々と食い込み、フェティッシュな色香をムンムンと匂い立たせている。

尻の豊かさとは対照的に、ウエストは細く引き締まり、へその窪みもエロチックな腹部には、ほどよ

く鍛えられた腹筋の輪郭が浮き出して、尻に負けぬポリリウムを誘う爆乳に向かつて、完璧なくびれを描いていた。

「く……はやし立てられるのも不快だが、黙って凝視されると、さらに恥ずかしい……」

神伽のために磨き上げられた極上ボディをさらけ出した美少女は、頬の火照りを感じつつ、視線の集中砲火に耐える。

「素晴らしい、これは芸術的な肉体だ……三十年ぶりにチ●ポがはち切れそうない女だ」

客たちの中では最年長と思われる白髪の老人が、低くくぐもった声で、咲妃の半裸身を賛美した。

「こんな恥ずかしい座興、早く終わらせるに限るな……。まずは、あの男子たちを果てさせる！」

欲情した男連中を素早く見回した咲妃は、ハーフパンツの股間を膨らませて身じろぎしている少年三人組を、最初のターゲットに選んだ。

「キミたち、もつとそばにおいで……」

自分よりも年若い思春期の男子たちに優しい声を掛けると、三人組は恥ずかしげに俯きながらも、舞台の最前列へとやってきた。

「お姉さん、超いい匂いがする……」

まだ声変わりしていない少年が、子犬のように鼻を鳴らしながらつぶやく。

「オッパイ、すごく大きい……」

隣にいた少年も、股間の膨らみを隠すようにしながら、ボンデージに強調された爆乳を凝視する。

「フッ、そうか……もつとよく見る。ほら」

革帯に緊縛された爆乳に手を添えた神伽の巫女は、たわわなバストをやんわりと揉みこねてみせる。

黒いラバーグローブに包まれた繊指が、片手では握りきれぬサイズの肉果にめり込み、緩やかに円を描いて、乳唇の動きを繰り返す。

「すごい、オッパイって、柔らかいんだね」

目の前で柔らかく揉み歪められる乳房に、思春期の性的好奇心に煽られた視線を絡みつかせた少年は、痛いほどに猛ったペニスをハーフパンツ越しにぎこちなく弄っている。

「いいぞいいぞお。もつと乳を揉め！ もつとエロエロに悶えろよ！」

他の男たちも、たわわな胸を揉みこねるボンデージ美少女の痴態を見ながら、猛った牡槍を着衣越しに慰め始めた。

「ああ、見せてやるとも。だからお前たちも、遠慮せずに……ンッ……ひう……くふんんッ！」

想像していたよりも遥かに深く強い悦波が乳肉の奥底にまで響き、呪詛喰らい師に悩ましげなうめき声を漏らさせる。

「身体が敏感になっていいる。これは、なりふり構ってられないな。毒を喰らわば皿まで……」

「んくう……ふあ、あんッ。私ばかり恥ずかしいのは不公平だぞ。お前たちのペニスも、見せる……」

艶めかしい響き混じりに命令された少年たちは、戸惑った表情で顔を見合わせ、モジモジと身じろぎしつつ、ズボンと下着を一気にズリ下げて、発育途上の男性器を剥き出しにした。

「……意外とかわいい形なんだな……」

この年代の男子たちの勃起を初めて目にした呪詛喰らい師は、口元に小さな笑みを浮かべる。

いずれも仮性包莖気味で、亀頭の発達もまだ不十分な幼根だが、下腹にめり込まんばかりに充血して今にも弾けてしまいそうにいきり勃っていた。

あまりきれいに洗っていないのか、雨に濡れた革製品のような恥垢臭がかすかに漂ってくる。

「オナニー、してみせてくれたら、私の乳首を見せようぞ」

込み上げる悦波と羞恥心を押さえ込んだ神伽の巫女は、共犯者を誘うような心境で、淫らな誘惑を仕

掛ける。

「えっ!? う……うん……」

初めて生で見る、女の人のオッパイに視線を釘付けにされながら、少年たちは勃起を握り込み、まだ覚えたての自慰行為を開始した。

「ンッ、く……ンッンッンッ……」

押し殺した呻きを上げながらの遠慮がちな上下動のたびに、初々しいピンク色の亀頭が包皮を剥け返らせて顔を覗かせ、先端のワレメに、男の子の愛液がキラリと光る。

「あの子たち、私の身体を見ただけで、こんなに興奮しているのか……妙な気分だ」

誘惑者の悦びが、背筋をゾクリ！ と駆け抜け、羞恥の感情が興奮へと変質してゆく。

「その調子だぞ。約束通り、私も見せてやる……」

少年たちの視線を釘付けにしている爆乳の奥で、胸の鼓動が早まるのを感じながら、革帯ボンデージ姿の美少女は乳首をかるうじて隠していた革帯をゆつくりとずらしてゆく。

男子たちは、淫靡な動きを瞬きもせずに見つめながら、未熟な勃起をヒクヒクとしやくり上げていく。

ずれた革帯が乳房の曲面を一気に滑り降りると、既に勃起状態の乳首がピンク色の残像を描いて、プリュンッ！ と跳ね出てきた。

「上げエロ乳首だあ！ 自分でしゃぶってみせてくれよ、そのデカパイならできんだろ？」

まだらに染めた金髪を、ヤマアラシのように尖り勃たせた若者が、卑猥なリクエストを叫ぶ。

「く……ガミンせずに、いつでも出していいんだぞ。お姉さんに、キミたちの射精、見せてくれ」

下品な要求を無視して、咲妃はあらわになつた乳首の周囲を指先でなぞり、双房の肉果を揉み寄せて少年たちに自慢の乳首を見せつける。

「ハアハアハア……オッパイ……」

ネットでも目にするエロ画像とは桁違いの迫力と生々しさで迫ってくる美少女の爆乳を凝視しつつ、三人の男子は夢中になって肉茎を弄り、稚拙な手淫行為を加速してゆく。

(これは、いつもの神伽の戯とは勝手が違う。ウズメ流の技巧で少し愛撫してやれば、この子たちは数秒で絶頂させられるのに……)

目の前できこちなく扱き立てられる成熟途上のペニスを見ながら、咲妃は歯がゆさを感じている。

「もつと激しく擦るんだ。私も……ひうッ！」

少年たちに誘惑の声を掛けながら、乳輪ともどもブツクリと盛り上がった乳首のシルエトをなぞるように円を描いて指先を滑らせると、メリハリの利いたボンデージボディが、爆乳の奥にまで浸透してくるむず痒い悦波にわなないた。

「んくうう、あ、はああ……ひあ……んんんッ！」

押さえきれぬ甘い喘ぎが喉奥から漏れ、勝ち気な美貌が色つぼく歪む。

「いいぞいいぞお。超色つぼいぞお！」

「感じてる顔もエロエロだ……」

咲妃が乱れるほどに男どもの視線も熱を帯び、それが少女の肉体と精神を燃え上がらせる。

(そうか……これが、神をも歪ませる人の淫情……その一端を今、私は体感しているんだな)

淫神を封じるためだけに肉体を練り上げてきた退魔少女は、ストリップ劇場の小さな舞台上で、淫神を産み出す根源となる力を感じつつ、自慰行為を続ける。

「くふう……ンッ、あ、ひあ、あんッ！」

硬く尖り勃って疼く乳首を摘んでクリクリと採み転がすと、無意識のうちに美尻がくねり、太腿が切なげに擦り合わされて、甘く蠱惑的な淫臭が極上ボディから香り立つ。

「おつ、お姉さん。すごくエッチで……きれいだよ。」

「ハアハアハアハア……」

まださの残る顔を紅潮させた三人組は、片手ですっぽりと握り込めるサイズの肉突起を擦り立てて興奮の頂点へと駆け上ってゆく。

包皮と亀頭の間で、男の子の愛液がこね回されるクチュクチュという淫音が高まり、華奢な膝がガクガクと切羽詰まった震えを始めた。

「イッて……ほら、乳首、舐めてみせるから」

揉みこねによつて張り詰めた爆乳を持ち上げた呪詛喰らい師は、痛いほどに尖り勃った乳先に舌を伸ばし、チロチロと舐めくすぐる。

「はふううんッ！ あふ、あむ、ちゅば、くちゅれるっ……んあ、んむっ……ちゅっ、チュッ……」

ゾクゾクするような搔痒快感に鼻を鳴らしつつ、勃起乳首を左右交互に舐め、吸い上げた神伽の巫女は、色つぼい流し目で少年たちの絶頂をねだる。

「うお！ マジで舐めてるぜ、おい！ すげえ、エロいなあ、おい……」

先ほど、乳首舐めをリクエストした若者が興奮した声を上げるのを聞きながら、ボンデージ美少女は自分の乳首に舌技を駆使する。

「お姉さん……すごい……んんんッ！」

年上美少女の乳唇オナニーを凝視し、猛然と扱き上げた三人組は、ほぼ同時に絶頂を迎えた。

「ふあ、あつあつアッ！ 出るッ、でるよおお！」

甲高く裏返った叫びと同時に、クルミサイズの陰囊がキュウツ、と収縮する。

びゅくっ、びゅくびゅくんっ！ びゅるうううううっ、びゅぶるるるるるっ、どぶっ、びゅるろろっ、びゅるっ、ぶちゅるるっ、びゅくるんっ！

まだ成熟途上の肉突起が下腹を叩いてしゃくり上げ、濃度が不均一なスベルマを断続的に射出する。

「んふう！ んんんんッ！」

つて撃ち出された絶頂エキスは、たわわなバスの曲面にこつてりと粘り着き、刈りたての若草のような初々しい精臭を立ちのぼらせた。

甘美な放出は、それだけで終わりではなかった。

「あ、あ、ああアッ！ やあああんっ！ まだ、出るう、何か、出ちゃううウッ！」

まるで女の子のように甲高い声を上げた少年たちのペニスがひとときわ激しく跳ね回り、銀色の奔流を噴き上げた。

未成熟な精果内に憑依し、興奮を煽っていた妖銀貨が、射精の脈動とともに射出されているのだ。

「やつと……出てきたか？ くう、はふうう」

精液よりもずつと重々しい粘着音を立てながら、少女の爆乳に水銀状の淫神がぶちまけられる。

少年たちの体温で温められた液体金属は、豊乳の曲面に沿って薄膜状に拡がり、芸術的な半球状の肉果を完全に覆い尽くす。

「まずは……三人。……う？ ひあうううッ！ 入ってくるッ！ くあうんんんんんッ！」

液体金属の射出を終えて昏倒した少年たちの様子を確認していた咲妃は、銀メッキされた豊乳を押さえて身悶える。神伽の巫女を新たな依り代と認識した淫神が、体内への侵入を開始したのだ。

ピリピリとむず痒く痺れるような快感を与えつつ、汗腺や乳腺から侵入した妖銀貨は、血流に乗って全身に回り、肉体を過剰に活性化させてゆく。

乳首の勃起がさらに際立ち、全身が汗ばんで、スポットライトの光を受けてヌメヌメと照り輝く。

「あはああ、暑い……身体が……きゅふううう、んんんんッ！」

舞台の上で、深紅の革帯ボンデージ緊縛された極上ボディが艶めかしく乱れ、くねり悶えた。

肉感的なヒップが上下左右に振られ、尻に負けず劣らず肉感的な乳房が喘ぎに合わせて揺れ弾む。

「んふう！ んんんんッ！」

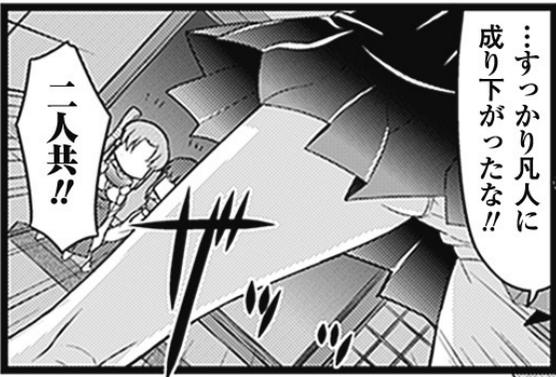
夏はスイカと幽霊と裸がいいね!

新たなる刺客!?



すっかり夏よね

それは七夕のある涼しい夕方の出来事...



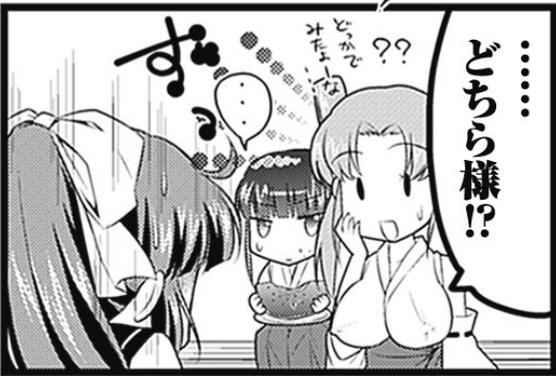
二人共!!

...すっかり凡人に成り下がったな!!



フ...久しぶりだな! 珠音...

え...? あなたは...



... どちら様!?



怨霊退散!!  
ふたご坐女 五巻

突然現れた女剣士!?

漫画 COMIC

かのう 嘉納あいら



# 相容れぬ仲



# ち○散歩の距離にて





キルマは何もしてないのに…

——つてあれ？

聞いて下さいですう

お姉様あ!!

お姫様全福のヒトトキ♡

すう.



あの卑劣で傲慢で低能で知性の欠片も無い野蠻な冒険者共が…

か弱いキルマに寄つてたかつて暴力を——っ!!

# 聖なる鈴の啼くセカイ

第13話 迫る者達



大ラッキー  
ですっ♡♡

でも

…これは  
珍しい  
ですねえ

あのお姉様の  
こんな無防備な姿を  
拝見できるなんて



念の  
ために  
さらに  
強力な  
睡眠魔法を  
かけてっど…



この美貌！この肉体！！  
そして何より…

あ~~~~っ  
お姉様っ♡♡

そのどSな性格と  
膨大な魔力が  
たまらないですっ！



ふぁあんっ♡  
柔らかいですう

そして流石の  
重量感ですう！

—まさか  
この乳に魔力が  
詰まってるなんて  
ことは……

そいえば

あの女も  
神官だった  
ですねえ……

……

……まっ

まさかですう！  
そんな事  
ありえないですう

キルマったら  
もう☆

んっ……っ……っ♡

んっ♡

んん…



んっ♡お姉様…  
ちよっと反応  
してるですか？

♡  
きゅきゅんも  
我慢できない  
ですう…

よい…  
しよっと♡

えへへ…♡

お姉様の  
えっちな香り…

最高ですう♡





綺麗な  
ピンク色で  
かわいい…♡

さすが  
お姉様

んしょ…

んう…♡

んっ♡

んちゅ…っ♡

他の女のなんて  
死んでも見たく  
ないですが…

お姉様の  
なら—

いただき  
ま—す♡

ん…ぶっ♡

あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ  
あーっ

# 淫魔の悪夢

A Nightmare of the Succubus

うえだ

小説 / **上田ながの**  
NOVEL

挿絵 / **おちんさま**  
ILLUSTRATION

処女淫魔を陥れる姦計！  
恥辱と快楽にまみれた宴が始まる

著者新刊

「僕のパーティーが修羅場  
すぎて世界が救えない」

8月下旬発売予定！

「ふふ、なかなか立派なものを持って  
いるじゃない」

篠塚の部屋。篠塚のベッド。篠塚の  
身体の上で、妖艶に女が微笑む。女の  
掌には、篠塚の肉棒が握られていた。  
既にペニスは勃起している。肉茎には  
幾本もの血管が浮かび、赤黒い亀頭が  
呼吸する様にゆつたりと蠢いていた。

肉槍に女の温かな体温を感じる。白  
く染み一つない絹の様な肌に握られて  
いると考えるだけで、よりペニスは膨  
張していった。

「な、何だ……なんだお前は!」

燃える様な紅い髪をした女。切れ長  
の紅い瞳に、艶やかな唇を持っている。  
顔立ちにはどこか幼さも残っているも  
の、一目見れば生涯忘れることはない  
いだらうと思えるくらいに、美しい女  
だった。完璧な造形は顔だけではない。  
身体付きも篠塚がこれまで見てきたど  
んな女よりも素晴らしかった。

黒い皮で作られたボンテージを思わ  
せる衣装が胸元を隠しているのだが、  
乳房は今にも零れそうな程に張り詰め  
ている。深い谷間が男を誘っていた。  
それでいて括れはキュッと引き締め  
美しい曲線を描く。ホットパンツで隠  
されたヒップがツンと上向き加減に膨  
らんでいるのがまた、視線を強く惹き  
付けた。

極上の女である。街を歩けば十人中  
十人がこの女を振り返って見つめるこ  
とだろう。篠塚だってそうだ。いや、  
振り返るだけじゃ収まらない。間違い

なく犯すだろう。嫌がろうが知ったこ  
とじゃない。気に入った女がいれば犯  
す——これまで何度もやってきたこと  
だから。

だというのに、この女に対して篠塚  
は動揺の声を上げていた。勃起してい  
るといふのに、犯そうという気も起こ  
らない。ひたすら戸惑っていた。  
「どういうことだ? お前……人間な  
のか?」

理由は簡単——女の背に蝙蝠を思わ  
せる羽が生えているから。悪魔を思わ  
せる尻尾が尻から伸びているから。決  
してそれは作り物なんかではない。

「人間? 勿論違うわよ。私はね……  
淫魔。いわゆるサキュバス。貴方の精  
気を吸い尽くして……ぶっ殺してあげ  
ようかと思つて来たの♥」

女は最高の笑みを浮かべる。が、笑  
つてはいるけれど、本気の殺気を感じ  
た。全身から血の気が引いていく。  
(ヤバイ。こいつはヤバイ……)

理由は分からないが本能が警告を発  
する。だというのに、逃げることでで  
きない。どうしてなのだろうか? 女  
の紅い瞳を見つめていると、身体が硬  
直し、指の一本すら動かすことができ  
なかった。

「動けないでしょ? これがね、サキ  
ユバスの力。幻惑の魔眼なの。私に見  
つめられた男は、身動き一つとること  
ができなくなる。動けないまま、私に  
殺されるの。でも、別にいいわよね?」  
語りながら女は掌で肉棒を抜いてく

る。シコシコと手を動かされるだけで、  
すぐにも射精してしまいそうな程の  
快楽を覚えてしまった。

「貴方はこれまで多くの女を犯して、  
殺してきたんだから……。だから今更  
自分だけ助かろうなんて思わないわよ  
ね。それに……死ぬっていつても極上  
の快楽——まさに死ぬ程気持ち良くな  
って死ぬるんだから、寧ろ感謝してく  
れるわよね」

肉棒への刺激は手コキだけではない。  
膨れ上がった胸の谷間に、篠塚の肉棒  
が差し込まれた。柔らかな肉の感触が  
伝わってくる。まるで陸に挿入した時  
の様に、柔肉が肉茎に絡みつき、すぐ  
にでも射精してしまいそうな愉悅を感  
じた。

(ダメだ。射精してはダメだ。射精し  
たら死ぬ……)  
が、本能が警告を発する。射精をし  
たら死ぬ——息を止めれば呼吸困難で  
死んでしまうのと同じくらい自然にそ  
う思えた。

「ふん。なかなか我慢するわね。で  
も、我慢は身体に毒よ。ほら、こんな  
におちんちんが熱くなってる。すぐに  
でも射精したいんでしょ? ほら……  
んっんっんっ……先っぽからヌルヌル  
した汁が出てきたわよ」

女が乳房を使って肉棒に刺激を与え  
てくる。実際肉先からは半透明の先走  
り汁が溢れ出し始めていた。  
先走り汁と女の汗が混ざり合い、グ  
チュグチュと卑猥な音を奏でる。肉棒

に伝わってくるのは柔らかな肉の感触。  
柔肉で肉茎を抜き上げられるだけで、  
全身が蕩けてしまいそうな程の愉悅を  
覚えてしまう。

「んふふ……ほら、こういうのはろ  
う? んちゅ……ちゅるるる……」

べちゅつ、くちゅるる……

「うあつ!」  
舌が肉先に触れる。ペニス先端の秘  
裂をなぞりつつ、トロトロと唾液で肉  
茎全体を濡らしてきた。それが潤滑液  
となり、ジユクツジユクツと胸での刺  
激を強くしていく。

「んふーんふーんふー……凄く大き  
なってきた。ほら、もう射精そうだし  
よ? 先っぽが爆発しそうなくらいに  
膨らんでいるわよ」

「や、止めろっ! 止めてくれえ」  
死にたくないという気持ちと、これ  
まで味わったことのない極上の快楽に  
溺れてしまいたいという二つの想いが  
交差する。泣き出しそうな悲鳴を漏ら  
してしまふ。

女の言葉通り、今まで篠塚は大勢の  
女を犯して殺してきたが、自分はまだ  
終わりがたくなかった。まだまだ女の肉  
を味わいたかった。こんな非現実的な  
最後など認められない。

「結構耐えるのね。でももうお終い。  
ほら、これには耐えられない……れし  
よ? んじゅるるるるるるっ!」

じゅずつ、じゅずずずずうっ!!  
女が肉先を咥える。美しい頬を窄め、  
容赦なくペニスを吸い立ててきた。

「う、うああっ!!」

限界まで張り詰めていた篠塚に耐えることなどできない。下腹部から押さえようもない射精感が、マグマの様に湧き上がってくる。抵抗などできなかった。肉棒は一瞬で膨れ上がり――。

どびゅぶつ!! どつびゆるるつ!!

「んぶつ! んふううつ!!」

女の口腔へ大量の精液を撃ち放った。

「んじゅつ、ごきゅつごきゅつ……じゅちゅちゅうう」

射精を続ける肉棒を女は激しく吸引してやる。喉を鳴らし、濃厚な牡汁を飲みさえしていた。

「うあつ、うああああ! おああああああああああああああ!!」

篠塚は悲鳴を上げる。口腔射精だというのに、これまで犯してきたどんな女に対する射精よりも心地よかった。自分のすべてを射精してしまったかの様な感覚が全身を包み込む。ピクピクと篠塚は全身を震わせながら、意識を愉悦の中に沈めていった。

\*

「んふ……けぶつ……なかなか美味しかったわよ」

精気を吸われ、死んだ男の亡骸を見つめながら淫魔――リーン||レイン||リドベルグは微笑んだ。

「またお口で……それではダメだといっているではありませんかお嬢さま」  
パタパタという羽音と共に、説教がましい声が飛ぶ。リーンは男の死体から視線を離すと、フウツと溜め息をつ

きながら窓の外へと視線を移した。

「五月蠅いわよシン。そんな私の勝手でしょ」

窓の外には一匹の蝙蝠がいる。名前

はシン。リーンの使い魔だ。

「勝手とかそういう話ではないです。いいですか、お嬢さまは誇り高き淫魔

なのです。淫魔というのは、男の精を吸り、命に、力に変える最強の魔物の一つです。膣で精気を吸いさえすれば、かの魔神転生の儀に参加できる程の力を得ることだって可能だというのに……。いつもいつも口で……」

ブツブツと小言を繰り返してやる。

リーンは「あーもう五月蠅い」と自分の耳を押さえた。

「口の何が悪いっていうのよ。いいじゃないこうして精気を吸えているんだから。第一ね、私は儀式に参加して魔王になろうだなんてこれっぽっちも思っていないの。私は好き勝手にできればそれでいいんだからね! それに」

そこで言葉を切り、リーンは精気を失い干涸びている男を指差す。

「幾ら力が入るからって、こんな男に私を抱かせるなんて真つ平ごめんよ。こんなクズみたいな奴に……」

無理矢理女を犯し、殺す――許せるはずがない。こんな男が生きていると考えるだけで虫酸が走る。たとえ被害者がちつぽけな人間だったとしてもだ。その様な連中に自分を抱かせるなど考えたくもない。それで力が上がるとしてもだ。

淫魔にしては妙な考え方だというこ

とは自分でもよく分かっているけれど、持つて生まれてしまった性分なのだから仕方がない。他人に不幸を撒き散らすような奴を許せないのだ。シンや他の淫魔、魔神達になんといわれようと、こればかりは変えられない。

それに――。

(や、やつぱり怖いし……)

自分は淫魔であるから、当然いつか性交をする日は来るだろうが、まだ踏ん切りが付かない。淫魔族の中でも初体験はもうかなり遅い方になってしまっているのだが、こればかりは仕方がないことだ。

「やつぱり怖いんですか?」

その悩みを読んだかの様にシンがか

らかいの言葉を向けてくる。  
「う、うっさい黙れ! そんなことじゃないの。クズには抱かせたくないっていつてるだけ!」

ムキーツとからかいに反応してしま

う自分が少し情けない。

「……はあ、誇り高き淫魔が処女とは……ご先祖様が聞いたら泣きますよ。というか、末代までの恥です!! それに少し心配ですよ。今のやり方ではお嬢さまは真の力を発揮できない。いつかそれで大変なことになったら……」

こちらの反応を楽しみつつも、彼は本気で心配してやる。

「フンツ。大変なことになんかならな

とはいえそれは余計なお世話だ。実

際人間など単なる捕食相手ではない。

「その通りだとは思いますが……」

淫魔が人間に敗れることなど有り得ないという事実は、シンも理解している。が、それでも彼はどこか心配そう

な表情を浮かべていた。

「……ここに南方みなたがいるのね」

数日後、リーンは町外れに建つ屋敷大きな屋敷の屋根の上にあった。庭の中に平気の家が「二、三……いや、十戸程は建ちそうな程広い敷地の屋敷だ。

屋敷の主の名は南方泉水。職業は呪術者である。呪術を使用することで政

財界の大家に取り入り、これ程の屋敷を所有できるだけの地位を得た人物だ。「それだけの信頼を得られるだけの呪術者だからね。それなりの代償――生

け贄を使つて貰ってますか……まったく

「女を犯して貰とするか……まったくのクズね。生きてる価値ナシ」

リーンが普段人間界にて根城にして

いる救世神社に、南方を罰して欲しいという人間が多数訪れてきた。誰もが術者に対する憎悪と、失つた者に対する悲しみを露わにしていた。

たか人間ではあるけれど、悲しむ姿は見たくない。これ以上派手する人間を増やしたくない。淫魔としてはおかしな考え方も知れないが、本気でリーンはそう思い、ここに来た。  
「気をつけて下さいよお嬢さま。南方は……」

「分かってるわ」  
それに南方が殺した者は人だけではない。

淫魔喰いの南方——サキユバスであれば一度は聞いたことがある名前だった。これまで何人も同族が南方によってやられていた。

（これまで何故放っておいた？）

呪術者の存在に気がつかなかったとはいえ、彼を放っておいた自分を罰したい気持ちだった。

南方の寝室は魔力で探知している。相手が相手だけに決して気を抜かず、リーンは呪術者の部屋に侵入した。

「……淫魔喰いの屋敷なのに……少し簡単すぎませんか？ 嫌な予感が……」

シンが心配そうに呟く。

「……私が凄すぎるだけでしょ。あんたは心配しすぎ……ん？ いたわ。よく寝てるわね」

室内には豪華なベッドが置かれていた。そこに南方泉水が眠っている。年齢は四十台半ばといったところだろうか？ ぶくぶくと肉の詰まった頬が醜い。身体全体が肉塊の様に膨らんでおり、大いに食欲を減退させた。

だからといって喰わないワケにはいかない。淫魔には淫魔なりのやり方というものがある。

「起きなさい南方……南方泉水」

リーンはベッド——南方の腹の上に乗ると、妖艶な口調で語りかけた。

「……ん？ な、何だ？」

ゆつくりと南方は瞳を開ける。

「私を見なさい？」

目と目があう。刹那、リーンは幻惑の魔眼を発動させた。

どの様な相手であっても、自分の指揮下に置いてしまう恐るべき魔眼の魔力が、瞳を通じて南方の全身を支配していく。

「こ、これは……貴様……さ、サキユバスか……」

すぐに男は自分の身に何が起こったのかを理解した様子だった。

「そういうこと。悪いけど、もう貴方はお終いよ。ふふ、淫魔殺しといったところで、所詮は人間か。よくもこの程度で今まで私の同族を滅ぼせたわね」

如何なる術者とはいえ、眠っている時は無防備。魔力抵抗などあったものではない。

「お前は罪を犯しすぎた。お前には勿体ないけど、快楽の中で死になさい」

布団を剥ぎ取り、男の股間に腕を伸ばす。ガウンの上から肉棒に手を添えた。魔眼の力により、陰部は既に熱く勃起している。

「硬くなっているわよ」

フワッと笑いながら語りかけつつ、何度か服の上からそこを撫でた後、ガウンを剥ぎ取り、下着を脱がせ、勃起した陰茎を露わにした。

「ブッ！ くく、何よこれ。情けないおちんちんねえ」

剥き出しになったモノは、皮を被つ

た包茎ペニス。大きさもリーンの中指くらいしかないだろうか？ 思わず笑ってしまう。

「ふふ、こんな粗末なモノなの？ 多くの人間を殺し、淫魔を喰らってきた者のモノとは思えないわね。それとも何？ こんなモノしか持っていないから歪んじやつたわけ？」

肉棒を見下しながら、勃起ペニスを手を添えると、シコシコ手コキを始めた。一度抜くだけで、ペニスは何度もビクビク震える。

「うああっ！」

南方が悲鳴を漏らす。

「ちょっと敏感すぎるんじゃない？ これじゃあ女を犯しても挿入れる前に射精しちゃってたんじゃないの？」

男の情けない姿が小気味よかった。悪党などこれくらい情けない姿を晒して死ぬべきなのだ。

「くううう」

悔しそうな呻きが漏れる。

「こんなに敏感じゃ……これですぐにイっちゃいそうね」

当然手淫だけでは終わらない。リーンは移動し、自分の顔を肉棒へと近づけた。吐き気が湧き上がってきた程の臭臭を感じる。ただ、それと同時に淫魔の男を求める本能も刺激された。不快感を覚えつつも、醜悪なモノに唇を近づけ――

「んふっ……んちゅううう……」

じゅぶつ、くぶちゆるるう。

ペニスを啜る。口腔に熱気と臭気

が広がる。塩気と苦みを含んだ味に、思わず眉間に皺が寄った。

「くっ、や、やめっ！」

南方の口から悲鳴が上がる。情けない男は悶える。この姿に不快感以上の快感を覚え、肉棒に舌まで這わせた。

「んちゅうつ、んちゅうつんちゅうつ……ろう？ ひもひいれひよ？ ほりや、こうしやれるのが……ちゅずるるる……しゅごくいいれひよ？」

上目遣いで挑発しながら、包皮へと舌先を突き込み、亀頭部を舐め回す。同時にジユズズッと下品な音を立てながら、肉茎を吸った。

「も、もうやめっ、止めてくれえ」

まるで少女の様に醜い男が喘ぐ。悪党の情けない姿程見えていて楽しいものはない。肉棒を啜えながらリーンは微笑みを浮かべ、チュッポチュッポと更に激しくペニスを責めた。

「おひるがいつぱひあふれちえきたわひよ……んちゅうう……しゅごくにがひ」

先走り汁がどんどん口腔に溢れ出し

てくる。口腔粘膜と汚汁が混ざり合うのが分かった。それと共に肉棒も大きさを増していく。口唇で扱かれ、唾液塗れとなった肉茎が、一回りも二回りも大きさを増した。

（何これ？ こんなに大きくなるものなの？）

最初に啜えた時よりも、倍も大きくなっている気がする。ペニスとはここまで形を変えたものだろうか？

少し確認してみたい気になり、口を離そうとするのだが――。

「むぐつ！ んぐうつ!!」

突然後頭部に南方の手が回された。幻惑の魔眼も、本能的な動きまでは押さえることができない。

喉奥まで肉棒が突き入れられる。

「ちょ、ひゃめつ――んぶつおぶえつ！ んぐつ、んぐうううつ!!」

慌ててこの動きを止めようとするが、呪術者には届かなかつた。男は本能の赴くままにといつた様子で無理矢理腰を振り出し始める。

「じゅごつじゅごつじゅごつ！

「んええつ！ ぐひつ!! んもつほおつ、んもおおつ!!」

激しいピストンが何度も喉を襲う。突きごとに肉棒は更に大きさを増していった。

「な、なんつれ？ こ、これ……：こ、こんなに大きかった？」

相変わらず包皮を被ったままの包莖ペニスだというのに、いつしか口腔が裂けてしまうのではないかというくらいに、肉棒は膨張する。

「おつぽ、んぼつ、んぐえええ」

ずつちゅずつちゅと喉奥を犯され、息が詰まった。口端からは唾液が溢れ出す。それが顎を伝い、ポタポタと垂れ流れた。

「で、射精るぞおつ!!」

やがて南方が限界を告げ、これまで以上に激しく口腔へとペニスを突き入れてくる。

「じゅばんつじゅばんじゅばんつ！

「んじゅつ、んつちゅ！ ちゅつぽつちゅつぽつちゅつぽつ!!」

女の膣を犯す時の様な激しいピストンだった。玩具の様にリーンの頭は揺すられる。喉奥を突かれるたびに目の前が真っ白になった。

やがてペニスは今にも破裂しそうな程に大きさを増し――。

「ぶびゅぶつ！ どびゆるるるつ!!

「んぶつ！ んむううううつ!!」

多量の白濁液が淫魔の口腔へと撃ち放たれた。味覚が麻痺しそうな程の苦みと、口腔が火傷してしまうのではないかと思う程の熱気が広がっていく。射精量は尋常ではなく、一瞬で内側からプクツと頬が膨らんだ上、

「んびよっ!!」

リーンの両鼻からも白濁液が噴き出した。まるで鼻水の様に精液が垂れ流れる。

「んえ、んぶええええ……」

吐き出したい程の不快感だったが、吸精の為にはこれをすべて吸らなければならぬ。

「んぐつ、んごきゅつんごきゅつ……：げぼつ、げぼお……」

「こ、これでこいつをぶつ殺せるんだから、す、少しは我慢しないと……」

「じゅずつ、じゅずつ……」

何度も咳き込みつつ、淫魔は口腔に溜まった精液をすべて飲み干した。

「んふあああ……ろ、ろう？ 天国を見ながら死ねたかしら……：けぶつ」

吐き出す息も白濁液臭くなっている。口まわりも精液、唾液で汚れたままで格好はつかないが、精を失い死んだはずの南方に語りかけた。

「いや、まだだ。これじゃ足りないなあ」

「――え？ な、ど、どういうこと？」

ベッドに転がった術者が笑う。サキユバスに吸精された人間は、射精と同時に死ぬはずなのに……。

実際肉棒も未だに勃起を続けている。寧ろ射精前より大きくなっているくらいだった。

「どういふことも何もないさ。俺は淫魔喰いだぞ。まさかこの程度の吸精で本気で俺を殺せると思ったのか？」

ベッドに横たわったまま男は笑う。

「……なるほど。普通の人間とは違うというワケね。でも、だから何？ だったら死ぬまで精を吸ってやるわ」

瞳を見開き、再び幻惑の魔眼を発動させようとする。少し動揺してしまつたが、所詮相手は人間でしかない。生きていけるなら死ぬまで吸精を続ける。それだけのことだ。

「それは楽しみなだ。だが、悪いが……：口だけじゃあ楽しめないんだよ。お前のマンコを使わせてくれ」

「いなり南方は起き上がる。有り得ない。この男には魔眼の効力が及んでいないはずなのに!!」

「くっ!!」

「無駄だぞ」

ならば更に魔力を込めて――と思つたのだが、それさえも通じなかつた。それどころか、リーンの身体はベッドに押し倒されてしまう。

淫魔は身体能力でも人間を遙かに凌ぐ存在だというのに、南方の力に抵抗することができなかつた。簡単にベッドに組みしかかされてしまう。何故だか全身に力が入らない。

「ど、どういうこと？ な、何をした!!」

「なあに簡単な話だ。先程お前が飲んだ俺の精液に、呪術を組み込んでおいたのさ。これで貴様は本来の力を発揮することはできず、犯されるだけだ」

醜い男が舌なめずりをする。

「犯される？ こんな男に？」

「こ、この私が……お前の様な男になど……：こ、殺すわよ!!」

「殺すか……：できればいいなあ」

ニタニタ男は笑いながら、リーンのホットパンツに手をかけてきた。股間部がずらされ、大切な部分が晒される。髪と同じ紅い色をした陰毛に隠された処女地が、南方の醜い視線に犯された。

「や、やめなさいっ！ き、汚い手を離しなさいっ!!」

「ジタバタとリーンは暴れる。

「無駄な抵抗は止める。ほれ、こういう行為はお前達にとつては極当たり前の行為だろ？ 犯した俺から精気を吸えばいいだけの話じゃないか」

陰部は先程精気を吸つた為に、既に湿り気を帯びていた。秘裂は左右に開

き、ピンク色の柔肉が覗き見える。  
「これは美しい女陰だなあ。まるで処女みたいだよ」

屈辱的な言葉に頬が紅くなった。同時に南方は身体中を撫で回してくる乳房に触れられ、腰をなぞられた。それだけで蜜壺からはジュワリッと愛液が溢れ出し、肉襷を濡らしていく。一族の仇である男に全身を虜られるなど、屈辱以外の何ものでもない。  
くちゅりっ!

「ひっ!」

肉先が添えられた。生温かな感触が伝わってくる。思わずリーンはピクリッと身体を震わせた。

「り、リーンお嬢さまあつ!!」

シンが室内に飛び込んできたのはその刹那のことである。

「五月蠅い」

一直線に南方に向かう使い魔。その彼に対して呪術師は一言だけ発し、魔力を発動させた。

「うぎゃああああああつ!」

ただの一撃でシンは絶叫を上げ、室内に落下する。そのまま動かなくなってしまった。

「し、シンッ!!」

大切なパートナーがやられたことに、思わず悲鳴を上げてしまう。

「勝てない相手にも主人の為に立ち向かう。素晴らしい忠誠心だ。だが、力がなければどうにもならない。そこで主人が犯されるのを見ているんだな。お前も使い魔に見られながら犯される

のは興奮するだろう?」

南方が笑いながら語りかけてくる。  
「う、五月蠅い。黙りなさい……。私を犯す? いいわよ。やってみなさい。でも、必ず後悔することになるわよ」

正直言えば処女を失うのは恐ろしい。しかも、この様な醜い男に自分の初めてを捧げるなど考えたくもない。

しかし、それ以上に怒りがある。自分の大切な使い魔を倒されて怒らない主などあつてはならない。

(私は淫魔だ。私を犯した者は尽く死ぬことになる。それを知るのがいいわ)

リーンは覚悟を決めて南方を睨んだ。「いい目だ。是非後悔させてもらいたいものだな」

ニタリッと笑いながら男は腰を進めってきた。

ぐじゅっ、ずじゅゅう……。

「んあつ……は、挿入……」

初めて味わう感触。身体の内側が異物によって押し広げられていくのが分かる。肉棒の熱気が直接陰部に伝わってきた。

「ほほう、これはなかなかいいぞ。肉が絡みついてくる……。今まで多くの淫魔を犯してきたが、その中でも極上の部類だ」

「そ、そう……ほ、褒めてくれてありがと」

正直いうと全身が強張っていたが、余裕の笑みを浮かべてみせる。この様な人間に弱みは見せられない。  
「ではもつと味わわせてもらおうか」

これを受けて南方は更に腰を進めてきた。

ずぶ、じゅぶぶぶぶ……。

「く、んんんんん」

(お、おつきい、こんなの……裂ける。私の身体が裂けちゃうつ!!)

胎内に杭でも打たれているかの様な感覚に悲鳴を上げそうになつてしまふが、必死に耐える。唇を噛み締め、男に対して憎悪の視線を向け続けた。

その動きが止まる。

「ん? これは……」

何かに気付いたかの様に南方がこちらを見た。彼が何に気付いたのか——それが分からない程無能ではない。

「そ……そうよ……。わ、私は処女……で、それがど、どうか……した?」

膣道を押し広げられることに苦しみ、荒い吐息を吐きつつも、怯える様な姿を見せる気はない。

(こんな……こんな奴に私の……私の初めてを……。痛い。痛いの……いや、嫌よ……こんなのいやあ……)

心中の涙や不安は表に出さない。

「いや……そうか。これはなかなか楽しめそうだ。くく、俺も淫魔喰いを始めて長い、サキユバスの処女を奪うのはこれが初めてだよ」

「……か、必ずあんたは後悔することになるわ。それだ、けは最初に、警告しておいてあげ……る」

何でもない。処女を失うなど、どうということはない。淫魔にとつて性交は食事と同じ。それを恐れてどうす

る? 何でもない。怖くなどない。

心の奥底で何度も自分にいい聞かせながら、敵を睨む。

「なかなか気が強いな。そういう女は嫌いではない。くく、だが、後悔するのはお前の方だ。俺を淫魔喰いと知つて襲つたのは失敗だったな」

敵が腰を突き出す。

ぶぢっ、ぶぢぶぢぶぢいっ!

「んぐひっ! くっ、んひひひ!!」

何かが破れる音が確かに聞こえた。破瓜の傷みが全身に走り、結合部から一筋の血が流れ落ちる。

「ぶぐっ、くふーくふーくふー」

(は、挿入……わ、私の膣中に……こ、こんな男のモノが……)

自分の身体が腐ってしまうのではないかと思う様な不快感だった。

「どうだ女になつた気分は?」

膣奥まで肉先が届いているのが分かる。亀頭が子宮口に触れていた。

「……さ、最高の気分よ。こんなことなら……もつと早くやつておくべきだったわ」

女として最も大切な場所に、醜い男が触れているという状況は、死にたくなる程に屈辱的だったが、決して表に見せることはない。余裕の笑みを敵へと返す。

「なるほど。ではもつと心地よくしてやるよ。女の喜びを俺が教えてやる」

いいながら呪術者はこちらに顔を近づけ、口付けをしてきた。

「んむっ!? んんん、んじゅっ、ん、

ふじゅううつ」

ちゅくつ、くちゅくちゅ、ちゅう。

口腔に舌が差し込まれる。身の毛もよだつ口臭と、呪術者の唾液が流れ込んできた。舌が舌に搦め捕られる。グチュグチュという淫浪な水音が響き渡った。

ずちゅちゅつ！

「んひあつ！」

しかも南方の行動はキスだけでは終わらない。唇を重ね合わせたまま、突き込んだ腰を引き抜いてきた。

(な、膣中で……私の膣中で動いている) 異物が肉壁を擦り上げる。途端に身体中が痺れる様な刺激が走った。肉壁が震える。

当然引き抜くだけでは終わらない。膣口を肉先が引っかけたかと思うと、今度は肉奥にベニスが突き込まれる。

「んふあつ！」

ズンツと胎内に刺激が響く。途端にリーンの口からは悲鳴が漏れた。(なにこれ？ 何なの？ ど、どうして？ どうしてなの？)

痛みだけではない甘い刺激を感じてしまう。初めて感じるベニスの刺激に戸惑いだけではない焦りすら覚えてしまった。

「その声……感じてるんだろ？ 処女を失ったばかりだというのに、もう感じてるんだろ？」

「か、感じてる？ そ、そんなことあるはずないでしょ——あんん」

敵に感じさせられているなど認めら

れない。大体破瓜したばかりで感じるなど有り得ない。

(そう、これは感じてるワケじゃない。絶対に違う！)

首を振って呪術者の言葉を、自分自身の感覚を否定するが、突き込まれた腰が動くとうしても甘味を含んだ悲鳴が漏れ出てしまう。

腰が少し動いただけだというのに、全身から力が抜けていった。

(何なのこれ？ どうなってるの？)

自分でも何故この様な刺激を覚えてしまうのか理解できない。

(駄目よ。か、感じるなんて絶対に駄目。こいつは敵なのよ！ 最低のクズなんだから!!)

必死に自分にいい聞かせ、感覚を遮断しようともがいた。

「嘘はつかなくて大丈夫だぞ。いいか、淫魔は男を喰らう種族だ。食事に苦痛を感じてどうする？ 当然普通の人間、妖魔、魔神よりも感じやすくできているんだよ。とはいえだ、今回の場合は俺のモノが凄すぎるんだけどな幾ら淫魔であつても、流石に初めてでこまで感じることは普通ないと思うぞ」

「だ、だから……か、感じてないって、い、いつてでしよ……」

たとえ本当に感じてしまっていたとしても、敵の言葉だけは認められない。(感じるはずがない。そんなことあるはずがないの!!)

心の言葉は願いにも近い。「そうか……ではこれでどうかな？」

じゅごつ！

「んあああつ!!」

リーンを嘲笑うかの様に、これまで以上の勢いで膣奥に肉棒が突き込まれた。途端に目の前が真っ白に染まりそうな程の刺激が走る。しかも、突き込みは一度では終わらない。

じゅばんつじゅばんつじゅばんつ！

「んくひつ！ ひつひつひつ！ ちよ、と、とまつ——おっく、奥に当たってる！ や、やつめ、止めなさい!!」

ギシギシとベッドが軋む程の勢いで南方は腰を振り始めた。ズンツズンツと何度も膣奥が肉棒で叩かれる。

「止める？ どうしてだ？ 感じてないんだろ？ 感じてないのなら、このままでもいいじゃないか。それともお前は感じてるのか？」

「か、感じて……ハアツハアツハアツ……なんか、なつい！ ん、あつあつ……首を横に振る。この状況であつても敵から与えられる刺激を認めるわけにはいかない。

「だろ？ だつたら、どんなに俺が腰を振ろうが関係ないはずじゃないか？ ほら、ほらほらほら」

じゅごつ、ぐじゅごおつ！

男のピストンは単純に肉奥を突いてくるだけではなかった。時折突き込む角度、深さを変え、蜜壺全体を蹂躪してくる。

「くっひ！ んあつんあつんああつ!!」

(こ、擦られてる。私のなつかが、こ、

擦られて。び、ビリビリする。身体がビリビリするう！ 何？ これ何!!)

淫魔ではあるが、今までリーンは自慰すらしたことがなかった。故に肉体に感じる刺激は、これまで味わったことのない未知のもの。戸惑いながら抑えることのできない嬌声を漏らしてしまふ。

しかも、刺激は膣中で肉棒が膨張すればする程強くなっていく。挿入されたベニスは、口淫をした時以上に大きくなっていた。

「だつめ、さ、さけつる！ お、大きすぎて、わ、私のあ、アソコが裂けちゃう！ あうっあうっあううう」

「この大きさがいいんだろ？ ほら、ここを突かれて気持ちがいいんだろ？」

膨れ上がった亀頭の形が、膣壁越しに伝わってくる。まるで自分がベニスの一部にでもされてしまったかの様な感覚だった。

「ひいっ！ ひいひいひいっ!!」

肉莖で膣道を擦り上げられるだけで、全身が蕩けてしまいそうな感覚さえ覚えてしまう。ズンツと膣奥を突かれると、愛液がジュワツと溢れ出した。

「とま、とまつて！ あつあつあつあつ！ とまつてええええええ!!」

首を左右に振って必死に懇願してしまふのだが、男は聞く耳などもつてはくれない。それどころか悲鳴を上げれば上げる程、より激しくリーンを犯してきた。



ハア？  
肝試しだア!?

そーそー  
噂の旧校舎にさ  
行ってみよーぜ<sup>かみと</sup>神人

パス  
どーでもいいわ  
何だよ付き合い  
ワリーなアー

——この学園では  
行方不明者が  
多発している



そして  
生徒たちの間で  
こんな噂話が  
広まっている

行方不明となった  
生徒が旧校舎に  
魔物や悪霊となつて  
現れるという——

ホラ皆早く  
席つきなさい

授業  
始まるわよー

あ委員長

オレはそんな噂  
興味ねーけど…

でも…

そういえば  
今日転校生  
来るんだっけ？

全く男子は…

カワイイ子だと  
いいなー！

オカルトめいた  
話を聞くとふと  
アイツのことを  
思い出す…

# 幼馴染みは退魔剣士!?

美少女×魔物のセクシーバトルが短期集中連載で開幕!!

妙な神社に住んでいた…アイツのことを――



紫乃  
退魔剣士  
第一話

漫画  
COMIC

NO. ゴメヌ



うっっ…神人お…

引っ越して…遠くへ  
行っっちゃっても…

わたしのこと  
わすれちゃ  
いやだよ…

泣き虫で  
いじめられっ子  
だった幼馴染みの紫乃



よくオレが  
助けてやったっけ…



それは—



えーでは

授業を始める前に  
転校生を紹介する

入ってどうぞ



………

あつ…

今何してんだろうな…

キーン  
カーン…

ガッガッ

そして…

ねーねー天火さん  
どこから来たの？

何か変わった  
名前だよね！

趣味は？

ねえよかったら  
今日一緒に帰らない？

ってかそのずっと  
抱えてるヤツ何？



あまほ  
天火紫乃だ

よろしく頼む

突然の  
再会だった――



フン → アイツ

あ…  
あれ？

おーい  
紫乃ー！！





先生に旧校舎に行った  
宮野達を連れ戻して来い  
って押し付けられたわけか

う……うん……  
であの噂あるでしょ？  
一人じゃ怖くて……

旧校舎に  
近付いては  
ダメだぞ  
絶対だぞ！

委員長はそうやって  
何でも引き受けちゃうから  
いいように使われるんだよ

だ……だって……

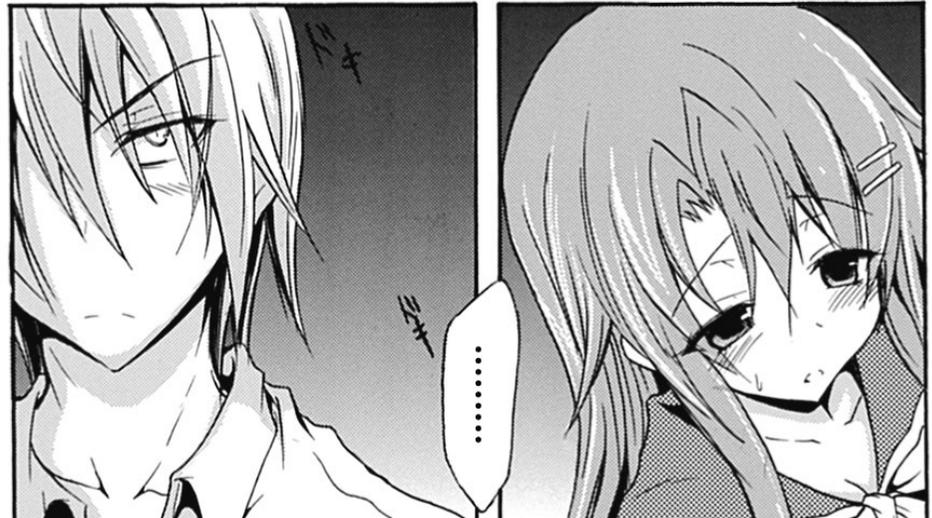
ま……  
宮野達を  
連れ出して  
すぐ出れば  
大丈夫だろ……

あ……あの……

手……  
放さないでね……

ん……ああ……

分かッ——





委員長長ッ!!

!?

きゃあああ  
あああッ

な…何だこれ!?  
体が…

動か…

ひッ—



…ククク…  
コイツハ貴様ノ  
女力？小僧  
ヨク見テオケ  
楽シマセテ  
ヤルゾ？

あッ

みッ見ないで

いやッ

やッ…

ひッ

!?  
クハッ  
クハッ  
クハッ

あああ  
あああ  
あああ

あああ  
あああ  
あああ



な…

何故…  
あったかい…?

ニイ…  
サン…

…サン…

それは  
遠い遠い記憶



# 魔天使の リエル

後篇

漫画 おおたけし

その昔

本来  
禁止されている  
天使と魔族の  
交わり…

愛して  
ますっ  
愛してるわっ

出っっっ

授かるのは  
天使と魔族の双子と  
決まっていた

そっちは  
魔界への裂け目だ  
危険ですっ!!

お戻りを!

あーっ

あっ

だめですっ

二人とも  
大切な私の…

我ら  
マルアークが  
消滅させます!

その子たちを  
お渡し下さい!



女神の散った後に  
残されたのは  
黒い翼の子供と

出来そこないの  
白翼を持った  
蛭子の双子

二人ともが  
半魔半聖  
だった



くすん



ついて  
くんな!

お前が  
キモくて  
かつこ悪い  
せいだっ

だから  
いじめられ  
るんだっ!



コイツ  
魔物くせー!



ニヤニヤ...



なんか天使  
くさくね?

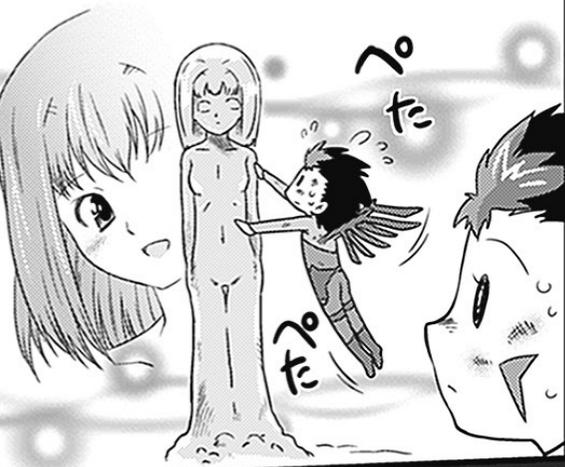


マジ??  
やっちまおーぜ

ポッ

あ  
うん  
それ強そう





蛭子はそれに  
霊を与える事が  
できると気づいた

黒翼は  
泥人形を  
創り



羽なんかいらぬ!!  
聖でも魔でもない  
ボクらだけの国を  
創るんだ!

きつと  
永遠に幸せな  
世界ができる!

新たな命を  
勝手に  
創り出すなど  
なんたる冒瀆!!

しかし...  
何故お前ごときが  
魂を与えられた  
のだ

だが—

ボクには  
出来るんだ

白の力しか  
持たない  
お前らなんかより  
ボクはずっと  
スゴいんだ!

どうしても  
わからん  
なぜ誰も成しえなかった  
完全な命を創り出す  
事が出来たのか

半魔の血が  
未知なる災いを  
呼んだのでは...

醜いな  
見ろこの  
魔力の色を

穢れた  
おろか者よ!

禁忌を犯した  
罰を受けよ!



五千年の  
氷結牢獄

ボクの国は  
奪われた

新しいイキモノなど  
秩序の乱れだ  
滅ぼすしかあるまい

まあまで  
天界の老人は  
気が早いな

人間とやらの魂は  
容易に余や貴様らの  
魔力になじむ

アヤツラを  
糧にするのか

善き魂は  
貴様に

悪しき魂は  
余の魔界に

協定を!

気の遠くなる  
年月...

なんで...

なんで  
だよ

ボクたちは  
全ての者の  
記憶から  
消えていった...



# イセリア 英雄戦記

*the Legend of the Iseria War*

解き放たれてしまったメイズ四。  
その奥から蠢き出る魔物を食い止めるため、  
疲労した身体を鞭打ち戦う女王と槍騎士！  
しかし、ついに体力の尽きた牝たちは、  
**孕み奴隷へと堕ち果てる！**

第15話 絶望の種、撒かれる

き もり や ま す い どう  
小説 **木森山水道**  
NOVEL

ぼ た ん  
挿絵 **牡丹**  
ILLUSTRATION

IV

戦いに敗れたエルスは、メイズVIIの  
一室で女錬金術師スレアIIエタームに  
より嬲らされていた。

魔法で陰核をペニスに変えられ、  
散々射精快楽を味わわれたのち、今  
度は焦らし責めを受けている。

「はああ……エルス様のオ●ンポ、射  
精したくてビクビクしてますわあ」

天井から垂れる鎖により、頭上で両  
手を縛られている槍騎士の背後から  
エルスの肉槍を扱っている。

精液塗れの前垂れをかき分けて覗く  
ペニスは、見るだけで女を火照らせる  
巨根だった。亀頭は真つ赤に膨らみ、  
精液を吐きたくてウズウズしている。

「ああ、ハア、ハア……い、いやです  
わ……もう射精するのですか!」

他の場所で慰みものにされているア  
リオナを救うには、敵の責めに耐え抜  
いて隙を突かなければならない。

そのためには、快楽に流されず、心  
身を大きく消耗させられる——これは  
散々射精させられて気づいた——射精  
を繰り返さないことが肝要だった。

その意味では焦らし責めは好都合な  
のだが、エルスの身体はうなじから足  
指まで引き攣りつ放しで、意識は灼  
き切れる寸前だった。

射精して楽になりたい、屈服して墮  
ちてしまいたいという衝動が心の中  
根付いて蔓延っている。

「残念ですわあ」  
それが魔法発動の言葉だった。スレ

アの目は魔導具で、見るものを凍らせ  
る力がある。その力を極弱く発動させ、  
射精間際の男根から熱を奪う。

「あああああ……」  
すると肉棒の興奮が鎮まって、射精  
欲求だけが残る。焦らされるほど、射  
精への渴望は濃密化する仕組みだった。

「我慢せずに墮ちたらどうですか?」  
胸当てをなくして露出する半球巨乳  
を揉みしだきながら、また手淫して  
く。

鶯色の乳首は陰核ペニスに負けない  
くらいに勃起しており、摘まれただけ  
でもあられもなく叫ばされる。

他の性感帯も絡める陰湿な責めに、  
エルスはもう何時間も耐え続けていた。

「んあああ、が、ガルドオ様あ、もつ  
とお……いやらしいアリオナに、あな  
た様の牝奴隷に、子種汁を注入して  
くださいん♥超トロルの赤ちゃん孕  
ませてください♥♥♥」

「あ……アリオナ様……う……そ」  
エルスの目の前にアリオナがやって  
きた。敵の超トロルに背後から突かれ  
ながら、四つん這いで這って。

王冠に首輪、白羽のカラーに首飾り。  
ここまではいつも通りだが、他に身に  
着けるのは首輪と同じデザインの腕輪  
に、イセリアの紋章の飾りを垂らした  
金鎖の腰巻だけだった。

量感溢れる釣鐘型の爆乳が重力に引  
かれて垂れていて、鶯色の乳首が気持  
ちよさそうにビクついている。

結合部からは粘り気の強い白汁が床  
に向けて糸を引いていた。

魔物と女王からは、噎せ返るほどの  
汗と体液のにおいが漂ってくる。

「ほう、まだ正気を保つてたか」  
「はい。女王様をお救いするのだと頑  
張ってらっしゃるのですよお」

スレアが意味ありげな視線を送り、  
「なるほどな。おい牝奴隷、お前の口  
でこの騎士から一発抜いてやれ」

「はい♥ ああ、エルスのオ●ン●ン  
美味しそう……こんなに震えてさぞ辛  
かったでしょう……今棄にします」

ガルドオの下腹で尻を押されながら、  
エルスの肉棒にむしゃぶりつく。

「じゅぷつ、あむつ、んはあつ、エル  
スのオ●ンポ美味いわ♥ お口にず  
つしりきて、たまらない♥♥」

「お、おやめく、ださいアリオナ様つ、  
正気に戻つてえ!」

「やめてなんて嘘つき♥ こんなにバ  
キバキに勃起させてるくせに♥ 本当  
は気持ちよくドっピュンしたいのでし  
ょう? 私もエルスの精液を飲みたい  
の、飲ませて頂戴♥」

舌の真ん中と裏側を使って亀頭を舐  
め回し、カリの裏をしつこく擦る。咽  
奥まで啜え込んで舌を伸ばし、表面の  
凸凹で竿をヤスリがけ。

アリオナの奉仕は、身体の芯を強烈  
に痺れさせ、腰から下を猛烈に熱くさ  
せる。頬を回ませてズズッ! と吸  
引されれば魂が吸い込まれているよう  
な濃密な快感で頭が白む。

(ああつ……アリオナ様があ……)  
絶望が、エルスに忍び寄る。

「おらおらつ、そろそろ出すぞ牝奴隷、  
そいつも一緒にイかせてやれ」

「はい、ガルドオ様♥ あなた様の牝  
奴隷は子種汁を膣に頂戴しながらエル  
スのザーメンをゴックンします♥♥」

「さあ、エルス出して♥ 遠慮なく、こ  
の牝奴隷のお口でいって、臭くて濃い  
ザーメンをたくさんドクドクして♥

あなたは今まで頑張ってきたのだから、  
もう我慢しなくていいの♥」

その言葉が、エルスの論念を誘う。  
守りたかった女王が墮落してしまっ  
たのなら、もう自分が耐える意味もない。

「おら出すぞ牝奴隷つ、騎士をイかせ  
ながら俺様の子を孕めつ!」

「孕みます♥ エルスの精液を飲みな  
がら魔物の子を妊娠します♥♥♥」

「ああつ、アリオナ様あ、飲んで、私  
の精液飲んでえつ!」

肉悦を貪るふたりに釣られ、とうと  
うエルスが欲望を吐露し、  
「ドビュウツ、ドブウツ……!」「ん  
あああ♥ 孕ませ種汁とふたなりオ●  
ンポミルクウウウ♥♥♥」

放出された精液を、アリオナは丁寧  
に処理した。膣内の汁は、腹に力を込  
めて一滴も零さないよう閉じ込める。

夥しい量の粘り精液をえずくことな  
く嚥下して、もつと吐かせようと亀頭  
の先をレロレロ舐め、鈴舌を吸引する。

「んくつ、エルスの精液とつても濃い♥

咽に絡みついて、落ちがたくて♥」

「あああつ……アリオナ様……」  
尖りをなくした吹きを残り、エルスがガクリと首を垂らす。墮ちたふたりを、敵のふたりは勝ち誇った顔で見ている。

## I

美女ふたりと魔物一体がメイズVIIの一隅で対峙している。双方の距離は百メートルほどだった。

ちよつとした集落くらいあるこの場所は、壁が太陽色に光っていて昼間のように明るい。

「ほう……思ったよりもやるじゃねえか……人間にしてはな」

ゴロツキの親分声の魔物が呟く。自分を全滅させられたというのに、その顔には焦りも恐怖もない。

腰みのひとつの筋骨隆々の身体は人間よりも一回りは大きい。

トロルの外見をし、ヴィリジアンを肌を持つこの魔物は、トロルの上位種である「超トロル」だった。

「残りはお前ひとりですわ！」  
貴族の優美さと、騎士の勇猛さを同居させる美声が響いた。

まだ二十歳前だが、縦に巻かれたレモン色の長い髪は洗練された美しさを見せ、アメシストの瞳は歴戦の騎士に劣らぬ闘志で輝いている。

引き締まった美体を白銀の軽装鎧で包み、腰から下がる前垂れに仕える国の紋章を刻む。指貫グローブで握るの

は、羽根の模様が刻まれた長槍。

それは、イセリア英雄公国第三騎士団長、エルスIIマイハムデルト。

「エルス、油断しないでくださいね」  
槍騎士にかかった美声は、聖母の慈愛と花の儂さを宿していた。

精巧な薔薇模様を散らした純白ドレスが、子を産んだ熟体を覆っている。

膝裏まで豊かにうねるレモンイエローの髪に、優しげに垂れた目、乙女のようにほっそりした手足が少女の可憐さを醸し出すのは、アリオナIIプリティッシュ。現イセリア英雄公国女王。

エルスとアリオナのふたりは、行方不明の女王の消息を知るために、望むものを見せるといふアイテムを求めてメイズVIIに降りた。

だがそれは、裏切り者の文官、バッシュIIザロームの罠だった。

ふたりは陥れられ、結果、メイズVIIの封印が解けてしまう。

最悪の事態に際してアリオナが下した決断は、バッシュの追撃ではなく、地下から這い出る魔物たちの撃退。

そんな戦いを繰り返していたふたりは目の前の魔物と出合い、けしかけられた子分を殲滅したところだった。

「くつくつく……もう勝った気ではないが……楽しみだぜ……お前らの絶望する姿がなあ！」

呪文で丸太じみたロッドを召喚し、それを掲げてさらに魔法を唱える超トロル。すると、その背後が陽炎のように揺らめき出した。

「なっ!?!」

エルスとアリオナの驚愕の声。揺らぎが収まった時、そこには夥しい数の魔物がひしめいていたのだ。

リザードマン、ケンタウロス、マミー、デューラハン、エトセトラエトセトラ。どれも高レベルの魔物たち。総数三百はくだらない。状況を考えれば、超トロルの手下なのだろう。

「アリオナ様、これは……」

「おそろくは、魔法で光の屈折に干渉して『何もない空間』の虚像を生み出し、壁にしていたのでしょ」

戸惑う女騎士に、近隣諸国でも指折りの魔法使いである女王が、険しい顔で解説する。

見抜けなかったのを悔やんでいるのだろう。それだけ、超トロルの力量が高いのかもしれないが、女王がそこまで疲労しているという可能性もある。

エルスはアリオナを庇うように前に出る。と、軍勢から女が抜け出てきた。

「バッシュIIザロームの情報通りですわねガルデオ様。強く美しく……だから、調教し甲斐のある女たちで」

見た目は二十代中盤ほど。フェイエン武踏会で見られるチャイナドレスが、起伏に富んだ美体を包んでいる。

丸くえぐられた襟ぐりからは、のっそりと鎮座する巨乳の深い谷間が覗いていた。腰骨からのスリットが、ムチムチした太腿の長い美脚と、蝶結びにした紐ショーツの結び目を見せている。

セミロングの黒髪が左目を隠し、右

目にはモノクルがかけられている。青い瞳は学者の知的さを滲ませているものの、目尻は婀娜っぽく垂れていた。

左胸の黒薔薇を始め、プレスレット、アンクレット、首飾り、指輪とやたら装飾品を着けているが、ケバケバしさはない。金色の「鳳凰」をあしらった真紅のチャイナドレスとともに魅惑的な容姿と妖艶な雰囲気醸し出す。

「まったくだぜ、スレア」

ガルデオはしなだれかかってきた女の肩を抱く。スレアは尻を撫でられ、胸を揉まれても「あん……」と色っぽく喘ぎ、媚びた流し目を送るだけ。

「無理矢理従わされてる風には見えませんわね。どうやら魔物の味方……いえ、愛人かしら」

エルスが女への不快感を露わにしたが、アリオナの反応は違った。

「バッシュIIザローム……彼を知っているのですか？ 彼は今どこに？」

メイズVII開放の黒幕の名を、女王は聞き逃さなかった。

「あいつなら死にましたわよお」

「繋がりのある俺様に、お前らの始末を命令したが……あんまり偉そうだったんでぶち殺してやったんだよ」

女王の顔が哀しげに曇る。慈愛に満ちた女王らしい反応だった。

「さて、そろそろ第二ラウンドというじゃねえか……死なねえ程度に痛めつけて、牝奴隷に調教してやるぜ！」

それが、合図となった。  
「ファイアウォール！」



女は接近しながら呪文を呟いた。すると長衣は、左胸を飾る黒薔薇の細工物へと変じた。空気抵抗が少なくなつた分、さらに速度が上がる。

「お覚悟くださいませ」

懐に飛び込み、槍騎士へ拳を向ける。(この身体の運び方……素人ですわね。胸当てで受けてカウンターを……)

ドガッ！ ドンッ！ ズルルル……

「ああっ！ あがッ！ ……………ッ」

細腕のパンチがあつさり胸当てを碎き、エルスを壁まで吹き飛ばした。

モノクルの女が、腕一本で引きずつてきたエルスをアリオオナの前に放つた。「エルス！」

ピクリともしない槍騎士。

くずおれるアリオオナ。凶事のせいだ緊張の糸が切れたために、これまで無視してきた疲労が一気にのしかつた。

「ワタシのブレスレットは肉体硬度の上昇と怪力付与の効果があるんです……だから、素手でこの騎士に止めを刺すのもあなたを殺すのも簡単です」

だが、青い瞳には殺気が見えない。

「お初にお目にかかります女王様。ワタシはスレアIIエタームと申します」

「スレアIIエターム……！」

かつて魔導に詳しい側近に聞かされたことがある。

非常に腕の立つ錬金術師で『宝珠』と言う伝説の道具を生み出せるらしい。

その手段は、魔法で生やした男根で女の腔に体液を流し込むこと。孕ませ

た時、子でなくそれができると言う。

無論、普通なら女が女を孕ませることでもできない。だから、吸血鬼のように、自身の体液に何らかの力を付与するのは、という話だった。

「私はどうなつてもかまいません……でもエルス……その騎士は……」

スレアは答えず、代わりにアリオオナの下腹に手を添えて呪文を唱えた。女王の知らない魔法だった。

「これでよし……あとは『力ある者』の精液を腔にたつぷり注がれば、『子宮枷』が活動し始めますわ」

「え……？」

意外な台詞に戸惑う女王。バッシェにでも聞いたのだろうか。スレアは『子宮枷』について知っているようだ。

それは、メイズVIIの封印を保つのに不可欠な生きるマジックアイテムで、今は彼の策略で休眠状態に陥っていた。そのせいで、封印が解かれたのだが。

「力ある者の精液……？」

スレアが顎をしゃくくる。そこには虫の息のガルデオが。

「あれでもそれなりに強力な魔法使いですから、資格は十分でしょう」

(魔物の腔内射精させる……？ なら、魔物の子を妊娠する可能性が……)

おぞましさに戦慄するアリオオナ。だが自分の身ひとつで民を守るのなら、

「あなたは味方なのですか？」

女は妖艶に微笑むばかりで答えない。味方かわからない以上、従わないと

エルスにも害が及ぶかもしれない。今の疲弊した自分では彼女を守れない。アリオオナは心を決めた。

## II

「足を肩幅に開いて手は両脇だ」

扇情的な姿のイセリア女王に、ガルデオが命令する。魔物はアリオオナが目的のために回復させた。

(こんなことになるなんて……)

女王は屈辱と恥辱で目眩を憶えるが、イセリアやエルスのために逆えない。

スレアはもういない。錬金術でアリオオナの衣装を変えた後、エルスを連れて消え失せている。

先ほどまで戦場だった場所は、ガルデオの虚像魔法によってイセリア城の謁見の間になつていた。

どつかり座る玉座はガルデオが自分の転移魔法で召喚したものが、イセリアの玉座と同じデザインだった。

そんな魔物とアリオオナを、大臣や騎士団長などイセリアの首脳が囲んでいる。女王と亡夫も混ざつており、皆無表情で女王の美体を見詰めている。

「げへへ……どんな気持ちだ？ こんな風景の中で、そんな姿をするのは」

イセリアの王冠に首輪、純白羽のカラーに公国の紋章を象つた首飾り。

ここまではなら普段と同じなのだが、他には、首輪と同じ意匠の腕輪を両腕に嵌め、紋章と同じ意匠の飾りを複数

垂らした金鎖の腰巻のみだった。

十年以上に及ぶ悪戯好きな『子宮

枷』との共生で、女性ホルモンをふんだんに分泌させられた結果、アリオオナの身体は人並み外れて磨かれていた。

中身がたつぷり詰まつた釣鐘型の爆乳も、柔らかく窄まつた括れも、脂の乗つた腰まわりと尻肉も、金の飾り物に負けない煌めきを放っている。

長い手足はホッソリしていて、子持ち熟女というより乙女のものに近かつた。

染みひとつなくきめ細かい乳白色の美肌は、恥辱の汗で覆われている。ツヤを増した、清楚で肉感的な美女体はガルデオの腰みのを隆起させている。(見られている……私のこんな姿が)

魔物の視線はギトギトの油のように粘つく、顔や胸や太腿、股間にじんわりとした圧迫感を憶えさせる。虚像の家臣たちの目を意識しても、同じ類の圧力を感じてしまう。「じゃあ、宣言から始めようか。『イセリア英雄公国女王アリオオナはガルデオ様の牝奴隷になります』と言え」

一瞬目が眩んだが、逆らえないことを思い出し、血を吐く心地で口を開く。「はい……イセリア英雄公国女王、アリオオナIIブリティッシュは、あなた様の牝……牝奴隷です……」

「よし。では本当に俺様に相応しい牝奴隷に調教してやる」

優越感と劣情混じりの卑しい笑みを浮かべ、女王を玉座の前に跪かせる。「うっ……」

ガルデオが腰みを取つた途端、獣

臭さと精液を混ぜて濃縮したような汚臭がぷくんと漂ってきた。

「どうだ、俺様のものは！」

亡夫のものを遙かに凌いでいた。

ナイフ以上の長さに、棍棒を連想させる太さ。表面は体色と同じ暗い緑色を基調としているが、使い込んでいるせいでドス黒さが濃い。紫色の血管がビクビク浮いているのも凶悪だった。

すっかり剥けている亀頭はツルツルしていた。暗い緑とドス黒さと紫色が混じった毒々しい表面色を見せており、膨らみ振りは握り拳を思わせる。カリは野生キノコ顔負けの張り具合だ。

「こいつを舌だけで掃除してもらうが、始めはキスだ。先っぽにやれ」  
(うう……でも、従わないと)

嫌悪と屈辱を押し殺し、従属宣言した者らしく従う女王。

恭しく汚巨根を両手で挟み、肉厚な牡丹色の唇を、まるで伴侶と口づけを交わすように、そっと鈴口につける。

「ぐひひひ、イセリア女王にチ●ポキスさせちまつたぜ。よし、掃除だ！」  
女王を屈服させた実感で勃起をビクつかせながら命令する魔物。

「……はい……ガルドオ様のものを綺麗にさせていただきます」

「ん？ おい待て。「もの」なんてお上品な言葉でなく「チ●ポ」と言え」  
(チ●ポ……？ そんな言葉を)

咽まで反論が出かかったが、機嫌をそこねてはいけないと思ひ直す。

ゴクリと咽を鳴らして心を決めると、笑顔の上目遣いで言葉を紡ぐ。

「はい……これから、ガルドオ様のチ●ポを……見ているだけでドキドキしてしまふ男らしいオ●ンポを……牝奴隷の卑しい舌で綺麗にいたします」

魔物を回復させる前、役に立ちますよと言いながらスレアが教えてきた卑しい言葉を交せる。

効果観面で、ガルドオが満足そうに頷いた。勃起がますます反り返る。

胸中で安堵すると、アリオナは唇を大きく開き、舌を突き出す。

ペタンとお尻をつき、両手を股間の前に揃える、犬の『お座り』の姿勢のまま細い首を伸ばす。

鈴口にそっと舌の真ん中を接地させた時、口内へ汚臭が雪崩れ込んできた。

(嫌……気持ち悪いにおい……)  
眉根を寄せて耐えるアリオナ。おらずと亀頭に舌を這わせる。

(すぐく熱い……しかも硬くて……まるで火かき棒のよう……)  
興奮の高熱を帯びている亀頭は、ずつしりとした量感と硬さを持っているのにプリプリで、舐めているだけで舌がじわつと妖しく痺れてくる。

「高貴な女王のピンク色の舌が俺様のモノを這いずり回る様は最高だな」  
魔物の卑猥な贅辞がみじめさを感じ知らせて胸をチクチク痛ませるが、目の奥に力を込めてその苦痛にこらえる。

言われるままに亀頭をレロンレロンと舐め、こびりついた恥垢と精液の塊

を舌のザラザラで拭う。

汚れが溜まると、はしたないと思いつつ手になすりつけようとしたが、「待て。そのまま飲むんだ」

(この汚れを飲めと言おう……?)  
それは許してと涙目で哀願するが、魔物はギロリと睨んで許容しない。

仕方なく舌を口腔に引っ込めて、唾液で薄めると、ギョッと目を閉じた。咽を鳴らすと、飲んだことを証明するために口を開けて舌を突き出す。

「ぐははは、俺様のチンカスをイセリア女王が飲みやがったぜ！ カリの裏と皮の繋ぎ目も丁寧にやれよ」

外にグワッと張り出す亀頭冠の裏を、尖らせた舌に一周させる。汚れがなかなか取れない部分が多かったので、舌を何度も往復させた。

しつこく舌で擦られる快感から、ペニスは何度も跳ね上がり、アリオナの唇や頬を打つ。

「いいぞ、その調子で続ける」  
「ちゅ、は、はい、はふっ、ちゅる」

汚根が触れるのは不快だったが、アリオナは微笑みを保ち続けた。

「ああ、たまらん……お前の口も顔もいやらしすぎるぞ……おっ……!!」  
アリオナの目の前で太腿を粘つくく震わせながら、ガルドオが告げる。

竿でビクビク脈打つ血管が、アリオナを犯したくてたまらないと言うガルドオの心情を代弁している風だった。

ズクン……ズクン……ズクン……  
(……え……膣が……)

嬉しそうに震える巨根を見ているアリオナの胸と膣に、甘い疼きが走る。(まさか……私は魔物のペニスを欲しがっているの……?)

膣のこんな反応は「子宮枷」には感じたことがないが、愛夫と閨をとともにしていた時に憶えがある。

(相手は敵……下劣な魔物なのに)  
思っても膣内の反応は止まらない。戸惑いながらアリオナは奉仕を続けた。

「はああ……いい、卑しい牝奴隷のアリオナが……綺麗にいたしました」

膣近くまで反り返る剛棒は、亀頭の先から根元までがアリオナの唾液でヌラヌラと鈍く光っていた。

立ちのぼる蒸気は、アリオナの唾液と甘い口臭、それにガルドオの牡エキスがブレンドされていて、嗅いでるだけで頭がクラクラしてくる。

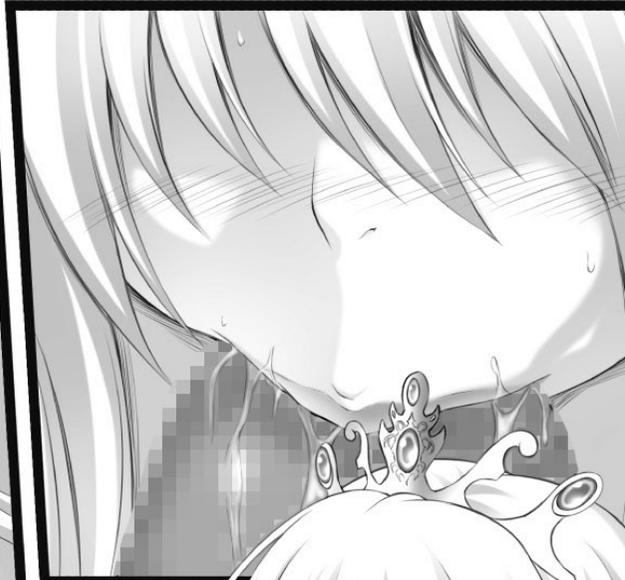
「背中を向けて俺様の腰に跨がれ。お前のいやらしいマ●コに俺様のチ●ポのよさを味わわせてやる」

玉座に座りながら傲然と言いつつガルドオ。そそり勃つ剛棒は槍頭だけで、亀頭の前からはジクジクと先走り汁が滲み始めていた。

(こんな人並み外れたペニスが入るの……? こんなにおぞましいペニスを、受け入れなくてはならないの……?)  
ドクン……ドクン……

おののくアリオナ。だが、同時に甘い胸の高鳴りが起こる。

(でも……こんなものを膣に入れたらどうなってしまうのかしら?)



女の魂に埋め込まれている生殖本能——逞しい牡棒との交尾願望がむくむくと頭をもたげてる。

長い間『子宮枷』によって性的快感はたつぷり味わわれてきたが、肉棒による快楽は久しく味わっていない。そのせいで、目の前のペニスに心身が落ち着かなくなってきたのだ。

アリオナはブリティッシュが慈愛に満ちた人格者であり、大魔法使いとしての強靱な精神力を持つ人間であることは疑いのないことなのだが、それで肉欲から逃れられるわけでもない。

(魔物のものなど嫌だけれど……イセリアのために仕方がないから……) 言い訳めいた台詞を胸中で繰り返す。その顔はすっかり上気して、瞳には欲望の色が見え隠れしている。

アリオナはゆつくりと肘掛けによじ登ると、はしたない蟹股になった。両手を敵の膝に添えてバランスを取る。充血して厚みを増した大陰唇が、物欲しそうに開閉を繰り返す様子が露わになり、汗と愛液が混ざった甘酸っぱいにおいが周囲に立ち込める。

秘裂からはトトロ口の愛液が滝のように流れ、そそり勃つペニスの先端に降り注ぐ。

犬の『お座り』を行儀よくしていただけに、太腿もベトベトに汚れていた。「俺様のチポを舐めただけで発情していたとは……くく、今乗にしてやる。ゆつくり腰を下ろせ」

(ああ、私は魔物相手にこんなはし

たなく……でも、仕方ないのだから)

ガルデオの指摘はアリオナの良心にグサリと突き刺さったが、その痛みで女王の興奮が霧散することはなかった。反対に妖しいときめきが濃くなつていく。空虚な膈内が微熱を帯び、肉ヒダがきゅんきゅん震えている。

「牝奴隷のアリオナ、オ●ンポを膈内に嵌めさせていただきます……」スレアに教えられた卑語を口走ると、頭の中を恍惚感の電流が駆け抜けた。後頭部がふわりと軽くなり、身体がカッと熱くなる。

陶醉で膝をガクガクさせながら、ゆつくりと腰を沈めるアリオナ。にゅちや……じゅぶぶぶ……。厚い花弁を内側に巻き込みながら、使込まれた汚らしい亀頭が入口を突破する。

熟成されて谷間の深い肉ヒダを捲り返しながらカリがじわじわ進んでいく。亀頭は灼熱を帯びていて、征服された媚肉が容赦なく灼かれる。

「んああ……はああ……！」全身に夥しい数の汗珠が浮き、肌にかけて粘つく痙攣し、花弁からどつと愛液が漏れた。

「おおつ、こりゃあミミズ千匹か……ブラシみてーな肉ヒダがチ●ポの至るところに絡みついて……マン汁でぬかるんでからさらにイイときてる……おら、もつと深く唾え込め！」

挿入快感に我を忘れたガルデオが、

細腰を掴んでじわじわと下げる。

「ああ、熱いつ、太いつ……奥まで入ってくるうっ……んんっ！」めりっ、めりっ、と膈内が化け物のペニスの形に拡張される。カリで肉ヒダを捲り返される度に、電撃じみた鋭い快感が背筋を貫き、牡肉でみっちり満たされる充足感が湧いてくる。

「はあ、はあ……ああッ！」子宮口をズン、と叩かれた瞬間、アリオナの顎が上がり、咽笛が晒された。金の首飾りを押しつけながら乳房がブルンツと宙を舞い、汗が散る。

下腹では厚い花弁が目いっぱい広がり、ドクドク脈打つ極太竿を噛みつくように唾え込んでいる。隙間からとどまなく漏れ出る愛液がペニスをヌラヌラに染め上げて、甘酸っぱいにおいで包み込んでいる。

(あ……すごい……気持ちいい……) 清らかな魂をも蕩かせるドス黒い快感が女王の身体を満たしていた。

悪戯者の『子宮枷』や亡夫のペニスを超える圧倒的な存在感は、女としての悦びをこれでもかと言うほど教え込んでくる。

鼻先で何度も火花が飛び散り、膈内がジンジン疼いて、早く抜き差しをして頂戴と催促している。

「入れただけでうっとりしやがって……この欲求不満女王め！ デカパイが膨らんで乳首もピンピンじゃねえか」緩やかに腰を振りながら、片手で釣鐘型の爆乳を鷲掴みにした。

「サイズはいくらだ、ん？」

手からはみ出す乳房を荒々しく揉みながら尋ねる。乳玉は弾力よりも柔らかさが勝っていて、無骨な指をどこまでも食い込ませた。

ギュッと握られるだけで甘く息が詰まる。指の谷間から覗く鶯色の乳首がピンクピンクと律動し、桃色がかかった乳肌が断続的に引き撃つていた。

「はあ、ああ、きゅ、きゅうじゅうななです……ああッ！」平素では絶対口にしない言葉も、巨根の魔快楽と進む乳悦で頭が霞がかった。出てしまおう。

「ぐへへ、魔物なんかそんなことまで教えやがって……おつ、膈が締まりやがる……イクのか、牝奴隷よお」

「ああ……は、はい……牝奴隷のアリオナは、ンっ、いきそうで、あん」切なげに眉をたわめながら、魔物の快楽に支配された女王が腰を振る。

「ジュズッ！ ジュボツッ！ ズズッ！ ガルデオとアリオナ、魔物と女王が息を合わせて睦みあう。

腰巻の飾りがカチャカチャとやかましく鳴り、結合部からぶしやぶしやと愛液が散る。ふたりの下腹部から太腿にかけてが、互いの汗と汁で染まる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**